

宮崎県文化財調査報告書

第 2 2 集

昭和55年3月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第 2 2 集

昭和55年3月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては、文化財指定のための調査、また、開発工事等において偶然発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて、毎年報告書を刊行しております。

今回は、国富町、えびの市、野尻町、高原町で発見された地下式古墳と延岡市熊野江積石塚、高崎町上示野原遺跡の7件を報告するものであります。

本書は、本県の文化財解明のための一資料として研究に活用していくとともに、年々失なわれていく埋蔵文化財について十分認識していただき、なお一層の御理解と御協力を願うものであります。

なお、この調査にあたられた県文化財保護審議会委員及び県埋蔵文化財調査員並びにこの調査にあたり種々御配慮いただいた地元教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和55年3月31日

宮崎県教育委員会

教育長 四 本 茂

例　　言

1. この報告書は、宮崎県教育委員会が実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書であるが、野尻町大萩地下式横穴第36号と、えびの市平松地下式古墳54—1号については、地元教育委員会において調査されたものであって、依頼により掲載するものである。
2. 掲載しているのは、地下式古墳（横穴）5、積石塚1、弥生遺跡1の合計7件についてである。
3. 本文中、同種遺跡について、地下式古墳又は地下式横穴の名称を使用しているが、執筆者の使用にしたがつた。
4. 本書の編集は、宮崎県教育庁文化課が担当し、県文化財保護審議会委員石川恒太郎が監修した。
5. 熊野江積石塚第6号出土の人骨については、長崎大学医学部内藤芳篤教授、同分部哲秋助手の玉稿をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

昭和54年度に県教育委員会が実施した緊急発掘調査についての調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

(事務局)	教育長	四本茂
	教育次長	国府重則
	ク	坂口鉄夫
	文化課長	日高三好

課長補佐	串間 実
庶務係長	田中君彦
主任主事	王原敦美
文化財係長	山下正明
主任主事	岩永哲夫(調査担当)
々	小森達郎
々	立元久夫
々	今村正人

(調査員)	石川恒太郎(県埋蔵文化財調査員)
茂山謙	々
面高哲郎	々
北郷泰道	々



総 目 次

I	熊野江積石塚第6号発掘調査	1
	(延岡市大字熊野江2453)	
II	飯盛地下式横穴58-1号発掘調査	17
	(東諸県郡富田町大字須志田飯盛)	
III	大荻地下式横穴36号発掘調査	29
	(西諸県郡野尻町大字三ヶ野山大荻)	
IV	日守地下式横穴(古墳)54-1~4号発掘調査	61
	(西諸県郡高原町大字後川内1の119)	
V	上示野原遺跡発掘調査	89
	(北諸県郡高崎町大字大牟田上示野原)	
VI	平松地下式古墳54-1号発掘調査	107
	(えびの市大字島内字平松1135)	
VII	平松地下式古墳54-2~4号発掘調査	131
	(えびの市大字島内字平松1135)	
(付)	昭和54年度埋蔵文化財発掘調査一覧	157



I 熊野江積石塚第6号発掘調査

延岡市大字熊野江2453番地

県埋蔵文化財調査員 石川 恒太郎
長崎大学医学部教授 内藤 芳篤
助手 分部 哲秋

本文目次

I 所在地	3
II 発見の動機と調査経過	3
III 遺跡の地理的環境	4
IV 遺物	4
A 箱式石棺	4
B 人骨	5
C 弥生式土器破片	5
V 遺跡の年代と種類	7
VI 延岡市熊野江・積石塚箱式石棺の弥生時代人骨について	8

挿図目次

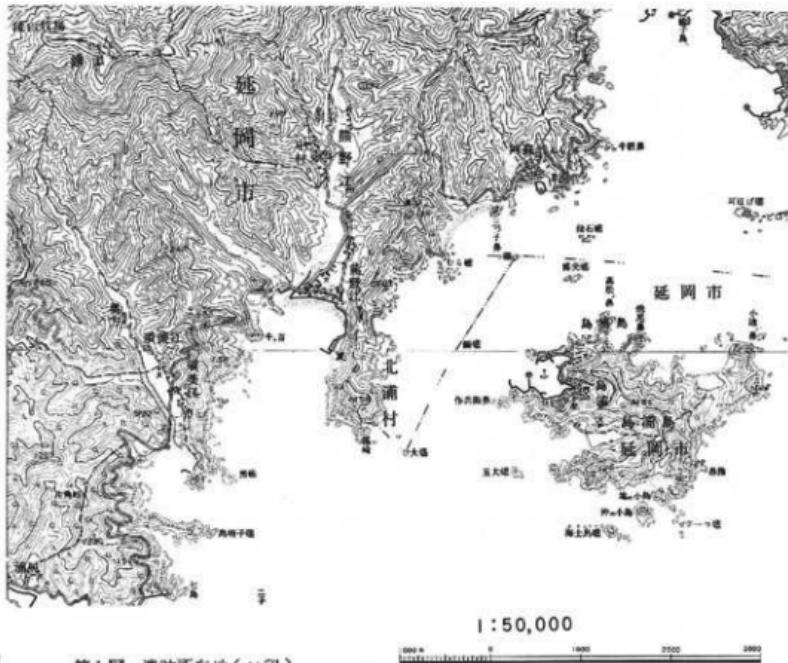
第1図 遺跡所在地	3
第2図 箱式石棺実測図	6

図版目次

図版1 遺跡の状況	13
(1) 掘り出した状態	13
(2) 蓋石を除いた状態	13
(3) 弥生式土器破片拓影	13
図版2 人骨(1)	14
図版3 人骨(2)	15

I 所 在 地 (第1図)

延岡市大字熊野江 2458番地



第1図 遺跡所在地(×印)

II 発見の動機と調査経過

昭和54年3月7日、延岡市熊野江において箱式石棺らしいものを発見した旨、延岡市教育委員会から連絡があった。説明によると、県水産課が栽培漁業センター建設工事の排水ピット掘削作業中に石棺の一部が露出しているのを発見したということであった。

現地は、昭和15年に箱式石棺5基が発見され、昭和17年6月28日に県指定史跡南浦古墳に指定された延岡市大字熊野江2458番地の一角である。熊野江の中心部から南につき出した岬の中央部西側海岸に所在する。

調査は、昭和5年3月12日～13日まで県教育委員会が主体となり、石川恒太郎を調査員とし、県教育庁主幹寺原俊文、県文化課主任主事小森達郎で行った。また、延岡市教育委員会社会教育課牧野義英主事、県文化財保護指導委員甲斐常光氏にも協力していただいた。

(小森達郎)

III 遺跡の地理的環境

遺跡は熊野江湾の東岸をなす福崎の中央西岸にあるが、『日向地誌』には、福崎について、「福崎 森山ヨリ南ニ連諸セシ山脈ノ尾、本村ト古江村トノ界、海中ニ斗出スル十余町磯石海岸ニ連ナリ以上両崎ノ間湾海トナル」

とある。森山というは東臼杵郡北浦町にある標高460.6mの山で、この山脈が現在の延岡市と北浦町(旧古江村)との境界をなして南下して福崎という岬を形成しており、その西方須美江に在る黒八重(黒礁)崎と9間が海齊となっているわけで、この福崎という岬は嵐山(184m)から103m程度の丘3個に次いで南端に158mの標高をもつ山で海に臨んでおり、この1連の丘地の頂上が延岡市と東臼杵郡の境界であるとともに延岡市と北浦町の境線をもなしているのである。そして福崎の岬は陸に接するところが狭く、南方が東西に広く、あたかも斧頭のような形をなしているが、その首部から肩部が広がっている西側に熊野江の船付場(埠頭)があり、その船付場の道路を隔てた西側に遺跡があるのである。

だからこの遺跡は後(東側)に丘地を負い、前に熊野江湾に臨むところで、以前には『日向地誌』にあるように「磯石海岸ニ連」なっていたのである。だからここを開発して磯石を除くに及んで、棺上に積まれていた石の下から棺に用いられた平石(千枚岩)が発見されたわけである。

IV 遺 物

発掘した遺物は箱式石棺1と、その中に葬られていた人骨と弥生式土器の破片2個のみであった。

A 箱式石棺

箱式石棺は千枚岩(せんまいがん)を箱形にならべて、その上に同質の岩で蓋をしているもので、弥生時代から古墳時代を通じて死者を葬る棺として用いられており、延岡市内では、ここでの遺跡をはじめ無鹿、櫻山、浦城、岡富、下平原などに広く分布しており、県下でも北方町、高千穂町、西郷村、諸塙村、日向市などから南は串間市まで広く分布している。もちろん箱式石棺にもいろいろの形式があるが、棺に底石を敷かず、蓋石の上に石を積んで、いわゆる積石塚(ケイルン)の形をなしているものが古式で、このような形式のものは殆んどみな弥生時代のものである。

石棺は第2図に見られるごとく、ほぼ東西に方位しており、蓋石は扁平な千枚岩を棺の上に3枚乃至4枚並べて棺上を封じ、その石と石との隙間に2枚乃至3枚9石を並べて隙ぎ目を封じていたものと思われるが、石質が比較的脆かったのと、上から積石の重圧がかかったため、へし曲げられたようになっ

ていて、どれまでが1枚の石か見分けられない状態であった。第2図上段と写真1を参照されたい。この蓋石で蔽われている範囲は東西の長さ中央で18.5cm、幅中央で5.5cmであった。厚さは1枚の所は5cm内外、2枚重なっている所は10cm内外であった。

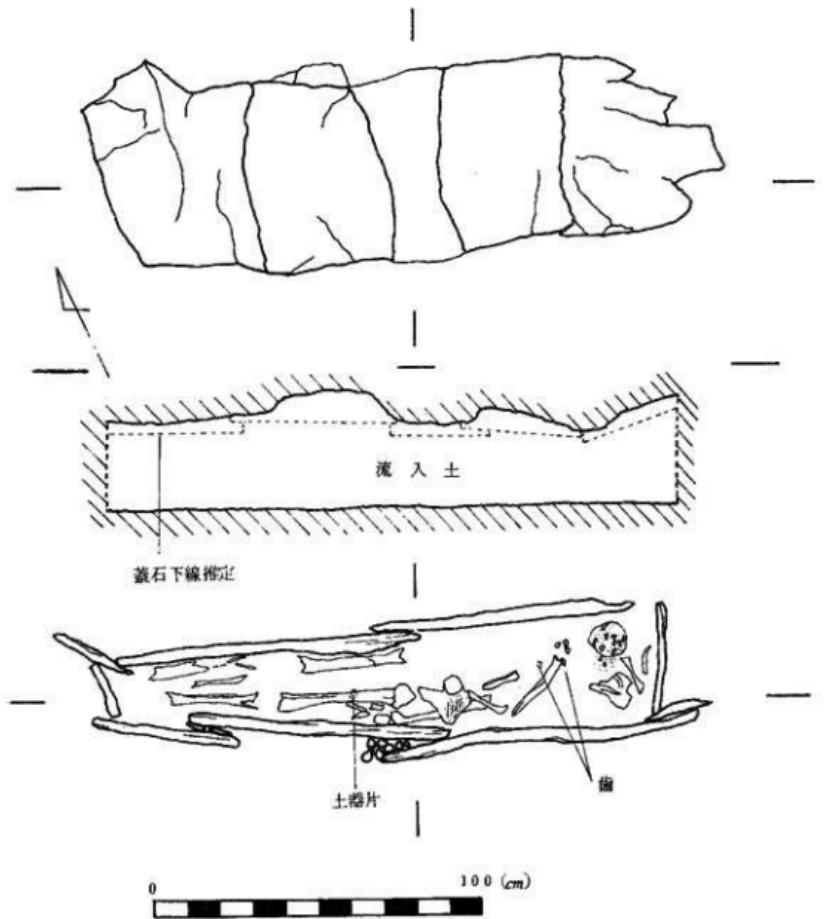
蓋石を除くと、第2図中央のように、棺内には流入土が充満していたが。この流入土を除くと、第2図下段に見るごとく、棺形はかなりゆがんでいたが、棺の南と北の両側壁はそれぞれ3枚の石を並べて造られていた。北側の壁石は西端のものが外側にはずれていた。南側の壁の長さは三枚で15.5cmであるから北側も同長であったはずである。東と西の壁はそれぞれ1枚の石であるが、東壁がやや長く、壁の長さは8.0cm、石の厚さ2cmで、西壁は長さ17cmで石の厚さは4cmである。そしてこれらの東西の両側石は南北の側石の先端から東側は1.2cm、西側は6cmのところに付いている。従って棺の内側は東西の長さ16.2cm、東と西の壁幅は東方が8.0cm、西が17cmとなる。棺内の深さは約20cmであった。

B 人骨

遺物は人骨1体と、弥生式土器の小破片2個のみであったが、人骨については長崎大学医学部教授内藤芳篤博士の鑑定を求めて、その御所見を頂いたので後に記したが、棺内の位置について一言しておく。人骨は第2図下段と図版1に見えるごとく、頭部を東にし足を西方にして伸展葬されていた。

C 弥生式土器破片

弥生式土器破片は図版1(拓影)に見るごとく、極めて小さい破片2点であるが、この遺跡が弥生時代のものであることを示す重要な遺物である。しかし余りに小さい破片であるから器形を知ることはできないが、大きい方は長さ3.7cm、幅2.5cmの三角形に近い破片で、厚さ3mmの黄褐色であり、小さい方は長さ2cm、幅1cm、厚さ7mmの表面は赤褐色、裏面はやや黒味を帯びた破片で、明らかに同じ土器の破片ではなく、別々の器の破片であることが知られる。しかし何れも胎土に石の細粒を含んでおり、大きい方は器の表裏両面に葉のようなもので調整した痕跡が見られる。去る昭和15年(1940年)にここで5基の箱式石棺が発見されたとき、筆者は当時の村長の要請によってそれらの石棺を調査したが、その時はすでに地方の人によつて棺内の入骨などをさらえて、最も山手にある1棺に合葬された後であったが、残りの石棺内を調べて人の歯数個と、弥生式土器の小破片を採集したのであった。それでこの時は副葬されていた土器も人骨とともに合葬され、残っていたのはその破片のみであったのであろうと考えたのであったが、今回の調査の結果、初めから破片が副葬されたものであることを知った。これは当時この地方で土器の人手困難のため破片を副葬する風習があったのではなかろうかとも思われるるのである。



第2圖 箱式石棺実測図

V 遺跡の年代と種類

この遺跡は去る昭和15年（1940）にここで同様の箱式石棺5基が発見されたが、今回発見のものもこれの1部であって、棺上には石が積まれて、いわゆる積石塚（ケイルン）をなしていたから、遺跡の種類としては積石塚群で、今回発見のものは熊野江積石塚群の第6号積石塚である。県下で発見されている積石塚は、ここ熊野江のほか延岡市浦城、同市無鹿、日向市平岩、児湯郡都農町、同郡川南町などであるが、箱式石棺を内容とする積石塚は、前に見たごとく弥生時代のものである。

棺内で発見された弥生式土器は、破片が余りに小さいので、その年代を確認し得る器形を知り得ないが、破片の大きい方のものに認められる藁様の圧痕や破片が薄手であることなどから弥生時代後期のものであろうと推定される。

前に述べたごとく、ここでは1940年に同じ箱式石棺が5基発見されたが、このうち最も汀線に近いものは、汀線から5~6mしか離れていないものもあった。このように汀線に近い所に墓が造られているということは、その墓が造られた時代の汀線は現代とさほど変わらなかったものと考えられ、この遺跡が縄文時代に近い頃までは遡らないことを示すものであろう。尤も現在は開発や埋立てで1940年の頃とは大いに異なっている。

さきにわれわれは西諸県郡野尻町の大荻遺跡で、赤生時代後期の墓である土括墓群を発掘し、その墓に葬られていた人々の集落をも発見したが、墓群に最も近い集落は200~300mの所にあり、墓から最も近い水田は約1kmの距離であった。この積石塚に葬られている人々も、すでに水田耕作を行なっていたと考えられるが、熊野江川の沿岸にある水田を耕作した人々の集落が河口に近い所にあったと考えると、この右原塚の距離は約1000mで、ここに墓を造ったことは丁度よい距離となる。このようになんここの積石塚は考古学的に珍らしい遺跡であるばかりではなく、熊野江地方の古代の人々の生活を復原して考える上にも極めて重要な遺跡である。

（石川 恒太郎）

延岡市熊野江・積石塚箱式石棺 の弥生時代人骨について

内藤芳馬・分部哲秋^著

はじめに

延岡市熊野江において積石塚の箱式石棺内より人骨1体が発掘された。本書別項に記載されているように、石棺内より弥生式土器2点が発見されるなど考古学的所見より本人骨は弥生人骨と考えて差し支えないものと言われているが、同地からはすでに1940年石川氏によって石棺5基の調査およびその報告がなされており、このたびの石棺もそれらと同一群をなすものであろう。

人骨の保存状態は必ずしも良好ではないが、残っていた資料について精査した結果、下記のような所見から女性・熟年骨と推定されたものである。以下その所見について述べる。

資料および所見

(1) 頭蓋骨

1. 脳頭蓋

右側の頭頂骨および側頭骨の部分が残っていた。

頭蓋諸筋の計測は不可能で頭型などを知ることはできないが、骨壁は一般に薄く、頭蓋縫合はやや密である。また乳様突起は細くて長い。

2. 齒

遊離した状態で6本の歯が残っていた。これらを歯式で示せば次のとおりである。

M₁P₁C I₁I₁ 歯は著しく磨耗し、Brocaの4度である。6本共に歯冠の大部分が消失し、咬耗は歯頸の直ぐ上にまで及んでいる。またM₁にはカリエスが認められる。

I₁I₂などの咬合面は水平ではなく、傾斜しており、本例における過耗状態は単に経年的なものではなく、食生活その他のによる特殊な咬耗の結果と考え得るものであろう。

(2) 上肢骨

1. 鎖骨

両側の鎖骨々体が残っていたが、比較的細くて短かい。

2. 肩甲骨

左側の肩甲骨が残っていたが、島口突起、肩峰、内側縁等を欠如していた。

肩甲骨は比較的大きくて頑丈である。

3. 上腕骨

左側上腕骨の下半部を残していた。

表面の剥離があり正確には解らないが、余り大きいものではない。

4. 前腕骨

左側の桡骨がほとんど完全な状態で残り、尺骨は下端を欠如していた。

桡骨

長さの割りに比較的太くて、桡骨粗面の発達も良好である。

主なる計測値は次のとおりである。

桡骨最大長	217 mm
生理的長	205 mm
最小周	42 mm
骨体横径	16 mm
骨体中央横径	15 mm
骨体矢状径	10 mm
骨体中央矢状径	11 mm
骨体中央周	43 mm
長厚示数	20.49
骨体断面示数	62.50

本例の計測値と三津、土井ケ浜両弥生人の女性・左側桡骨のそれを比較してみると、最大長および生理的長では三津弥生人(218 mm, 209 mm)より多少小さく、土井ケ浜弥生人(214 mm, 201 mm)よりやや大きい。最小周では三津(87.40 mm), 土井ケ浜(87.8 mm)両弥生人より太い。従って長厚示数では三津(17.7), 土井ケ浜(17.9)両弥生人より大きい値を示し、観察所見と一致して比較的太いことが知られる。また骨体横径では三津(15.50 mm), 土井ケ浜(15.6 mm)両弥生人より僅かに大きく、骨体矢状径では三津(10.57 mm), 土井ケ浜(10.6 mm)よりやや小さるために、骨体断面示数では三津(68.81), 土井ケ浜(69.1)両弥生人より小さい値を示し、多少扁平に傾いている。

尺骨

下骨端を欠如しているが、骨体はやや彎曲し、比較的太く、骨間縁の発達も良好であり、尺骨粗面は多少陥凹している。

(3) 下肢骨

1. 宽骨

左側の腸骨大部分が残っていた。

全般に比較的大きく頑丈で、臼部も広く、腸骨粗面はやや隆起している。大坐骨切痕は広くて円形に近く、女性のそれを思わせるものがある。

2. 大腿骨

両側共に上、下骨端を欠如し、骨体のみが残っていた。

骨体は多少彎曲し、比較的太いが、余り長くはない。骨体断面は円形に近く、むしろ横に広い感じである。粗線は明瞭であるが、柱状形成の像は見られない。

長径の計測はできないが、ほぼ中央と推定される部位において、矢状径（右2.6 mm, 左2.4 mm）、横径（右2.6 mm, 左2.5 mm）、周径（右8.4 mm, 左8.1 mm）であり、これから断面示数を求めるとき、右側が10.0.0.0, 左側が9.6.0.0となる。

女性の右側大脛骨について比較してみると、矢状径、横径では三津弥生人（2.6.3.1 mm, 2.5.4.2 mm）と大差なく、土井ヶ浜弥生人（2.5.6 mm, 2.5.0 mm）よりやや大きい。周径では三津弥生人（8.2.4.0 mm）より僅かに太く、土井ヶ浜弥生人（7.9.8 mm）よりはかなり太い。また断面示数では三津（10.1.4.5）、土井ヶ浜（10.2.8）両弥生人と大差はない。

3. 脊骨

右側脛骨は骨体一部のみであったが、左側の脛骨は上、下骨端を除く骨体大部分が残っていた。

骨体は比較的太いが、扁平性がとくに著明とは見られない。

長径の計測は勿論不可能であるが、ほぼ中央と推定される部位において、最大径は2.9 mm、横径は2.0 mm、周径は7.7 mmであり、また最小周は7.2 mmである。これから断面示数を求めるとき6.8.9.7となる。

左側脛骨について比較してみると、最大径、横径では三津弥生人（2.7.5.0 mm, 1.9.6.8 mm）と大差なく、土井ヶ浜弥生人（2.6.8 mm, 1.9.2 mm）よりは大きい。中央周、最小周では三津弥生人（7.7.0.9 mm, 7.1.7.5）とほとんど差がない。土井ヶ浜弥生人（7.8.5 mm, 6.8.7 mm）よりは太い。また断面示数では三津（7.1.9.0），土井ヶ浜（7.0.8）両弥生人よりはやや小さい値を示し、いくらか扁平に傾いている。

（4）その他の骨

肋骨、椎骨、距骨、趾骨などの骨片が残っていたが、破損がひどく充分な觀察はできなかった。ただ椎骨についてはとくに精査したが、残っていたものからは老人性に見られる変形等を見いだすことはできなかった。

（5）推定身長値

左側桡骨を用いてPearsonの方法により推定身長値を求めるとき15.3.7.7 cmとなる。

三津弥生人の推定身長値は大脛骨を用いた場合15.1.9.1 cm（2例）とされているが、左側桡骨を用いて算出すれば15.4.1.0 cm（1例）となる。土井ヶ浜弥生人については桡骨を用いると15.2.6.7 cm（2例）、また大脛骨を用いた場合は14.9.9.7 cm（16例）と報告されている。

本例の場合、大脛骨最大長を計測し得ないのは措しまるが、桡骨からの推定身長値をみると、三津、土井ヶ浜両弥生人と同様にかなり長身であるということができる。

要 約

- 延岡市熊野江において積石塚箱式石棺から得られた1体の人骨は、乳様突起、大坐骨切痕等の形状および四肢骨の大きさから推して女性と考えて差し支えないであろう。また歯の咬耗は著しいが、頭蓋縫合や椎竹片の状態から老人というよりも然年とした方が妥当と考えられる。
- 歯は右側下顎歯6本が残っていたが、ほとんど歯頸に達する咬耗が見られ、かつ咬合面が傾斜したものもあり、食生活その他による影響が考えられる。
- 四肢骨は比較的大きく、女性としては頑丈であり、桃骨および脛骨には軽度の扁平性がうかがわれる。
- 桃骨を用いてPearsonの方法により推定身長値を求めると158.77cmとなり、比較的長身である。
- 計測可能な項目について、三津、土井ヶ浜両弥生人と比較してみると、全般的によく近似しているが、そのうちでは三津弥生人に近い値を示し、土井ヶ浜弥生人よりは多少頑丈な形質を示している。
(掲筆する当たり、本研究の機会を与えていただいた宮崎県文化財保護審議会委員石川恒太郎氏、宮崎県教育庁文化課および延岡市教育委員会ご当局に感謝の意を表します。)

文 献

- 1) Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie Bd. I Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 2) 藤田恒太郎, 1962: 歯の解剖学, 7版, 金原出版, 東京。
- 3) 藤田恒太郎, 1989: 歯牙の人類学, 人類学・先史学講座, 8, 雄山閣, 東京。
- 4) 牛島陽一, 1954: 佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生時代人骨の人類学的研究, 人類学研究, 1: 273-303.
- 5) 財津博之, 1956: 山口県土井ヶ浜遺跡弥生前期人骨の四肢長骨に就いて, 人類学研究, 8: 320-349.



遺跡の状況



(1) 掘り出した状態

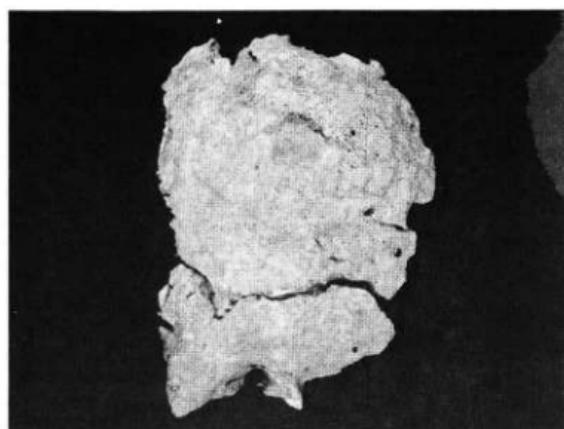


(2) 蓋石を除いた状態



(3) 弥生式土器破片拓影

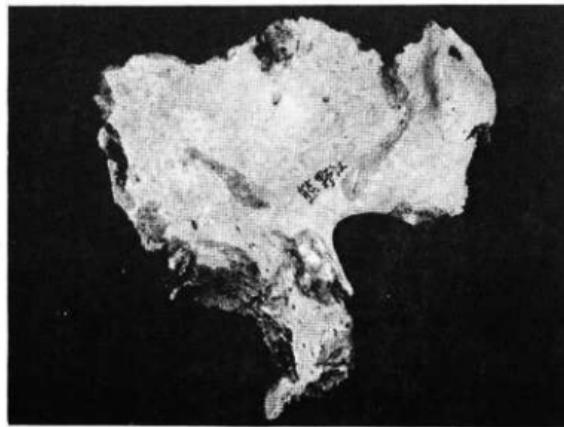
人骨
(1)



(1) 女性熟年頭蓋骨

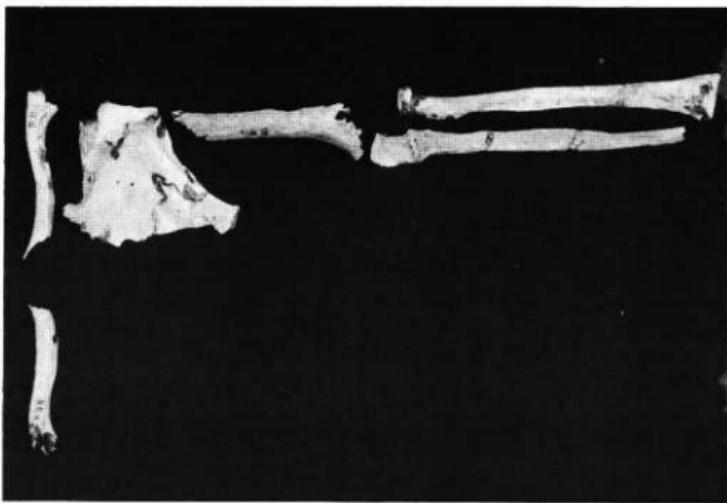


(2) 女性熟年齒

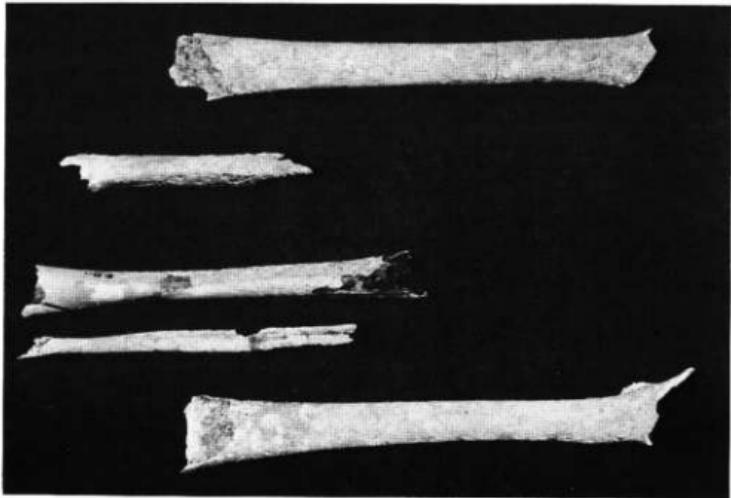


(3) 女性熟年寬骨

人骨 (2)



(1) 女性老年 上肢骨



(2) 女性老年 下肢骨



II 飯盛地下式横穴53-1号発掘調査

東諸県郡国富町大字須志田字飯盛

県埋蔵文化財調査員 面高哲郎
県文化課主任主事 岩永哲夫

本 文 目 次

I 所 在 地	1 9
II 発見の動機と調査経過	2 0
III 調査の結果	2 0
IV 結 語	2 4

挿 図 目 次

第1図 遺跡所在地	1 9
第2図 飯盛地下式横穴53-1号実測図	2 1
第3図 副葬品実測図	2 3

図 版 目 次

図版1 遺跡状況(1)	2 5
図版2 " (2)	2 6
図版3 副葬品	2 7

I 所 在 地 (第1図、図版1)

東諸県郡国富町大字須志田字飯盛



第1図 遺跡所在地

宮崎県のはば中央部には、全体として三角形をなす宮崎平野がある。九州山地と接し、平野の西端に位置するあたりは、九州山地に源を発する河川により形成された洪積台地、および丘陵が南東方向に発達している。その1つ、深年川、綾北川により形成された丘陵、中ほどの標高約70mの平坦地において、本地下式横穴が発見された。この丘陵上には、国指定の前方後円墳など47基の高塚古墳群本庄古墳群の他、多くの地下式横穴も発見されている。本地下式横穴の所在する飯盛においても、本庄古墳群に含まれる前方後円墳2基、円墳6基があり、また地下式横穴が昭和42年12月、46号附近にて1基、昭和48年1月、47号附近にて1基の計2基が発見され、石川恒太郎氏により調査されている。(注1)

今回発見された地下式横穴は、本庄古墳群第44号前方後円墳の南南西約70mの位置にて発見されたものである。

仮に飯盛地下式横穴53-1号として記述する。

注1 石川恒太郎「国富町飯盛の地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書、第13輯 昭和13年

II 発見の動機と調査経過

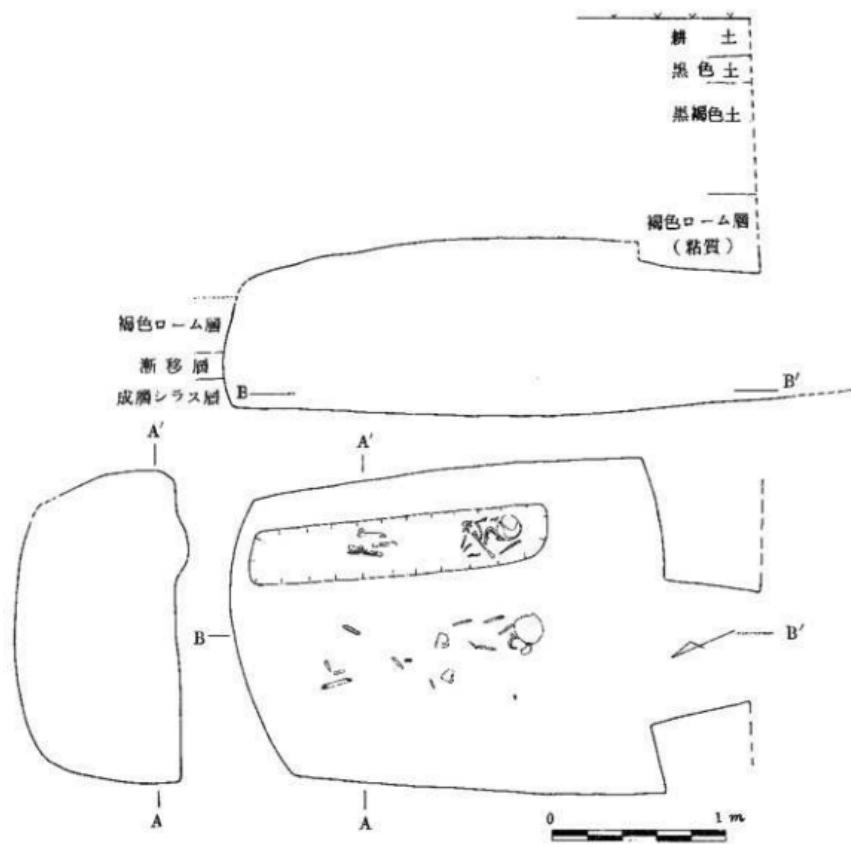
昭和53年4月ころ本庄高校実習畑地の一部が陥没し、地下式横穴らしいとの報が国富町教育委員会から県教育委員会へ連絡があり、同年6月14・15日発掘調査を実施することになった。

調査は、筆者と県文化課岩永哲夫主任主事が担当し、国富町教育委員会の方々の協力をいただいた。

調査は、陥没した部分より進める。陥没は、表層部の部分であったが、堅壙部は、農道にかかっていたので、調査は、主として、玄室、狭道を行なうこととした。

III 調査の結果(第2, 3図、図版1, 2, 3)

本地下式横穴は、後円部を南南西にもつ全長約4.8mの前方後円墳南70mの地点にあり、玄室を北東、堅壙を南南西、つまり主軸の方位が北北東の地下式横穴である。玄室は、第Ⅲ層褐色ローム層第Ⅳ層成層シラス層中に構築され、床面は、地表下約215cmのところにある。この地点の層序は、第Ⅰ層粘土、第Ⅱ層黒褐色土層(この層中ほどには、第一オレンジ層がブロック状にはいっている。)第Ⅲ層褐色ローム層、第Ⅳ層成層シラス層となっている。



第2図 敷盛地下式横穴 53-1号実測図

差道は、逆八字形に拡がる両袖式で、東辺はほぼ直角、西辺は鋭角をなして玄室に交わっている。断面は台形で、高さは徐々に高くなっている。差門部幅6.2cm、玄門部6.4cm、高さは中ほどで約7.5cmを計測できる。

玄室の平面プランは、梯形をなすが、奥壁は弧をなしている。各部の計測値は、東辺2.24cm、西辺2.13cm、北辺付近幅1.61cm、玄門付近においては1.93cmである。側壁は、85度から80度の角度をもち、弧を描いて立ち上がりっている。高さはほぼ一定で7.7cmある。天井は、アーチ形となっていて中央部の高さは9.8cmある。玄室全体の形状は、辺が外へ膨らむ箱形であるが、長方形切妻形妻入りの退化形態と見取ることもできる。

奥壁・西壁において、玄室構築時の幅1.5cm、刃先丸形の工具痕が見られ、特に奥壁において明瞭である。奥壁では、上から下へ、西壁では、左上から右下へ工具を使用している。天井部については、丁寧な仕上げで、工具痕はほとんど見られない。

東壁より2.5cmほどの位置に、3.4cm×7.5cm×9cmの隅丸長方形の凹み床が東辺より2.0cmの位置にあり、小児1体（1号人骨）が埋葬しており、頭蓋骨には朱が付着していた。玄室中央部にも1体（2号人骨）埋葬している。また、2号人骨西約3.0cmの位置に歯牙が数本まとめて検出された、したがって、本地下式には、2体ないし3体が埋葬していたと考えられるが、1号人骨以外は、散乱した状態であった。

副葬品は、1号人骨頭部周辺において、刀子1本、朱玉片3枚、2号人骨頭蓋骨下および周辺に管玉11個、頭蓋骨竹2.0cmに刀子1本が出土している。

刀子（第3図1）

1号人骨頭部西5cmにて出土した全長1.34cm、ほぼ完形の鹿角装刀子である。身長5.8cm、刃部中央部で刃幅0.9cm、背幅0.2cm、柄部は、8.1cmである。

朱玉片（第3図2）

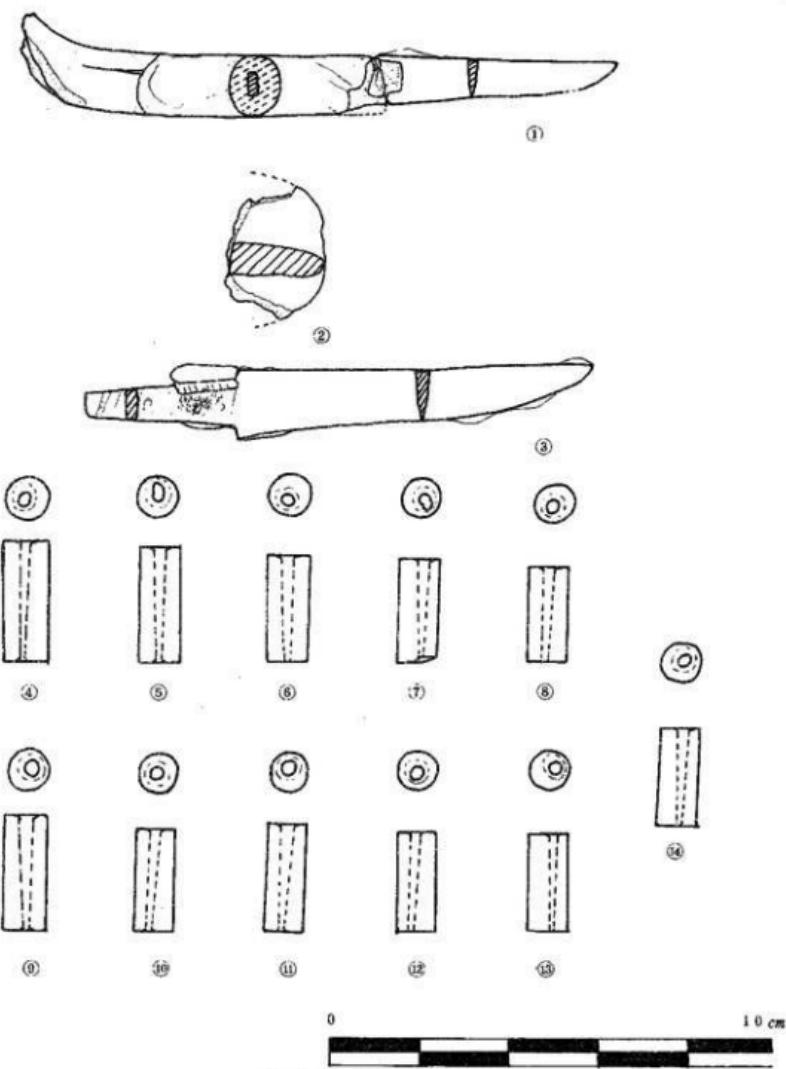
朱玉片は、いずれも1号人骨周辺において出土したものである。頭蓋骨すぐ右下にて出土した朱玉片は、推定径3.6cm、厚さ0.8cmで、重さは、すこぶる軽い。断面は、一面は、弧をなし、片面はほぼ平坦となっている。

刀子（第3図3）

2号人骨頭附近で出土し、全長1.13cmの完形の刀子である。身長8.0cm、刃幅1.6cm、中央部にて刃幅は1.1cm、背幅0.3cm、柄幅3.3cmで、柄部には、わずかに鹿角装が残存している。

管玉（第3図4）

2号人骨頭蓋骨下およびその周辺で11個出土し、いずれも碧玉製で淡緑色を呈する。長さは、2.7～2.2cm、径は、1cm内外で孔は片面穿孔である。



第3図 銅器品実測図

IV 結 語

飯盛地区においては、今回の調査を含め計3基の地下式横穴が発見されている。本地下式は、玄室梯形アーチ形、羨道両袖式の構造であり、昭和42年発見の飯盛1号と構造類似している。飯盛1号の閉塞は、羨道部に長さ80cm内外、幅、厚さ各10cm内外の堅い石を詰めて閉塞されているが、本地下式についても、閉塞石等は全く認められなかった。^{注1}閉塞施設の全く認められていない例は、東諸県郡綾町地下式横穴、同郡国富町吹上地下式横穴等にある。飯盛53-1号、綾町地下式の土砂の流入状況、流入量が類似している。^{注2}飯盛53-1号の羨道部の土砂は砂粒様で硬化していない、^{注3}流入土であることを示していた。したがって、本地下式には何らかの閉塞施設が存在していたのではないかと考えられる。^{注4}

閉塞施設を考える場合、参考になる地下式に、東立野の地下式9号、下北方地下式6号がある。両地下式は、羨道両側に切り込みがあり、切り込みより堅穴部の方に東立野では粘土塊、下北方では円錐が積まれていたことから、調査者は切り込み部にまず板状のもので閉塞を行ない、その後、粘土塊を積む、つまり、板状閉塞の併用を推定している。本地下式の場合、閉塞施設等は全く認められなかったが、羨門部付近において板状のもので閉塞していたのではないかと考えるが今後の課題としておきたい。

飯盛53-1号の構造は、日高正晴氏の分類、1類の退化形態であり、築造年代は古墳時代後期と考えられる。^{注5}

(面高哲郎)

注1 石川恒太郎「田富町飯盛の地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書、第13集 昭43

注2 石川恒太郎「綾町地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書 第14集 昭44

注3 日高正晴、岩永哲夫「吹上地下式古墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書 第20集 昭58

注4 綾、吹上:両地下式の場合、調査者は堅穴全体を土をもって埋め閉塞していたと報告されている。

注5 日高正晴、茂山謙「東立野の地下式9号墳」宮崎考古 第1号 昭50

注6 石川恒太郎、田中茂、茂山謙、野間重孝「下北方地下式横穴第5号」宮崎市文化財調査報告書 第3集 1977

注7 日高正晴「日向地方の地下式墳」考古学雑誌48巻4号

遺跡狀況(1)



遺 跡 一 遠 景



玄 室 內

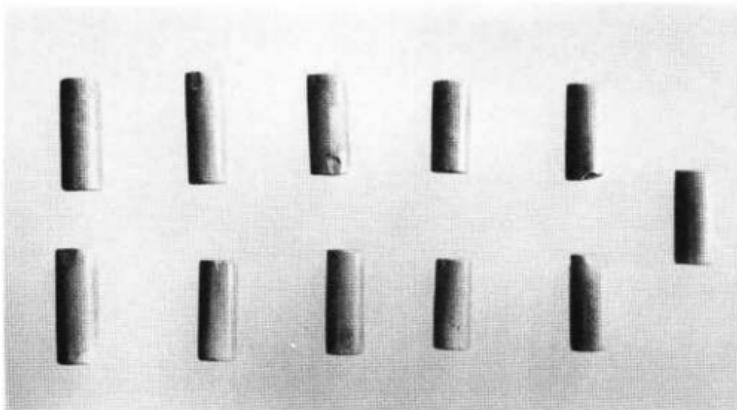
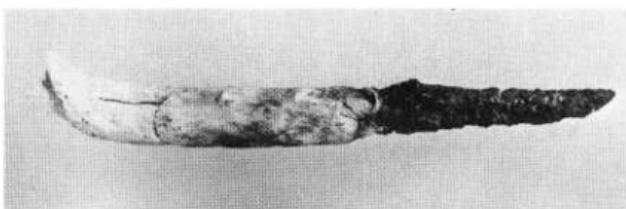


羨道部



1號人骨出土狀況

圖版 3 副葬品

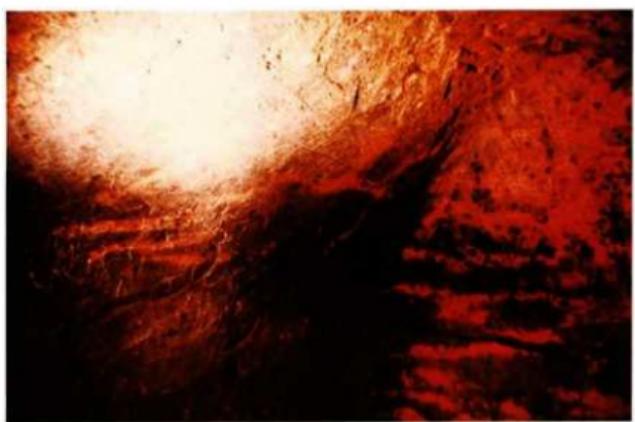




Ⅲ 大萩地下式横穴36号発掘調査

西諸県郡野尻町大字三ヶ野山大萩

県埋蔵文化財調査員 茂 山 護



大森地下式横穴 3・6号の朱線

本文目次

はじめに	3 3
I 調査の経緯	3 3
II 遺構の所在地	3 5
III 地下式横穴の構造	3 5
IV 遺物の出土状況	3 9
V 出土遺物	4 1
(1) 武器	4 1
(2) 農耕具	4 3
(3) その他の遺物	4 5
VI 玄室壁面の装飾	4 8
VII 考察	4 8
VIII 結語	5 2

挿図目次

第1図 大荻遺跡地下式横穴分布図	3 3
第2図 地下式横穴3・6号実測図	3 7
第3図 直刀・剣	4 0
第4図 鉄 鐵	4 2
第5図 骨 鐵	4 3
第6図 鐵・斧頭・鎌(鋤)先・刀子・棒状鉄器	4 4
第7図 銀金具付木片	4 5
第8図 地下式横穴出土(鋤)先実測図	4 7

図 版 目 次

図版 1	大森地下式横穴 3・6 号の朱線	3 0
図版 2	壁面の彩色線文	5 5
図版 3	鐵鎌・鐵斧・鎌先の出土状況	5 6
図版 4	直刀・劍・木製装具	5 7
図版 5	鐵 鎌	5 8
図版 6	鎌・斧・刀子・鎌先・棒状鉄器	5 9

表 目 次

表 1	大森遺跡の地下式横穴一覧表	3 4
表 2	大森地下式横穴 3・6 号出土の鐵鎌	4 1
表 3	鎌(鋸)先・鎌を副葬した地下式横穴	4 9

はじめに

野尻町にある「大荻遺跡」は、昭和48年に、22基の地下式横穴が、特殊農地保全整備事業に伴って緊急調査されて以来、50年度までに地下式横穴のほかに弥生終末期の土壙群や住居跡など相次いで発見され俄に注目された西諸県地方でも重要遺跡の一つである。

このほど、大荻遺跡の一角に属する岩額口で、朱線で彩色された地下式横穴を調査したので結果の概要を報告する。

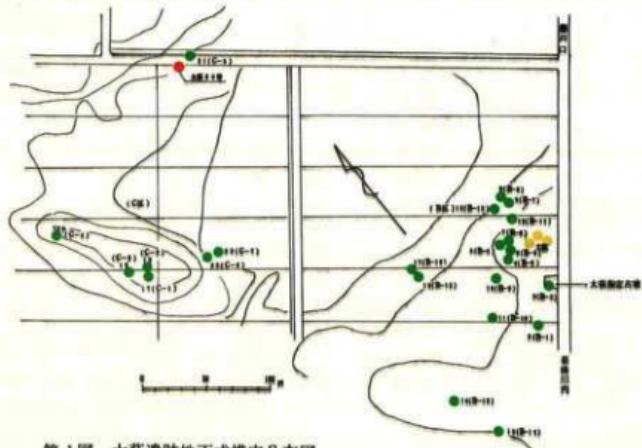
章 大荻遺跡(1) 潤戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告

宮崎県教育委員会 1974

I 調査の経緯

遺構発見の直接の切っ掛けは、58年8月28日に、畑地灌漑用水導管埋設工事中、農道に掘った埋設溝中に幅30cm、長50cmほどの陥没口ができたことによる。48年度以来、多くの地下式横穴が発見されているだけに、工事担当者に遺跡に対する認識があり、直に工事を中止し町教委へ通報された。町教育委員会では県文化課と連絡をとり、24日に町文化財専門委員真方良穂氏と県文化課埋蔵文化財担当の岩永哲夫氏が現地を踏査し、地下式横穴であることを確認し、今回の発掘調査となつたのである。

調査は、野尻町教育委員会の依頼を受けて昭和58年8月28、29の両日、茂山謙が担当した。調査にあたっては、成長期にあった栽培作物の撤去に心よく応じていただいた地主の吉園夏次氏をはじめ、諸連絡や折衝に奔走いただいた真方良穂氏、国武正広氏(町教委主事)、それに東郷秋男、カオル夫妻の協力を得た。記して感謝の意を表したい。



第1図 大荻遺跡地下式横穴分布図

(表1) 大阪造路の地下式横穴・発表

番 号	年次	地 点	地下式横穴			人 骨	出 品	文 獻・その 他
			形 状	幅 寸	支 柱 間 距 離			
1	24	A	方形	180×180×7	幅柱	東北	3 男	刀1, 刀子2, 鋸1, 鋸片1, 鋸片2, 鋸片3, 鋸片4
2	25	B-1					1男	
3	*	-					1男2女	鋸1, 刀子2, 鋸1, 鋸2, 鋸片1, 鋸片2, 鋸片3, 鋸片4, 骨器
4	*	-					1男	
5	*	-					2	
6	*	-						
7	*	-						
8	*	-						
9	*	-						
10	*	-						直刀1, 鋸1, 刀子2, 鋸1, 鋸2, 鋸3
11	*	-	1.0					
12	*	-	1.1					
13	*	-	1.2					劍1
14	*	-	1.3					直刀1, 鋸1, 刀子1, 鋸1, 鋸2, 鋸3, 鋸片1, 鋸片2
15	*	-	1.4					直刀1
16	*	-	1.5					刀子1
17	F	C-1	方形・網眼	310×180×5	幅柱	南北-東西	4	北里 刀子4, 鋸4, 刀1, 鋸片4
18	*	2	井字形・網眼	180×180×70	幅柱	東北-南北	1	用具
19	*	3	反方形	260×180×110 (幅入り)	長方形	南北-東西	1	直刀1, 刀子1
20	*	4	方形・網眼	(平入り)	幅柱	東-西	1	刀1, 鋸1, 刀子1, 鋸1, 鋸2
21	*	5	井字形・網眼	170×180×100	幅柱	東-西	1	北 刀子1, 鋸1
22	*	6						劍2
23	*	7	方形・網眼	180×180×110 (幅入り)	幅柱	東-西	2	北 鋸
24	F	B	半円形	180×180×60	幅柱	南北	1 体	
25	25	F-1	長円形状	130×180×60	側方	南北	1	刀1
26	*	2	長円形状	130×180×60	側方	南北	1	刀子1
27	*	3	半円形・板張	170×180×120	幅柱	南北-東西	2 男	鐵鑄4, 鋸1, 刀子1, 刀2, 鋸1, 鋸2, 鋸3, 鋸4, 鋸5, 鋸6, 鋸7, 鋸8, 鋸9, 鋸10, 鋸11, 鋸12, 鋸13, 鋸14, 鋸15, 鋸16, 鋸17, 鋸18, 鋸19, 鋸20, 鋸21, 鋸22, 鋸23, 鋸24, 鋸25, 鋸26, 鋸27, 鋸28, 鋸29, 鋸30, 鋸31, 鋸32, 鋸33, 鋸34, 鋸35, 鋸36, 鋸37, 鋸38, 鋸39, 鋸40, 鋸41, 鋸42, 鋸43, 鋸44, 鋸45, 鋸46, 鋸47, 鋸48, 鋸49, 鋸50, 鋸51, 鋸52, 鋸53, 鋸54, 鋸55, 鋸56, 鋸57, 鋸58, 鋸59, 鋸60, 鋸61, 鋸62, 鋸63, 鋸64, 鋸65, 鋸66, 鋸67, 鋸68, 鋸69, 鋸70, 鋸71, 鋸72, 鋸73, 鋸74, 鋸75, 鋸76, 鋸77, 鋸78, 鋸79, 鋸80, 鋸81, 鋸82, 鋸83, 鋸84, 鋸85, 鋸86, 鋸87, 鋸88, 鋸89, 鋸90, 鋸91, 鋸92, 鋸93, 鋸94, 鋸95, 鋸96, 鋸97, 鋸98, 鋸99, 鋸100, 鋸101, 鋸102, 鋸103, 鋸104, 鋸105, 鋸106, 鋸107, 鋸108, 鋸109, 鋸110, 鋸111, 鋸112, 鋸113, 鋸114, 鋸115, 鋸116, 鋸117, 鋸118, 鋸119, 鋸120, 鋸121, 鋸122, 鋸123, 鋸124, 鋸125, 鋸126, 鋸127, 鋸128, 鋸129, 鋸130, 鋸131, 鋸132, 鋸133, 鋸134, 鋸135, 鋸136, 鋸137, 鋸138, 鋸139, 鋸140, 鋸141, 鋸142, 鋸143, 鋸144, 鋸145, 鋸146, 鋸147, 鋸148, 鋸149, 鋸150, 鋸151, 鋸152, 鋸153, 鋸154, 鋸155, 鋸156, 鋸157, 鋸158, 鋸159, 鋸160, 鋸161, 鋸162, 鋸163, 鋸164, 鋸165, 鋸166, 鋸167, 鋸168, 鋸169, 鋸170, 鋸171, 鋸172, 鋸173, 鋸174, 鋸175, 鋸176, 鋸177, 鋸178, 鋸179, 鋸180, 鋸181, 鋸182, 鋸183, 鋸184, 鋸185, 鋸186, 鋸187, 鋸188, 鋸189, 鋸190, 鋸191, 鋸192, 鋸193, 鋸194, 鋸195, 鋸196, 鋸197, 鋸198, 鋸199, 鋸200, 鋸201, 鋸202, 鋸203, 鋸204, 鋸205, 鋸206, 鋸207, 鋸208, 鋸209, 鋸210, 鋸211, 鋸212, 鋸213, 鋸214, 鋸215, 鋸216, 鋸217, 鋸218, 鋸219, 鋸220, 鋸221, 鋸222, 鋸223, 鋸224, 鋸225, 鋸226, 鋸227, 鋸228, 鋸229, 鋸230, 鋸231, 鋸232, 鋸233, 鋸234, 鋸235, 鋸236, 鋸237, 鋸238, 鋸239, 鋸240, 鋸241, 鋸242, 鋸243, 鋸244, 鋸245, 鋸246, 鋸247, 鋸248, 鋸249, 鋸250, 鋸251, 鋸252, 鋸253, 鋸254, 鋸255, 鋸256, 鋸257, 鋸258, 鋸259, 鋸260, 鋸261, 鋸262, 鋸263, 鋸264, 鋸265, 鋸266, 鋸267, 鋸268, 鋸269, 鋸270, 鋸271, 鋸272, 鋸273, 鋸274, 鋸275, 鋸276, 鋸277, 鋸278, 鋸279, 鋸280, 鋸281, 鋸282, 鋸283, 鋸284, 鋸285, 鋸286, 鋸287, 鋸288, 鋸289, 鋸290, 鋸291, 鋸292, 鋸293, 鋸294, 鋸295, 鋸296, 鋸297, 鋸298, 鋸299, 鋸300, 鋸301, 鋸302, 鋸303, 鋸304, 鋸305, 鋸306, 鋸307, 鋸308, 鋸309, 鋸310, 鋸311, 鋸312, 鋸313, 鋸314, 鋸315, 鋸316, 鋸317, 鋸318, 鋸319, 鋸320, 鋸321, 鋸322, 鋸323, 鋸324, 鋸325, 鋸326, 鋸327, 鋸328, 鋸329, 鋸330, 鋸331, 鋸332, 鋸333, 鋸334, 鋸335, 鋸336, 鋸337, 鋸338, 鋸339, 鋸340, 鋸341, 鋸342, 鋸343, 鋸344, 鋸345, 鋸346, 鋸347, 鋸348, 鋸349, 鋸350, 鋸351, 鋸352, 鋸353, 鋸354, 鋸355, 鋸356, 鋸357, 鋸358, 鋸359, 鋸360, 鋸361, 鋸362, 鋸363, 鋸364, 鋸365, 鋸366, 鋸367, 鋸368, 鋸369, 鋸370, 鋸371, 鋸372, 鋸373, 鋸374, 鋸375, 鋸376, 鋸377, 鋸378, 鋸379, 鋸380, 鋸381, 鋸382, 鋸383, 鋸384, 鋸385, 鋸386, 鋸387, 鋸388, 鋸389, 鋸390, 鋸391, 鋸392, 鋸393, 鋸394, 鋸395, 鋸396, 鋸397, 鋸398, 鋸399, 鋸400, 鋸401, 鋸402, 鋸403, 鋸404, 鋸405, 鋸406, 鋸407, 鋸408, 鋸409, 鋸410, 鋸411, 鋸412, 鋸413, 鋸414, 鋸415, 鋸416, 鋸417, 鋸418, 鋸419, 鋸420, 鋸421, 鋸422, 鋸423, 鋸424, 鋸425, 鋸426, 鋸427, 鋸428, 鋸429, 鋸430, 鋸431, 鋸432, 鋸433, 鋸434, 鋸435, 鋸436, 鋸437, 鋸438, 鋸439, 鋸440, 鋸441, 鋸442, 鋸443, 鋸444, 鋸445, 鋸446, 鋸447, 鋸448, 鋸449, 鋸450, 鋸451, 鋸452, 鋸453, 鋸454, 鋸455, 鋸456, 鋸457, 鋸458, 鋸459, 鋸460, 鋸461, 鋸462, 鋸463, 鋸464, 鋸465, 鋸466, 鋸467, 鋸468, 鋸469, 鋸470, 鋸471, 鋸472, 鋸473, 鋸474, 鋸475, 鋸476, 鋸477, 鋸478, 鋸479, 鋸480, 鋸481, 鋸482, 鋸483, 鋸484, 鋸485, 鋸486, 鋸487, 鋸488, 鋸489, 鋸490, 鋸491, 鋸492, 鋸493, 鋸494, 鋸495, 鋸496, 鋸497, 鋸498, 鋸499, 鋸500, 鋸501, 鋸502, 鋸503, 鋸504, 鋸505, 鋸506, 鋸507, 鋸508, 鋸509, 鋸510, 鋸511, 鋸512, 鋸513, 鋸514, 鋸515, 鋸516, 鋸517, 鋸518, 鋸519, 鋸520, 鋸521, 鋸522, 鋸523, 鋸524, 鋸525, 鋸526, 鋸527, 鋸528, 鋸529, 鋸530, 鋸531, 鋸532, 鋸533, 鋸534, 鋸535, 鋸536, 鋸537, 鋸538, 鋸539, 鋸540, 鋸541, 鋸542, 鋸543, 鋸544, 鋸545, 鋸546, 鋸547, 鋸548, 鋸549, 鋸550, 鋸551, 鋸552, 鋸553, 鋸554, 鋸555, 鋸556, 鋸557, 鋸558, 鋸559, 鋸560, 鋸561, 鋸562, 鋸563, 鋸564, 鋸565, 鋸566, 鋸567, 鋸568, 鋸569, 鋸570, 鋸571, 鋸572, 鋸573, 鋸574, 鋸575, 鋸576, 鋸577, 鋸578, 鋸579, 鋸580, 鋸581, 鋸582, 鋸583, 鋸584, 鋸585, 鋸586, 鋸587, 鋸588, 鋸589, 鋸590, 鋸591, 鋸592, 鋸593, 鋸594, 鋸595, 鋸596, 鋸597, 鋸598, 鋸599, 鋸600, 鋸601, 鋸602, 鋸603, 鋸604, 鋸605, 鋸606, 鋸607, 鋸608, 鋸609, 鋸610, 鋸611, 鋸612, 鋸613, 鋸614, 鋸615, 鋸616, 鋸617, 鋸618, 鋸619, 鋸620, 鋸621, 鋸622, 鋸623, 鋸624, 鋸625, 鋸626, 鋸627, 鋸628, 鋸629, 鋸630, 鋸631, 鋸632, 鋸633, 鋸634, 鋸635, 鋸636, 鋸637, 鋸638, 鋸639, 鋸640, 鋸641, 鋸642, 鋸643, 鋸644, 鋸645, 鋸646, 鋸647, 鋸648, 鋸649, 鋸650, 鋸651, 鋸652, 鋸653, 鋸654, 鋸655, 鋸656, 鋸657, 鋸658, 鋸659, 鋸660, 鋸661, 鋸662, 鋸663, 鋸664, 鋸665, 鋸666, 鋸667, 鋸668, 鋸669, 鋸670, 鋸671, 鋸672, 鋸673, 鋸674, 鋸675, 鋸676, 鋸677, 鋸678, 鋸679, 鋸680, 鋸681, 鋸682, 鋸683, 鋸684, 鋸685, 鋸686, 鋸687, 鋸688, 鋸689, 鋸690, 鋸691, 鋸692, 鋸693, 鋸694, 鋸695, 鋸696, 鋸697, 鋸698, 鋸699, 鋸700, 鋸701, 鋸702, 鋸703, 鋸704, 鋸705, 鋸706, 鋸707, 鋸708, 鋸709, 鋸710, 鋸711, 鋸712, 鋸713, 鋸714, 鋸715, 鋸716, 鋸717, 鋸718, 鋸719, 鋸720, 鋸721, 鋸722, 鋸723, 鋸724, 鋸725, 鋸726, 鋸727, 鋸728, 鋸729, 鋸730, 鋸731, 鋸732, 鋸733, 鋸734, 鋸735, 鋸736, 鋸737, 鋸738, 鋸739, 鋸740, 鋸741, 鋸742, 鋸743, 鋸744, 鋸745, 鋸746, 鋸747, 鋸748, 鋸749, 鋸750, 鋸751, 鋸752, 鋸753, 鋸754, 鋸755, 鋸756, 鋸757, 鋸758, 鋸759, 鋸760, 鋸761, 鋸762, 鋸763, 鋸764, 鋸765, 鋸766, 鋸767, 鋸768, 鋸769, 鋸770, 鋸771, 鋸772, 鋸773, 鋸774, 鋸775, 鋸776, 鋸777, 鋸778, 鋸779, 鋸780, 鋸781, 鋸782, 鋸783, 鋸784, 鋸785, 鋸786, 鋸787, 鋸788, 鋸789, 鋸790, 鋸791, 鋸792, 鋸793, 鋸794, 鋸795, 鋸796, 鋸797, 鋸798, 鋸799, 鋸800, 鋸801, 鋸802, 鋸803, 鋸804, 鋸805, 鋸806, 鋸807, 鋸808, 鋸809, 鋸810, 鋸811, 鋸812, 鋸813, 鋸814, 鋸815, 鋸816, 鋸817, 鋸818, 鋸819, 鋸820, 鋸821, 鋸822, 鋸823, 鋸824, 鋸825, 鋸826, 鋸827, 鋸828, 鋸829, 鋸830, 鋸831, 鋸832, 鋸833, 鋸834, 鋸835, 鋸836, 鋸837, 鋸838, 鋸839, 鋸840, 鋸841, 鋸842, 鋸843, 鋸844, 鋸845, 鋸846, 鋸847, 鋸848, 鋸849, 鋸850, 鋸851, 鋸852, 鋸853, 鋸854, 鋸855, 鋸856, 鋸857, 鋸858, 鋸859, 鋸860, 鋸861, 鋸862, 鋸863, 鋸864, 鋸865, 鋸866, 鋸867, 鋸868, 鋸869, 鋸870, 鋸871, 鋸872, 鋸873, 鋸874, 鋸875, 鋸876, 鋸877, 鋸878, 鋸879, 鋸880, 鋸881, 鋸882, 鋸883, 鋸884, 鋸885, 鋸886, 鋸887, 鋸888, 鋸889, 鋸890, 鋸891, 鋸892, 鋸893, 鋸894, 鋸895, 鋸896, 鋸897, 鋸898, 鋸899, 鋸900, 鋸901, 鋸902, 鋸903, 鋸904, 鋸905, 鋸906, 鋸907, 鋸908, 鋸909, 鋸910, 鋸911, 鋸912, 鋸913, 鋸914, 鋸915, 鋸916, 鋸917, 鋸918, 鋸919, 鋸920, 鋸921, 鋸922, 鋸923, 鋸924, 鋸925, 鋸926, 鋸927, 鋸928, 鋸929, 鋸930, 鋸931, 鋸932, 鋸933, 鋸934, 鋸935, 鋸936, 鋸937, 鋸938, 鋸939, 鋸940, 鋸941, 鋸942, 鋸943, 鋸944, 鋸945, 鋸946, 鋸947, 鋸948, 鋸949, 鋸950, 鋸951, 鋸952, 鋸953, 鋸954, 鋸955, 鋸956, 鋸957, 鋸958, 鋸959, 鋸960, 鋸961, 鋸962, 鋸963, 鋸964, 鋸965, 鋸966, 鋸967, 鋸968, 鋸969, 鋸970, 鋸971, 鋸972, 鋸973, 鋸974, 鋸975, 鋸976, 鋸977, 鋸978, 鋸979, 鋸980, 鋸981, 鋸982, 鋸983, 鋸984, 鋸985, 鋸986, 鋸987, 鋸988, 鋸989, 鋸990, 鋸991, 鋸992, 鋸993, 鋸994, 鋸995, 鋸996, 鋸997, 鋸998, 鋸999, 鋸1000, 鋸1001, 鋸1002, 鋸1003, 鋸1004, 鋸1005, 鋸1006, 鋸1007, 鋸1008, 鋸1009, 鋸1010, 鋸1011, 鋸1012, 鋸1013, 鋸1014, 鋸1015, 鋸1016, 鋸1017, 鋸1018, 鋸1019, 鋸1020, 鋸1021, 鋸1022, 鋸1023, 鋸1024, 鋸1025, 鋸1026, 鋸1027, 鋸1028, 鋸1029, 鋸1030, 鋸1031, 鋸1032, 鋸1033, 鋸1034, 鋸1035, 鋸1036, 鋸1037, 鋸1038, 鋸1039, 鋸1040, 鋸1041, 鋸1042, 鋸1043, 鋸1044, 鋸1045, 鋸1046, 鋸1047, 鋸1048, 鋸1049, 鋸1050, 鋸1051, 鋸1052, 鋸1053, 鋸1054, 鋸1055, 鋸1056, 鋸1057, 鋸1058, 鋸1059, 鋸1060, 鋸1061, 鋸1062, 鋸1063, 鋸1064, 鋸1065, 鋸1066, 鋸1067, 鋸1068, 鋸1069, 鋸1070, 鋸1071, 鋸1072, 鋸1073, 鋸1074, 鋸1075, 鋸1076, 鋸1077, 鋸1078, 鋸1079, 鋸1080, 鋸1081, 鋸1082, 鋸1083, 鋸1084, 鋸1085, 鋸1086, 鋸1087, 鋸1088, 鋸1089, 鋸1090, 鋸1091, 鋸1092, 鋸1093, 鋸1094, 鋸1095, 鋸1096, 鋸1097, 鋸1098, 鋸1099, 鋸1100, 鋸1101, 鋸1102, 鋸1103, 鋸1104, 鋸1105, 鋸1106, 鋸1107, 鋸1108, 鋸1109, 鋸1110, 鋸1111, 鋸1112, 鋸1113, 鋸1114, 鋸1115, 鋸1116, 鋸1117, 鋸1118, 鋸1119, 鋸1120, 鋸1121, 鋸1122, 鋸1123, 鋸1124, 鋸1125, 鋸1126, 鋸1127, 鋸1128, 鋸1129, 鋸1130, 鋸1131, 鋸1132, 鋸1133, 鋸1134, 鋸1135, 鋸1136, 鋸1137, 鋸1138, 鋸1139, 鋸1140, 鋸1141, 鋸1142, 鋸1143, 鋸1144, 鋸1145, 鋸1146, 鋸1147, 鋸1148, 鋸1149, 鋸1150, 鋸1151, 鋸1152, 鋸1153, 鋸1154, 鋸1155, 鋸1156, 鋸1157, 鋸1158, 鋸1159, 鋸1160, 鋸1161, 鋸1162, 鋸1163, 鋸1164, 鋸1165, 鋸1166, 鋸1167, 鋸1168, 鋸1169, 鋸1170, 鋸1171, 鋸1172, 鋸1173, 鋸1174, 鋸1175, 鋸1176, 鋸1177, 鋸1178, 鋸1179, 鋸1180, 鋸1181, 鋸1182, 鋸1183, 鋸1184, 鋸1185, 鋸1186, 鋸1187, 鋸1188, 鋸1189, 鋸1190, 鋸1191, 鋸1192, 鋸1193, 鋸1194, 鋸1195, 鋸1196, 鋸1197, 鋸1198, 鋸1199, 鋸1200, 鋸1201, 鋸1202, 鋸1203, 鋸1204, 鋸1205, 鋸1206, 鋸1207, 鋸1208, 鋸1209, 鋸1210, 鋸1211, 鋸1212, 鋸1213, 鋸1214, 鋸1215, 鋸1216, 鋸1217, 鋸1218, 鋸1219, 鋸1220, 鋸1221, 鋸1222, 鋸1223, 鋸1224, 鋸1225, 鋸1226, 鋸1227, 鋸1228, 鋸1229, 鋸1230, 鋸1231, 鋸1232, 鋸1233, 鋸1234, 鋸1235, 鋸1236, 鋸1237, 鋸1238, 鋸1239, 鋸12310, 鋸12311, 鋸12312, 鋸12313, 鋸12314, 鋸12315, 鋸12316, 鋸12317, 鋸12318, 鋸12319, 鋸12320, 鋸12321, 鋸12322, 鋸12323, 鋸12324, 鋸12325, 鋸12326, 鋸12327, 鋸12328, 鋸12329, 鋸12330, 鋸12331, 鋸12332, 鋸12333, 鋸12334, 鋸12335, 鋸12336, 鋸12337, 鋸12338, 鋸12339, 鋸12340, 鋸12341, 鋸12342, 鋸12343, 鋸12344, 鋸12345, 鋸12346, 鋸12347, 鋸12348, 鋸12349, 鋸12350, 鋸12351, 鋸12352, 鋸12353, 鋸12354, 鋸12355, 鋸12356, 鋸12357, 鋸12358, 鋸12359, 鋸12360, 鋸12361, 鋸12362, 鋸12363, 鋸12364, 鋸12365, 鋸12366, 鋸12367, 鋸12368, 鋸12369, 鋸12370, 鋸12371, 鋸12372, 鋸12373, 鋸12374, 鋸12375, 鋸12376, 鋸12377, 鋸12378, 鋸12379, 鋸12380, 鋸12381, 鋸12382, 鋸12383, 鋸12384, 鋸12385, 鋸12386, 鋸12387, 鋸12388, 鋸12389, 鋸12390, 鋸12391, 鋸12392, 鋸12393, 鋸12394, 鋸12395, 鋸12396, 鋸12397, 鋸12398, 鋸12399, 鋸123100, 鋸123101, 鋸123102, 鋸123103, 鋸123104, 鋸123105, 鋸123106, 鋸123107, 鋸123108, 鋸123109, 鋸123110, 鋸123111, 鋸123112, 鋸123113, 鋸123114, 鋸123115, 鋸123116, 鋸123117, 鋸123118, 鋸123119, 鋸123120, 鋸123121, 鋸123122, 鋸123123, 鋸123124, 鋸123125, 鋸123126, 鋸123127, 鋸123128, 鋸123129, 鋸123130, 鋸123131, 鋸123132, 鋸123133, 鋸1

II 遺構の所在地（第1図）

遺構が発見されたのは、西諸県郡野尻町大字三ヶ野山字岩瀬口3257-1番地で、畠地から農道下にかけて構築されていた。この地点は、いわゆる大秋遺跡の北西部にあたるところで、県指定大荻古墳（円墳）の北北西約340mの位置になる。この位置は、48年の緊急調査の際C地区とされた地域の北端に相当しており、当時単独に発見されたC-5号の所在地に近接している。整備前の地形図をみると、大秋遺跡はかなり起伏の多かったところで、遺構の多くは、当時の微高地を中心に発見されている。

大荻遺跡では、48年度から50年度にかけて実施された緊急調査で、34基の地下式横穴が発見されており、これに、34年に鈴木重治氏が調査した1基（鈴木重治「野尻町大荻地下式横穴」宮崎県文化財調査報告第5編）を加えると総数35基となる。今回発見の岩瀬口の遺構は、大荻遺跡としては36基目になるわけである。大秋遺跡では今後も引き続き遺構の発見が予想されるだけに、同一遺跡では遺構番号の統一がのぞましく、同時に遺構総数がわかるようにならう。そこで、今回発見された遺構は、小字は岩瀬口になっているが大荻遺跡の一部であるので、「大荻地下式横穴36号」（略称大荻36号）と呼称することにしたい。

III 地下式横穴の構造（第2図）

大荻36号は、堅坑、狭道、玄室から構成され、N45°Eの南北方向を主軸として堅坑を南に、玄室を北側にして構築されていた。現地はすでに基盤整備で表土層が50~80cmも削平されているため、現耕土下は20cmほどで赤ホヤと呼ばれている黄褐色火山砂層になっている。大荻遺跡の地下式横穴は、いずれも、この赤ホヤ層を玄室の天井として下層の黒褐色粘質土から褐色粘質土層にかけて構築されるのが普通であり今回も同様であった。

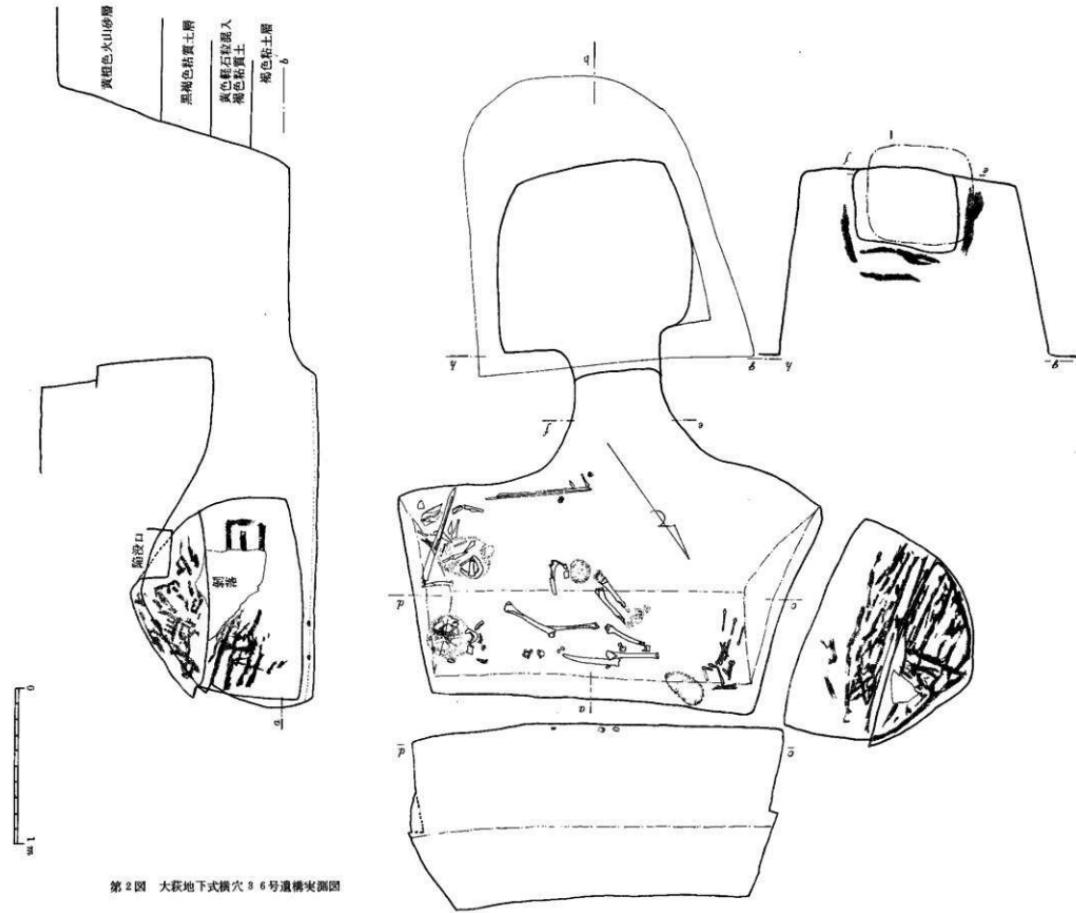
本遺構の堅坑は、偶然にも畠地と農道の境する北側を基底にして幅176cm、長さ186cmの半円形状の掘り跡を黄褐色火山砂層面に鮮明に黒褐色の埋土で描き出しており容易に堅坑の全貌を確認することができた。半円形の掘り込みをもつ堅坑は、赤ホヤ面からⅥ層の粘土層まで120cmの深さに、底面は垂直に、半円部は坑底へ向けて斜めに掘りこんでいた。坑底は幅145cm、長さ120cmとせばめられていた。

玄門は、基底壁面のほぼ中央に、左右の側壁からそれぞれ60cmの位置にあり、坑底を底辺として高さ50cm、幅65cmの長方形状に開口する。玄門の周囲には、狭道を開むようにおよそ10cm幅の餘朱があり、上方は二段に塗朱されていた。

狭道は、長さ70cm、中央部分で幅75cm、高さ75cmを示し、側壁天井共に玄室へ向って喇叭状の広がりをみせている。床面は玄門から15cmほど入りこんだところで一段下りそのまま玄室へ続く。堅坑底面とはおよそ15cmの比高差となる。狭道の天井はほぼ平頂で、喇叭状に玄室へ向って開く壁面は鋭利な工具で調整されたらしく滑らかであった。

玄室は、狭道のある南側で、幅275cm、奥壁幅210cmを測り、奥壁へ向ってせばまる左右の壁面は、





第2圖 大底下式橫穴3·6號道構造圖

東壁で 130 cm、西壁は 140 cm であった。羨道の一段下った地点からの奥行は 210 cm を示す。平面形は梯形平入りである。

天井は、東西に棟をおく寄棟造りで、45°~55°の勾配で壁に接する。壁に接する床から 55~65 cm の高さには、奥壁と左右両側の三方に、幅 6~7 cm の棚状施設が設けられ家屏形の底を形作っている。床はほぼ平坦で、一面に薄く黄褐色の敷砂が観察できた。また、奥壁や側壁面には、掘削に使用されたツク・スキ先や手斧跡を示す半円形や長方形の掘り跡が隨所にこっていたが、それは副葬されていた鎌（鎧）先及び鉄斧の刃幅と全く一致するものであった。

ところで、86号の玄室について特記されることは、玄室内壁全面が幅 3~4 cm の朱線によって彩色されていたことである。装飾地下式横穴として新たな資料を加えたことになる。

羨門の閉塞 石積などの特別な遺構は認められなかった。しかし、羨門部周囲の埋土がやわらかで有機質の腐蝕とみられるような黒土であったことや、羨道に傾く斜にしか埋土がなく玄室内部に達していなかったのを見ると、何等かの閉塞遺構が存在した事は十分に推測されるところである。果してそれが木製戸であったか、竹垣様のものであったかは明らかでない。礎積閉塞の多い大蔵遺跡では少數例であり、羨門の塗朱とも関連して特殊な閉塞をとっていたことも考えられる。

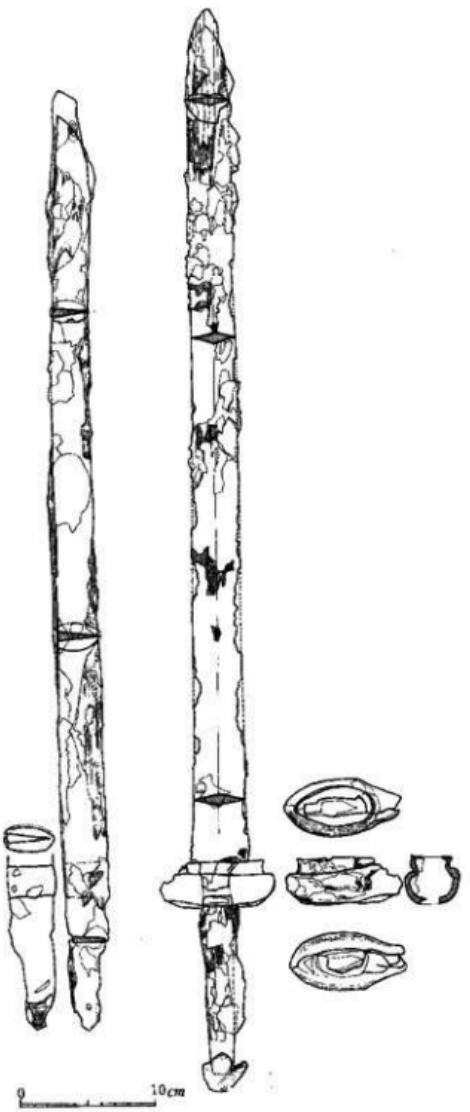
埋葬遺骸

玄室内に遺存した人骨は 2 体分であった。どちらも頭蓋骨は奥壁に向って右手の東壁側に置かれ、頭位方向は E 15° S を示した。遺骸は、羨道に近い方から 1 号人骨、奥壁側を 2 号人骨と呼ぶことにした。2 号人骨に下顎骨の一端が残っていただけで、どちらも押し潰され頭蓋骨の痕跡をとどめるだけであった。ことに 1 号人骨の方は、壁面の剝落もあってわずかに輪郭を残している程度であった。頭蓋骨に比べ、大腿骨や脛骨は遺存していたが、配列に若干の乱れがみられた。頭蓋骨にはどちらも朱がみられ、四肢骨の間に点々と朱が遺存していた。埋葬方法は、大腿骨や脛骨の遺存状態から B 区、F 区の人骨同様、仰臥伸展葬をとっていたものと考えられる。

秦坂田邦洋「人骨の埋葬方法」大蔵遺跡(1) 宮崎県教育委員会 1974

IV 遺物の出土状況（図版 3）

玄室の遺物は、埋葬人骨を中心に 8ヶ所にまとまりをもって出土している。第 1 は、1 号人骨の頭蓋骨の周囲、玄室東南隅に出土した遺物群で、劍・平根式鉄鎧・刀子・鍔（鎧）先・斧頭・鎌が雜然とした状態で出土している。この位置は側壁の一部が剝落している部分で、遺物はほとんどこの崩壊土の下にあった。ただ劍だけは崩壊土の上面に劍身が出ていたことから側面に立てかけてあったのではないかと推測される。柄部分が南壁近くに、木製道具は 2 号人骨の下顎骨の近くに検出されたことは、側壁剝落の際に折損し飛散したことを示すものであるが、若干の不自然を感じないでもない。これは、重なりあった状態で出土した鎧（鎧）先と斧頭、傍の刀子についても 1 号人骨の頭蓋骨痕跡上にあったことなどからして副葬の原位置にあったものか疑問が残るところである。鎧は東壁のほぼ中央付近に刃部を北にして壁と垂直の位置にあった。頭蓋骨の東南側に副葬されていた鉄鎧は 6 本で、鎧身の先端はまちまちの方向にあった。或は棚状施設上に副葬されていたのかもしれない。第 2 群は、玄室入口のす



第3図 直刀・剣

ぐ右手に入口を遮蔽するように側壁と平行に東西方向に置かれていた直刀と、切先部分に出土した鉄鎌である。直刀は刃を下に刀背を上にした状態にあった。鉄鎌は2本でいずれも尖根式である。第3群は、2号人骨の辺元にあたる玄室の北隅に副葬されていた尖根の鉄鎌13本と、骨鎌である。鎌身の方向は、1群の平根鎌と同様一定したものではなく多方向に折り重なった状態にあった。

以上のほかに、2号人骨のすぐ北側に、3本の釘の通つた長さ6cm幅2cmの木片が出土している。また玄室東南隅に薄手の木片があったが、中凹みの木片の状況から剣の鞘木の残片と考えられた。

縁面の彩色とも関連して注目されるのは、玄室床面の所々に朱が遺存していたことである。特に頭蓋骨周辺、北隅の鉄鎌の部分、それに中央の肢骨の間に、径10~20cmの範囲に集中しており、その中には径3~4cmの円盤状を呈する朱玉の残片も遺存していた。そのほか直刀の周辺や肢骨の間に点々と朱玉の遺存が認められ、床面全般が塗朱されているかのようであった。

V 出土遺物

(1) 武器

直刀(第3回 図版4)

平直りで、わずかに内反りのみられる直刀である。茎尻に若干の欠損があるが終までほぼ全形を残している。現存長67.5cm、茎の長さ10cm、刀身の幅3cm、刀背厚0.7cmを測る。鞘口には幅2.3cmの秦文の口金具がのこっている。茎や刀身部分には柄木や鞘木の一部が銹着している。柄木は葛巻されていたらしく筋状の痕跡が観察できる。鞘木の厚みは2cm前後と推定されるが幅については計測できない。

剣(第3回 図版4)

鶴の部分で折れ、茎と劍身が分かれているが、全長約77cm、身幅は3~4cm、鍛造である。劍身には鞘木や、鞘木を被覆していたとおもえる皮革の痕跡痕とみられるものが付着している。柄元には、中を刳ぬき合せ造りにした精巧球状の木製装具が着装されていたものと考えられる。この木製装具は長さ85cm、幅4.2cm、前後の厚さ3.4cmの大きさで、柄側は球面状に、鞘口にあたる部分は平滑に仕上げられており、横断面形は壺形を呈する。装具の側面に薄く円弧の浮彫痕があり、円文が直弧文が彫刻されていたのではないかと考えられる。剣の装具としては鹿角製柄頭や鞘飾を着装する例が多いが、地下式横穴出土の剣で木製装具を着装した例はこれまでなく、新たな資料を加えたことになる。

鉄鎌(第4回 図版5)

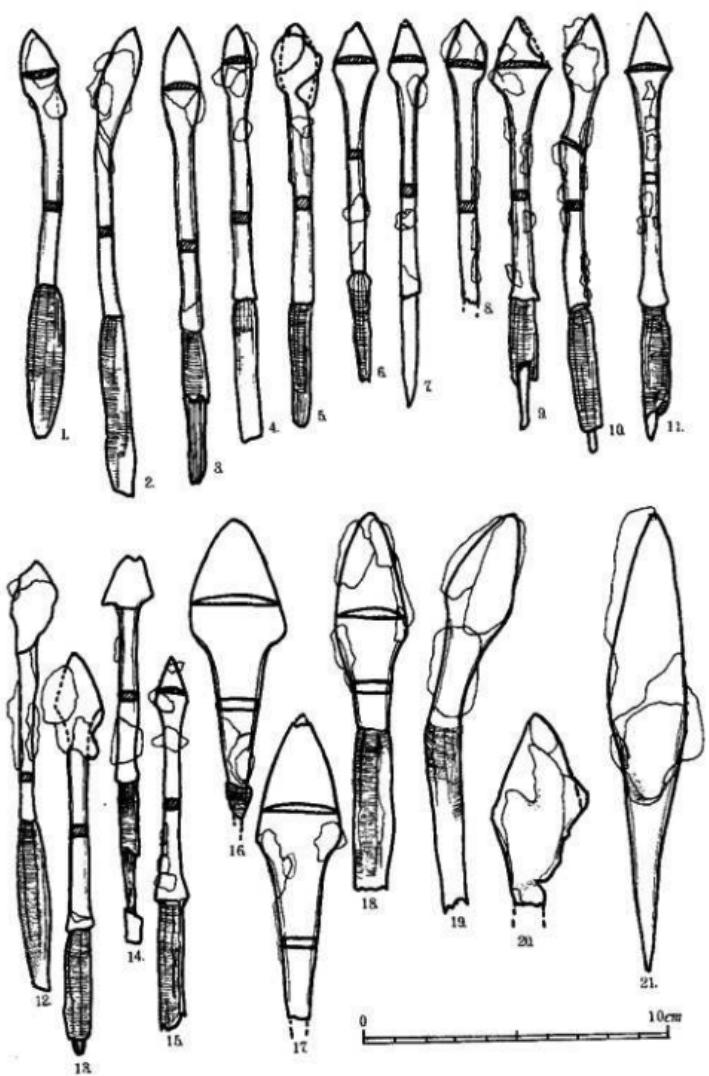
出土地点を異にしたが、長頭の尖根鎌と、平根式とがある。それぞれ鎌身の形態によって細分される。

尖根鎌(第4回1~15) 片丸造筋筒式の鉄鎌である。鎌身が細身で劍身状のもの(1~5)と、鋒から左右に側刃が張り出した菱形状のもの(6~13)とがある。後者の中には籠被と茎との境に棘状突起のみえるものもある。籠被部分は角状を呈し、平均の長さは6~7cmでさほど長頭ではない。各鎌の重量は、茎に銹着する矢竹の遺存度にもよって多少の差があるが、平均重量

(表-2)
大森地蔵大殿穴2・3号出土の鉄鎌

番号	全長	身幅	重	形態
4番1	87.0	3.7	17	尖根式
2	85	3.2	20	
3	84	3.2	18	
4	81	3.2	21	
5	80	(1.8)	21	
6	82	3.5	22	
7	82	3.5	15	
8	(85)	3.5	15	
9	84	2.0	22	
10	86	3.5	15	
11	87	3.5	22	
12	87	(2.5)	22	
13	81	(1.5)	20	
14	74	3.5	15	
15	80	3.2	12	
16	81	3.2	27	平根式
17	87	3.5	20	
18	155	3.5	81	
19	150	2.2	82	
20	(68)	2.0	19	
21	(160)	(1.5)	—	

*全長は尖根鎌では茎込までの長さ



第4図 鉄器

は 206 g ~ 204 g の範囲にある。

14 は玄室中央の大脚骨の間に、15 は玄室入口直刀の切先部分に出土したものである。他の鉄鎌に比べ鎌身が細く鋒が鋭利なのが特徴的である。

平根鎌（第4図16~21） 鎌身の銹化・錆着によって完形の明確でないものもあるが、平造定角式のものと、やゝ身の長い橢葉形のものに分けられる。この種の鎌は、地下式横穴出土の鎌には類例も多く、大荻遺跡では、F区の8号、4号、5号の出土品に類例を求めることができる。F区の地下式横穴には、平根鎌と尖根式鉄鎌との共伴例がないだけに、今回の36号で両者が併出していることは注目される。

骨鎌残欠（第5図 1）

尖根式鉄鎌の間に混在していたもので保存状態は悪くようやく採取できた。断面形は片丸状を呈し、幅1 cm、厚さ0.4 cm、片開造で某の一部を残す基部残欠である。残存長4.5 cm。

骨鎌はこれまでに大荻3号や都城市川東牧原2号の8本副葬されていた例があるだけで地下式横穴の副葬品としても特殊である。

大荻3号出土品は、断面形からは都城市牧原の骨鎌に近い形態をとっていたものと類推する。

※1.4~6年鶴見塩崎急調査 石川徹太郎 地下式横穴研究

(2) 農工具

鍬(鋤)先（第6図 図版6）

先端部が若干欠損しているが、全長125 cm、幅13.5 cm、内幅10.7 cm。刃先の身幅3 cmを測るU字形の鍬(鋤)先である。木台をはめこむための内縫をめぐるV字形の入り込みは、幅1 cm、深さ0.5~0.6 cmを示す。

本品の鍬幅と、玄室壁面にのこる半円形の掘り跡が全く一致することから、本品がこの横穴の掘削に使用されたことは明らかで、墓室構築後にそのまま副葬されたことを示すものである。

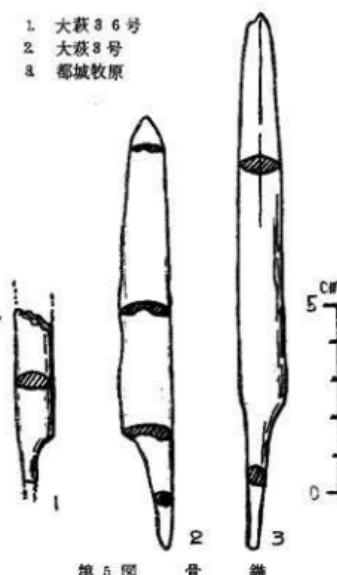
鍬(第6図 図版6)

全長215 cm、身幅2~2.5 cm。平造の背部厚は0.4 cmを示す。鍬先は内反りとなり、先端が著しく狭く尖っており、全体的に細身の曲刃鍬である。着柄部は基部の上方隅を斜に折り曲げる形式をとる。刃に対する柄の着装角度は140°の鋸角をなす。鍬の重量は9.5 tである。この重量は現在使用されている鍬に比べると若干重く、厚鎌の重量に相当するようである。

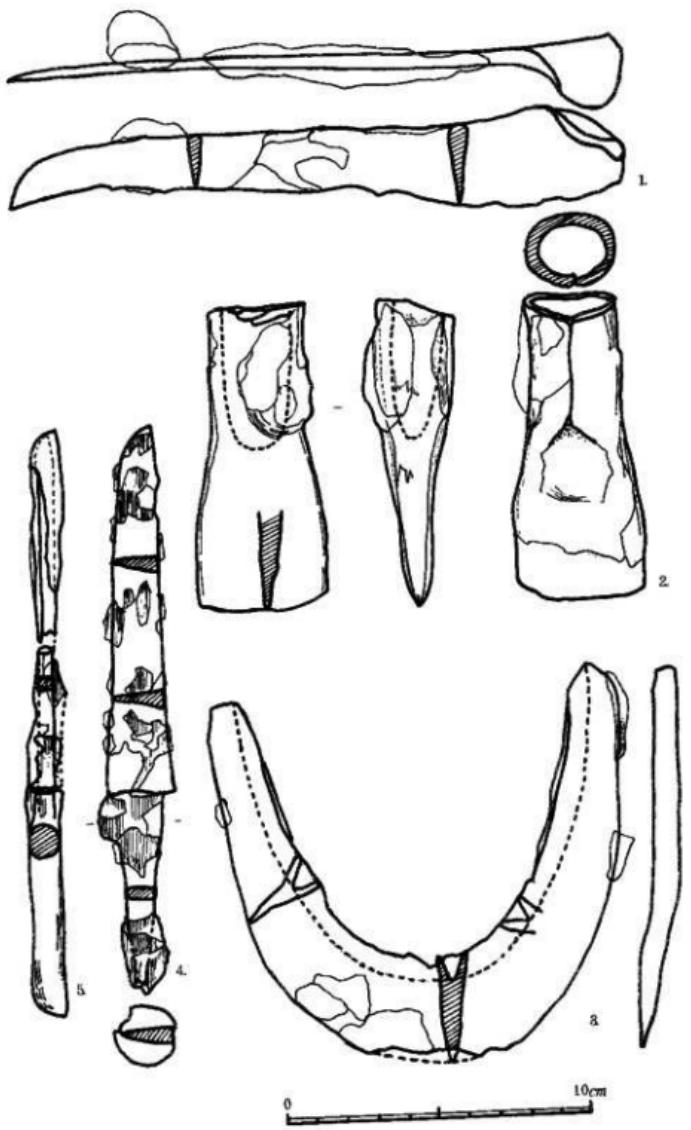
鍬斧(第6図 図版6)

全長117 cm、刃先の幅4.4 cmの無肩挖形の鍬斧である。左右両側を折り曲げて貼り合せられた袋部は、内径2.2 cm、深さ4.7 cmを示す。刃先の厚みから本品が斧としての機能を果したとは考えられず、むし

1. 大荻36号
2. 大荻3号
3. 都城牧原



第5図 骨 鐵



第6圖 鐸・斧頭・鍬先・刀子・棒狀鐵器

る手斧としての削る機能に比重がかかるっていたものと推定する。ことに、玄室壁面に残る長方形の掘り跡と刃先幅が完全に一致することは、先述の鋸先同様、本品もまた玄室の構築に使用されたことを示すもので、手斧と同じ着柄方法をとっていたことが考えられる。

刀子(第6図 図版6)

刀身は平造で、ほとんど反りはみられない。現存長187cm、刀身部の長さ12cm、身幅は中央で1.6cmを示す。茎は6.7cmで、鹿角製の丸柄を着装していたらしく、柄元から柄頭にかけて径2cmの鹿角器具の一部を残している。刀身は革製の鞘に組められていたようで、所々に皮革の痕跡をみる。地下式横穴に副葬されている刀子の中では中型に属す。工具や護身用武器としての機能を果したものであろう。

棒状鉄器(第6図 図版6)

平根鍬と一緒に採集されていたことから、おそらく1号人骨の頭蓋骨周辺に遺存していたものであろう。先端3分の1のところで折れているが全長およそ19cm、径0.4cmの角形細身の棒状鉄製品である。基部に長さ2.5cmの角質製の丸柄が着装されている。棒状部分にも柄と同様の丸形の角質が接着残存しており棒状部分を被覆した丸鞘だったものと考えられる。鉄棒の先端については断定できないが、錆化の状態から四角錐になっていたのではないかと推定される。本品と同じ形式で棒状部分が径0.8cmの丸形で、先端を欠損した残存長9cmの遺物もある。

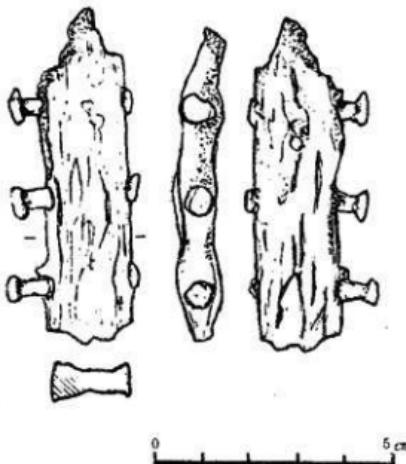
この棒状鉄器は、着柄状態や全体の形態からして錆ではなかったかと考えられる。鞘に納められていたことは、本品が携帯されていたことを示しており、あるいは一種の護身用具としての機能をもっていたのかもしれない。

(3) その他の遺物

鉄金具付木片(第7図)

2号人骨の頭蓋骨の北側に接して、長軸を東西方向においた状態で遺存していたものである。

長さ6cm、幅2cm、現存厚0.7~0.9mmの縦方向に木目の走る木片である。側面から木片を貫いて両端に鋲頭を見せる3本の鉄製金具が打込まれている。鉄金具の全長2.8cm、頭部を除く軸部の長さ2cmではほぼ木片の軸に等しく、軸径は約3mmを測る。3本の金具はほぼ2cmの等間隔で打込まれている。鉄金具は3本とも木片の片側に突出した形で接着しているが、木片と金具輪部の接触面には若干の間隙が観察されることから、本来は左右に可動できたのではないかと考えられる。木質の腐朽がすんでいるため平面はくずれ易い状態にあるが、側面は、表面の硬化がみられ厚形に近い状態にあることを示している。



第7図 鉄金具付木片実測図

また、鉢頭の突出した側面部には、硬化した海绵状の付着物が観察される。或は、皮革製品等が連結されていた可能性もある。

本木片が、果して何であったのかにわからず推定できないが、両端に頭を有する長さ2~3cmの鉢金具については、福岡県宗像町相原2号墳^{※1}や、福岡県宮田町南ヶ浦2号墳^{※2}の出土遺物の中にみられる軸部に木質の鍛造した金具に類似が求められる。報告書では不明鉄器、留金具とされているが、これらの両頭金具は、千葉県市原市持塚古墳7号墳の調査例で飾り弓の鉢金具と断定された金具^{※3}に一致するものである。だとすれば、これに類似する金具を装着している本木片は、弓の頭に近い部分の残片である可能性が高いことになり、それも、鉢飾り弓とすれば、鉢金具装着状態を示す貴重な事例として注目すべき遺物といわなければならない。鉢飾り弓とした場合、鉄鎌に混在した骨鏃など、儀仗矢との関係など改めて注目される。

※1 「相原古墳群」宗像町文化財調査報告書第1号 宗像町教育委員会 1979。

※2 「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第1集」 福岡県教育委員会 1979。

※3 田中新史「古墳出土の飾り弓-鉢飾り弓の出現と展開-」『伊知波良』1979。

本木片については田中氏の表示に負うところが多い。

朱玉

最大のもので直径2.5cm、ほぼ1.5~2.0cmの大きさの小片に分割されているが、小片の周縁にみえる円弧から推定すると、本来は、直徑3.6~4.0cm内外の円形乃至は稍円形の平面形をもつ厚さ8~9mmの円盤状に作られていたものようである。朱玉そのものは、ベンガラと考えられるが、それが辰砂に伴う天然ベンガラか、酸化鉄かは明らかでない。

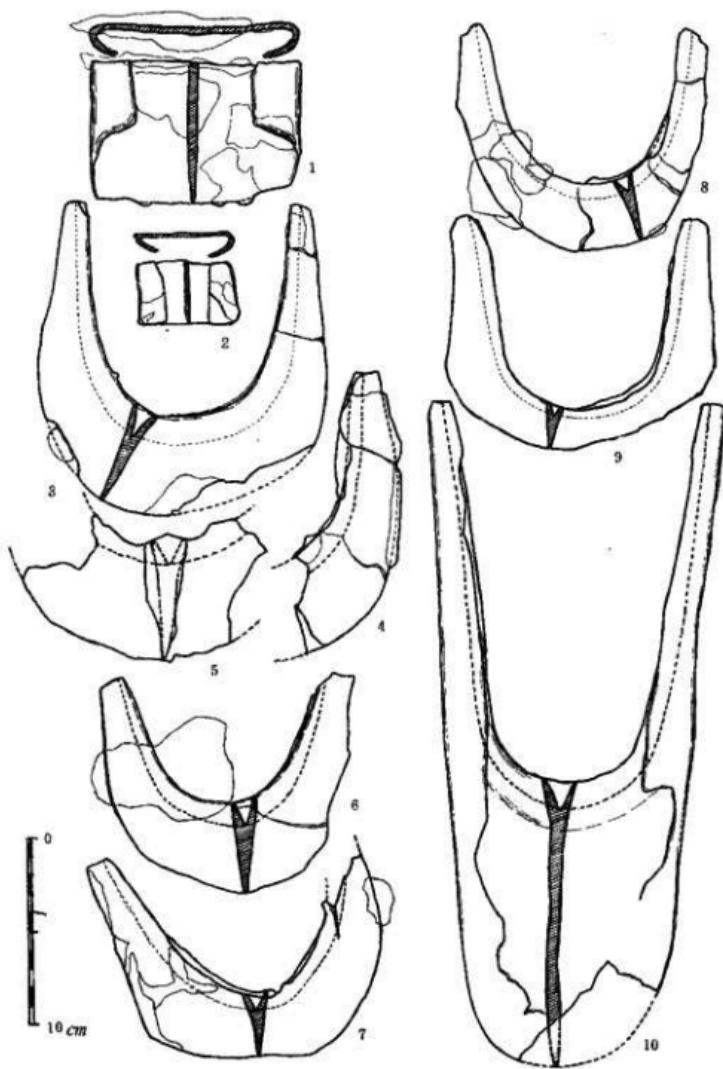
このような朱玉は、過去に大蔵地下式横穴A号^{※1}や、小林市尾中原の地下式横穴に出土例がある。壁面の塗朱と共に注目される資料である。従来の報告の中にある玄室床面の朱塗された例のなかには、このような朱玉が溶けて泥状になっていたものがあったのかもしれない。いずれにしろ、地下式横穴に朱玉の出土例が集中している事は、後世の統日本紀文武天皇2年9月10日の条に記す常陸國、備前、伊予と共に日向からも朱砂を献じたこととも関連して検討るべき課題であろう。

※1 鈴木重治「野尻町大蔵地下式横穴」県文化財調査報告書第5編 昭35年

※2 梶原文藏「朱玉」

※3 改訂増補国史大系本

第8図 地下式横穴出土の鍍先夷測図



1. 都城市下水流町 3. 宮崎市塙原4号 5. 国富町六野原10号 7. 国富町大坪 9. 野尻町大森3号
 2. 国富町木脇塙原 4. 国富町朝盛1号 6. 国富町六野原8号 8. 西都市元知原5号 10. 高崎町城ノ前

VII 玄室壁面の装飾（第2図、図版12）

玄室壁面をいろいろと赤色は、一見したところ朱を塗布したかのようであるが、いずれも3~4cm幅の朱線を横走或は斜走させて塗飾したもので、具象物を描いたものではないが、彩色線文といえる。

西側壁の線文 三角形の天井縁に沿って朱線をまわし、中に5本の横線と、これに交わる縱線を棟から棚状部分まで描いている。棚状施設から下方の壁面には等間隔に近い状態の横線があり、その間に斜行する短線が描きだされている。短線のなかにはX字状に交差させ何らかの表出とみえるものもあるが、どの朱線も粗く雑然と描かれており判然としない点が多い。

東側壁の線文 天井部に描かれた線文は短線で斜行文や横行文を呈するものがあるが、雑然として全体の文様構成を把握できない。壁部分については一部剥落しているが、斜行線と横線それにこれと交差する短線で塗飾しており、奥壁側には斜線文、南壁寄りにはヨ字状の直線文がみえる。この壁面の圖文が如何なる意味をもつものか俄に断定できないが、東側壁は頭位方向にあたるだけに注目される。

羨道のある南側天井壁の線文 羨道より上方の天井壁だけに斜行線や蛇行線、これに交わる短線があり、羨道の西側部分には三本の横線も描かれている。これらの線文は、羨道を中心にして左右に描出された感じがあり、丁度開口した羨道を陽光としてその光を受けて輝く雲を表現したかのようであった。

奥壁の線文 天井部から棟までほとんどすき間のないように朱線を横に走らせベタ塗したかのようになして塗飾している。これは、羨道上方の大井部に描かれた線文を夜明けの行雲とすれば、奥壁の彩色は、夕日を受けて薄暮に照り映える雲霧を思わせるものであった。

VII 考 察

鍔(鉤)先と鍔について

大歴36号の築造年代推定の基準となるものは副葬されていた鉄製品である。劍・直刀・鐵鎌・刀子・鉄斧・銀先・鎌等はいずれも地下式横穴に通有の副葬品で確実な決め手となる遺物はない。ただ副葬品の組み合せとして甲冑を伴わないことから一時期下ることが考えられる。副葬品の中で若干注目されるのは、地下式横穴の中でも出土例の少ない銀先と鎌である。以下、鎌先と鎌について述べてみたい。

鉄製の鍔(鉤)先には、長方形鉄板の左右両端を折り曲げて台木を挿入する袋部とした角型のものと、内縫に台木を挿入する矧り込みのあるU字形鍔先のことは周知のことである。大歴36号出土の鍔先は、刃幅と長さがほぼ均衡するU字形を呈し、都出A類に属する。A類の出現は5世紀中葉に位置づけられている。一方鎌は、刃部が内反りし、刃先の著しく尖った細身の典型的な曲刃鎌である。曲刃鎌の出現はU字形鍔先よりもやゝ早く5世紀前半といわれる。

ところで、地下式横穴の銀先・鎌の副葬例は、六野原1号をはじめ今回の大歴36号を加えわずかに16例を数えるにすぎない(表3)。この中で、銀先と鎌の両方を副葬していたのは大歴36号と都城市下水流町の2例だけである。下水流出土品は、大歴例とは異なり角形の鍔先である。(第7図1)。^{参考}2 角形鍔先は5世紀の中頃には姿を消しU字形銀先と交代するといわれ大歴例に先行することは確実である。^{参考}3

それでは都出A類の副葬例はというと8例あって、これらは共伴関係で次の二つに分けられる。①は、

(表3) 銀(錫)先・鎌を副葬した地下式横穴

出土地・(番号)	墓・墓の型	主 件 遺 物	太 宝の歩跡	文 稿
国富町六野原 1号	曲 刀 墓	横矧板銅留短甲、直刀、矛、盾、頭		宮崎県史跡名勝天然記念物調査報告第1-3號
〃 〃 5号	刀字形	三角板銅留短甲、直刀付背、直刀、頭、刀子、矛、盾	長方形・妻入り	〃
〃 〃 15号	U 字 形	頭形、足、足付、横矧板銅留短甲、直刀、頭、盾、管玉、上頭部、斧玉	長方形・妻入り	〃
〃 大坪	U 字 形	頭、直刀、盾、刀子、矛、盾、頭	長方形	宮崎県文化財調査報告書第1-3號
〃 萩志田塚原 1号	U 字 形	直刀、-----	長方形・妻入り	宮崎県文化財調査報告書第1-3號
〃 木橋塚原	打ノツ形	三角板銅留短甲背久、本直刀角付背直刀、頭、盾、矛、刀、盾	田中茂「宮崎県都城地区式横穴1号出土物」宮崎考古第1号	
西都市下三財元知原 5号	U 字 形	直刀、矛、刀子、盾、矛、盾、管玉	長方形・妻入り	4.5.1調査(日高正規作)
官崎市下北方町塚原 4号	U 字 形	直刀、刀子、盾、頭、管玉、直刀、小正	長方形・妻入り	宮崎県文化財調査報告書第1-3號、石川恒太郎「地下式古墳の研究」
〃 〃 〃 8号	曲刀形(外反り)	頭、直刀、矛、盾、頭、盾中、足付、足付銅留短甲、三角板銅留短甲、子供、馬具、のみ、斧、三頭	長方形・妻入り	「下北方地下式横穴」号 宮崎考古調査報告第1-3號
高崎町鹿谷原村 基 付 矢	矛、頭、土師器	平根円形	石川恒太郎「宮崎縣の考古学」	
〃 鹿村城ノ前	U 字 形	矛		石川恒太郎「高崎町鹿谷村ノ古墳跡調査報告」
都城市下水原町	角形狀・直刀形	頭、直刀	椭 圆 形	4.5.1調査(黒木昭一氏)都城市土器
野尻町一ツ野山大林 A	直 刀 墓	頭、盾、刀子、矛、盾、頭、直刀、盾工	袖形、子入り	黒木昭一「野尻町大典地下式横穴」
〃 〃 8号	U 字 形	頭、刀子、盾、矛、骨器	長 方 形	宮崎県文化財調査報告書第1-3號
〃 〃 石原山大林 5号	日字形・直刀形	頭、直刀、盾、矛、骨器、盾工、刀子	梯 形、子入り	5.5.1調査

六野原8号や10号のように副葬品も豊富で、三角板銅留短甲あるいは横矧板銅留短甲に盾付背などの甲冑に共伴するもの。(表3)

(2)は、国富町大坪、下北方町塚原4号、西都市元知原5号のように直刀・劍・刀子・鎌・鉄鎌・斧頭等に共伴し、甲冑を伴なわないものである。(表3)

大萩3号例は(2)の群に属し、鎌先の形態からは元知原5号例に最も類似している。元知原5号例は直刀・劍・刀子・鎌・斧頭、鉄鎌・管玉に共伴したもので、副葬品の組合せでは大きな差は認められない。ただ、鉄鎌についていえば、元知原5号は尖鋸長頭鎌を作らず平根式鎌だけであること、その中に二重の逆刺を有する無茎の平根鎌も含まれていることである。この無茎平根鎌は、5世紀末から6世紀初頭に比定されている横矧板銅留短甲を共伴した西都原地下式4号の鉄鎌に類似が求められるだけに

大萩3号との間には若干の時間差が考えられる。また下北方町塚原4号にも二重の逆刺の無茎平根鎌

鎌が含まれており元知原5号とほぼ同期とおもえる。

鎌先自体の形態では、六野原出土品や下北方塚原4号例が、刀先部の身幅が6~7cmと広いのに対し、元知原や大萩3号例は3.5cm前後の身幅しかなく、①群より②群がやゝ細くなる傾向がうかがえる。大萩3号例はさらに身幅が狭くなり、左右側面に張り出しが見え凹字形に近く、都出C類への移行形ともいえる形態を呈する。

一方、曲刀鎌の副葬例は5例を数えるが(表3)、甲冑との共伴例は六野原1号と下北方町塚原5号とがある。六野原1号出土品は現在寸で現物の確認ができないが、塚原5号の曲刀鎌は先端部が外反り乃至直に近く他に類例をみないものである。共伴の甲冑・馬具等から6世紀後半に位置づけられるものである。都城市下水流の曲刀鎌は着柄部が直角になる型式で、角形鎌先と共伴している。角形鎌先

の下限を5世紀中頃とする都出氏の編年觀に従えば、下水流の曲刃鎌はU字形銀先に先行するもので、地下式横穴に副葬された葬具としては古い方に属するとみてよいであろう。大萩36号と同じ台地に発見された大萩A号では、剣・刀子・斧頭・鉄鏡・貝輪・銀葉に共伴しており、築造年代は6世紀前半に比定されている。^{参考6}

以上のことから判断されることは、地下式横穴に露出A類のU字形銀先や曲刃鎌が副葬されるのは5世紀後半から6世紀の前半に限定されるのではないかということである。遺構の形態からみれば、ほとんどが地下式横穴の構造編年からは第一様式にあげられる長方形・羨道妻人りの形式のものが大半を占めていることは注目しなければならない。この点、構造上梯形平入りの第二様式に位置づけられる大萩36号例は、副葬品の組合せでは同じ②類に属する元知原5号や下北野塚原4号よりは遺構編年上後出と考えられる。このことは遺物の上でも指摘されたことであるが、それがどれほどの時間差を伴うものかは、なお共伴遺物との詳細な比較検討が必要である。

註1 塚3塚5 都出日呂志“農具鉄器化の二つの画期”考古学研究13巻3号 1967

塚2 19年8月に黒木昭三氏によって調査され、現物は都城市郷土館に保管されている。

塚4 塚7 日高正晴“日向地方の地下式塚”考古学雑誌43巻4号 1958年

塚6 鈴木重治“野尻町大萩地下式横穴”宮崎県文化財調査報告第5編 1960年

装飾について

大萩36号の装飾は、羨門外壁の朱彩と、玄室内壁に描かれた彩色線文とで構成されている。羨門外壁の朱彩は、羨門を囲むように左右と上部に塗彩したものである。それは、特別な図文を描いたものではないが、横口式家形石棺あるいは横穴の入口の外壁に彫刻や彩色の圖文を描いたものと軸を一にするものとも考えられ。死者の安息の場である塚内への悪靈や惡魔の侵入を防ぐための除魔封禁のしではなかったかと考えられる。玄室内壁の彩色線文は、幅3~4cmの朱線でもって一見ベタ塗りともおもえるように塗彩したもので、具象的な圖文が少ないので彩飾の意図を明確にすることは困難である。しかしそれらの朱彩が、被葬者に対する深い感情と他界観念にもとづいて特別な意図をもってなされたことは十分に推察されるところである。また、根底に赤色による除魔の思想があることも否定できないことであろう。

ところで、東西両側壁の圖文のうち、西壁に描かれた線文は、高原町旭台の地下式横穴7号をはじめ6号、12号などに描かれていた直線圖文に対比されるものであろう。旭台の圖文にくらべると、線文は雑然として形骸化は否めないが、明らかに家屋内部の質や東木あるいは柱を表示したものと考えてよい。一方、東壁の圖文は、壁面の剥落もあり満足ではないが、埋葬人骨の頭部に位置するだけに、壁面に残る斜線文とヨ字状の直線文には、惡魔や惡靈から死者を守るために呪縛の意図が付与されていたものであろう。

続縫のつく南壁天井部に描かれた意図不明の複雑な線文も、詳細に観察すれば羨道を中心に放射状に描かれた感じがあり、それは、あたかも羨道を陽光とした旭日に輝く行雲の表示ともうけとられるものである。またベタ塗りともみえる北壁の彩飾は、夕日に映える雲霧の重なりにも例えられる。果して、當時どのような太陽信仰があったか遠断できないが、少なくともこれらは壁面の朱彩の中には、陽光をもって来世への蘇生と安穏なくらしを祈念する呪的觀念が表示されているのではないかと思えるのである。それは、地下式横穴が家形構造をとることの中に、来世の生活を願う他界觀の存在を見い出すからである。

分布 現在までに朱彩直線文を描いた地下式横穴は、高原町旭台の 8 基のほかに、高崎町前田谷川仮屋尾 3 号、同町江平字之原にも発見されている。これに、今回の大萩 36 号を加えると 6 基の装飾地下式横穴が存在したことになる。この 6 基は、野尻、高原。それに高崎の三町が境界を接する地域を中心に、一辺 12km 前後の正三角形に囲まれる範囲内にそれぞれ位置しており、特殊な分布地域を形成することが予想される。今後、確実に分布範囲が限定されることになれば、その背景について特殊集団の存在とも関連して検討すべき課題である。

従来、地下式横穴の天井に線刻された屋根形の表現は装飾としてとりあつかわれた事はないが、旭台の彩色直線文による垂木表現とも通じるものがあり当然装飾の範疇に加えらるべきものとおもう。そこで壁面塗朱の事例も加え、地下式横穴の装飾を次のように分類しておきたい。

まず第一に挙げられるのは、線刻によって屋根や家屋内部を表すもので、地下式横穴の模式圖として引用される六野原 2 号に代表される。これを 1 類とする。六野原 2 号のほかに、同富町大坪、えびの市真幸島内などがある。島内は橢円形の寄棟造の構造をとるが、他はいずれも長方形妻入の造構である。調査品に三角板紙留短甲や、横矧板紙留短甲を伴っている。

次は、玄室壁面の全面か片面だけを塗朱したもので、これを 2 類とする。これは、石棺や石室内面に塗朱したものとも通じるもので、本来装飾古墳の中には加えられていないが、玄室壁面全面を塗朱したことは、単に除魔鎮魂を目的としただけでなく多分に装飾的な意図も加味されていたとおもえるからである。宮崎市下北方町塚原 5 号、西都市西都原 4 号、大萩 F-10 号が挙げられる。西都原 4 号には部分的に朱線文とみられるものがあり、次の 3 類との関連も考えられる。玄室の一面のみに塗朱した例として、国富町須志田坂盛 1 号がある。玄室の平面プランは、大萩 F-10 号が梯形で、他の塚原 5 号、西都原 4 号、それに坂盛 1 号は長方形妻入りの構造である。

最後が、旭台の 6 号、7 号、12 号に代表される朱線によって屋内の貫や束木或は稚木などを表出したと考えられる彩色直線文の図文を描くものである。これを 3 類とする。高崎町前田谷川仮屋尾 3 号、同江平字之原などがこれに属する。大萩 36 号も一応 3 類に分類されるが、玄室内壁全面を家屋表示とみられる彩色で統一した旭台例とは、若干の相違もあり 3 類-B としておきたい。

以上の分類は同時に若干の時期差を伴うことも考えられる。調査品や玄室構造からは 1 類と 2 類に先行するものが多く 3 類が後続するとおもえるが、構造編年上は第二様式とされる片袖梯形の玄室をとる仮屋尾 3 号では、調査された鉄錠の中に野中アリ山古墳から多量に出土している鐵身の両側に二段の逆刺をもつ有茎鶴彫柳葉式の鉄錠がみられるなど一概に後出と決められない要素もあり、編年については更に検討を要する課題である。

註 1 齋藤忠 “葬送儀礼—古代日本人の死の儀礼” 現代のエスプリ 111 1975

註 2 石川恒太郎・岩永哲夫 “旭台地下式古墳群調査報告書” 宮崎県文化財調査報告書 第 19 集 1975

註 3 番地造成で破壊 45 年 3 月に黒木昭三氏調査、同氏より教示。写真確認による。

- ※4 黒木昭三氏の教示による。 46年7月黒木氏調査
- ※5 史蹟名勝天然記念物調査報告 第18輯 宮崎県 1944
- ※6 石川恒太郎 “国富町大坪地下式古墳調査報告” 宮崎県文化財調査報告第15集 1970
- ※7 東原文雄 “えびの市真幸島之内地下式横穴” 宮崎県文化財調査報告書第12輯 1967
- ※8 “下北方地下式横穴5号” 宮崎県文化財調査報告書第3輯 1977
- ※9 日高正晴 “日向地方の地下式墳” 考古学雑誌43巻4号 1958 報告書では「壁面は朱の様なもので塗られている」とだけ記されているが、再点検の結果、鮮明な朱彩が認められる。開放されているため、心ない落書きで寸断されているが壁面から天井にかけて部分的に朱線の痕跡が認められる。
- ※10 大萩遺跡(1) 宮崎県教育委員会 1974
- ※11 石川恒太郎 “国富町飯盛の地下式古墳調査報告” 宮崎県文化財調査報告第18輯 1958
- ※12 鈴木重治 “野尻町大萩地下式横穴” 宮崎県文化財調査報告第5輯 1960
- ※13 ※8に同じ
- ※14 ※4に同じ
- ※15 ※9 同書
- ※16 北野耕平 “野中アリ山古墳” 『河内における古墳の調査』大阪大学 1964
- ※17 稿了後昭和54年5月、高崎町仮屋尾に隣接する高原町日守の地下式横穴で、斗組の表示とみられる浮彫線刻の装飾が発見された。1類の線刻装飾の中に浮彫を伴うものを細分する事ができた。

VII 結語

玄室壁面を朱線で彩色した大萩地下式横穴36号の発見は、50年高原町旭台に初めて発見された装飾地下式横穴に新たな資料を加えただけでなく、旭台を中心とした高崎を結ぶ装飾地下式横穴の新たな分布図を予想させた点で重要であった。同時に、すでに300を越す地下式横穴の中に、装飾地下式横穴として3つの類型を見出す切っ掛けを与えたことは大きな成果であった。装飾地下式横穴が、九州の装飾古墳の中でどのように位置づけられるのか、系譜や背景については今後の課題としたい。

ところで、大萩36号は、遺構の構造上は特に変わった点もなく一般に見られる形で、玄室平面プランは狭道側を底辺とする梯形で、天井寄棟造、狭道は平入りの構造である。大萩遺跡の中では、49年に発見調査されたF区の10号にもっとも類似しており、しかも10号が玄室全面を塗朱していたことは、両者の関連^{※1}を示唆するものとして注目すべきである。

大萩遺跡では、これまで発見された86基の地下式横穴中、一般に古式に位置づけられる長方形妻入りの玄室平面プランを有するものが1基もなく、大半は、梯形平入り型で占められている。これは、大萩遺跡の地下式横穴群の築造年代比定の上で、一つの指標を与えるものとして重視される。^{※2}

大荻36号に埋葬された遺骸は2体であった。家族墓としての性格を有する地下式横穴では当然追葬が予想されるが、36号では副葬品の出土位置に若干の疑問が残ったが、追葬を示す積極的な確証は得られなかった。埋葬遺骸は、玄室の右側・東南側に頭位を置き仰臥伸展葬されていたものと推定した。大荻遺跡では発見された遺骸の大半は仰臥伸展葬をとっており、大荻集団の一般的な埋葬姿勢だったものとおもえる。埋葬人骨の頭位については、玄室の長軸方向によって決定されるだけに、墓域の構築にあたっては、当然、墓地を構成する所属集団のもつ頭位方向の慣習に従って掘堀の方向を定めたとおもえる。大荻地下式横穴群では、頸蓋骨の遺存した21例からは次のような結果を得ている。

東南におくもの	15例
北東におくもの	4例
北西におくもの	2例

全体の70%が東南に頭位をおいていることになり、大荻遺跡では頭位方向を東南にする慣習が存在していたのではないかと考えられる。大荻36号もそうした一般的な慣習に従っていた事になる。ちなみに、えびの市久見追地下水式横穴群の場合をみると、人骨のあった10例中、ほとんどが北東に頭位をとっている。^{※4}また、同市馬頭の地下式横穴群では南北に玄室の長軸方向が置かれているなど、地域とその所属集団の慣習によって方位の異なることが指摘できそうである。しかし、東南や北東の方位は、古墳時代の一般的な頭位に一致するものもある。^{※5}

副葬品は、剣1、直刀1、鉄鎌21、刀子1、鎌(鍔)先1、鎌1、斧頭1、細身の棒状鉄器など武器と農工具だけで、須恵器や土師器は伴っていないかった。全般的に副葬品の少ない大荻遺跡の地下式横穴群の中では、A号、B-1号、B-9号、C-4号、F-8号などと並んで比較的豊富に副葬品をもっていた例である。大荻遺跡の群内ではこれまで甲冑を所持していたものもなく、梯形や橢円形の平面プランをもつものが多い事とも関連して注目されることである。大荻遺跡では、武器や農工具が、甲冑に変わり編年の基準にされなければならない指標遺物として位置づけられる。

大荻36号は、副葬されたU字形鍔(鍔)先や曲刃鎌、それに鉄鎌の構成、玄室の平面プラン等から判断して築造年代は6世紀前半とするのが妥当かと考えられる。同じ平面プランをもつ遺構との群内の編年や、玄室彩飾の背景、そして、被葬者の問題等、なお多くの課題が残されたままである。

(茂山 謙)

註1 「大荻遺跡」(1) 宮崎県教育委員会 1974

※2 大荻遺跡では36例中16基までが梯形かそれに近い長方形状平入りの構造をとっている。

※3 ※1に同書 板出邦洋「人骨の埋葬方法」

※4 九州総貿易自動車道関係埋蔵文化財調査報告(1) 宮崎県教育委員会 1972

※5 ※4に同書

※6 齋藤忠 「古墳方位考」 考古学雑誌39巻2号 1968



壁面の彩色線文



西側壁



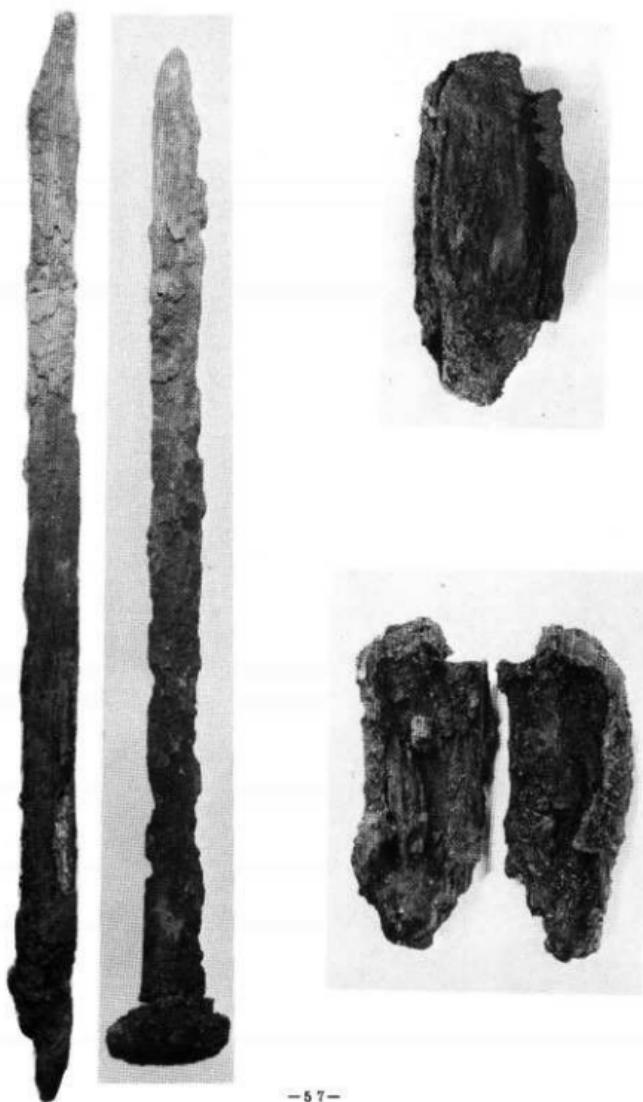
南側壁

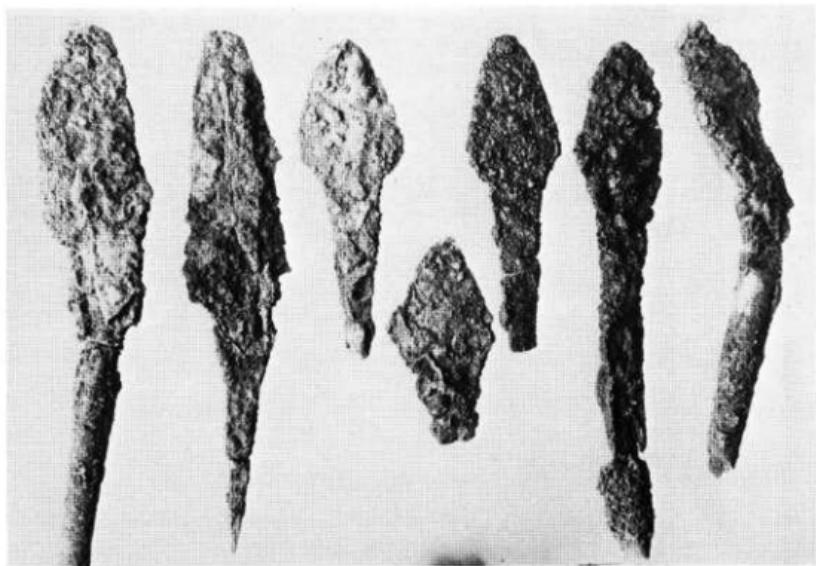
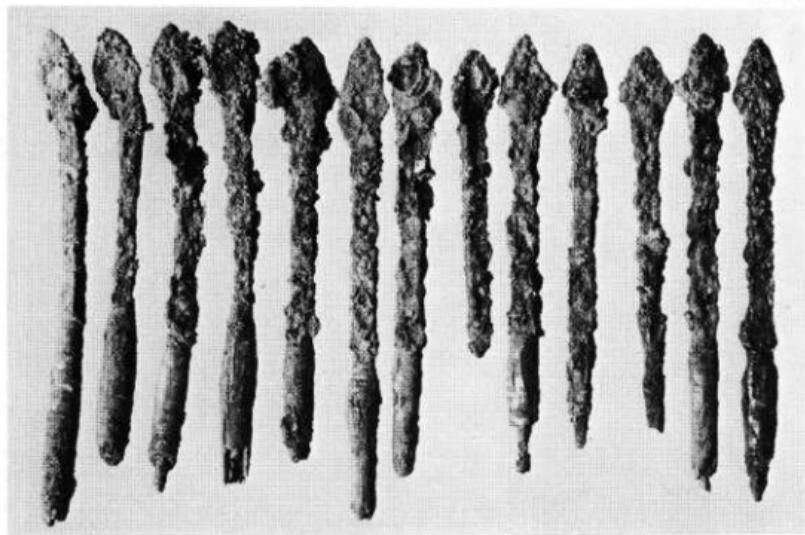
図版 3

鉄鎌・鉄斧・鍔先の出土状況



直刀·劍·木製裝具





鍊・斧・刀子・鐵先・棒狀鐵器





IV 日守地下式横穴54-1~4号発掘調査

西諸県郡高原町大字後川内1の119

県埋蔵文化財調査員 茂山 譲

タ 面高哲郎

県文化課主任主事 岩永哲夫

本 文 目 次

はじめに	6 4
I 調査の経緯	6 5
II 遺跡の状況	6 6
III 遺構と出土遺物	6 7
1 5 4 - 1 号墳	6 7
2 5 4 - 2 号墳	6 7
3 5 4 - 3 号墳	7 0
4 5 4 - 4 号墳	7 4
IV 結 語	7 8

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地形図	6 4
第2図 遺跡地平面図	6 5
第3図 土 崩 図	6 6
第4図 5 4 - 1 号地下式古墳実測図	6 8
第5図 5 4 - 2 号地下式古墳実測図	6 9
第6図 5 4 - 2 号副葬品実測図	7 1
第7図 5 4 - 3 号地下式横穴実測図	7 2
第8図 5 4 - 3 号墳出土土鉄劍実測図	7 3
第9図 5 4 - 4 号地下式横穴実測図	7 4
第10図 4 号墳出土遺物実測図	7 5
第11図 高崎町大字前田仮屋尾地下式 3 号墳実測図	7 6
第12図 高崎町前田仮屋尾地下式 8 号墳出土遺物実測図	7 7

図 版 目 次

図版 1	(1) 遺跡全景	8 1
	(2) 遺跡発見状況	8 1
図版 2	(1) 5 4 - 1 号玄室状況	8 2
	(2) 5 4 - 1 号束柱状況	8 2
図版 3	(1) 5 4 - 1 号副葬品	8 3
	(2) 5 4 - 2 号閉塞石	8 3
図版 4	遺跡の現状	8 4
図版 5	遺構	8 5
図版 6	4 号墳の閉塞	8 6
図版 7	鉄鎌・刀子・劍	8 7

はじめに

54年5月と6月の2度にわたり、西諸県郡高原町の土取場で、地下式横穴が発見され緊急調査したので結果を報告する。高原町は、これまで西諸県郡内では地下式横穴の調査例の少ない地域に数えられていた。今回の発見は、50年末の大字広原、旭台の高地で、装飾地下式横穴8基を含む13基の群集墳発見につぐものであった。しかも、その中には、家屋構造の墓室に東柱の浮彫を有するものがあり、装飾地下式横穴に新たな資料を加えることになった。

この日守地区に、地下式横穴の存在が確認されたのは、昭和44年の埋蔵文化財分布調査である。当時すでに後川内と出口を結ぶ隧道の開削工事で6基の地下式横穴が開口しており、地下式横穴群集の可能性のある重要地点として指摘されたのであった。（「九州縦貫自動車道遺跡分布調査報告書」宮崎県教育委員会 昭44）今回発見されたのは4基であり都合10基存在したことになりいよいよ群集地としての確証が得られたわけである。ところで、日守とは道路を隔て南方に広がる丘陵地（行政上は、高崎町大字前田字仮屋尾に属する）にも、畠地造成の為の地盤切下げ削平工事で3基の地下式横穴が発見されている。（石川恒太郎「高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告」県文化財調査報告15集・45年）このうち1基には、旭台と同じ彩色線文の装飾のあったことが確認されており（黒木昭三「諸県地方の地下式古墳」ひなもり記抜刷）、今回の日守1号の浮彫装飾との関連など注目されるところである。日守地区は、隣接する仮屋尾を含め、西諸県郡の中でも特異な地下式横穴の群集地として一層重要性が強調されてきたわけで、今後、この地域の開発行為には厳しい監視と規制が要請されることになった。



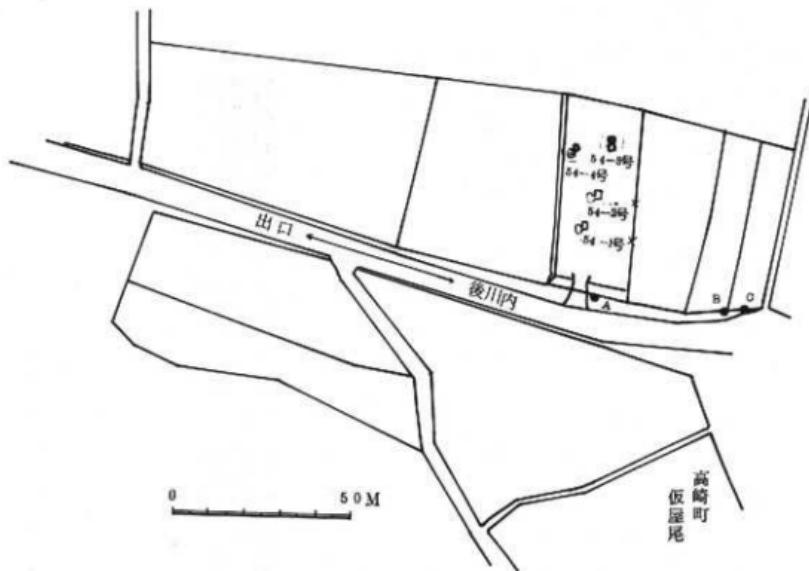
第1図 遺跡周辺地形図

- 1 日守・仮屋尾地下式横穴群 2 大荻地下式横穴群
3 旭台地下式横穴群

I 調査の経緯

遺構発見の直接の動機は、高原農協が、日守1-119番地（地主大蔵稔氏）の畠地の土を、水稲苗床用として採土したことにはじまる。なだらかな丘地をおよそ5mも切り下げる採土作業中、掘削機の爪先に突然空洞が現われ遺構の発見となったものである。現場からの急報を受けた高原町教委は直ちに県文化課と連絡を取り緊急調査の運びとなった。

遺構は、54年の5月に2基、6月に2基と都合4基が発見された。各遺構は、15.6mの間隔で所在発見されている。調査に先立ちこれらの遺構は、発見年を頭につけて5月発見のものから54-1号、2号、6月発見の遺構を東側から54-3号、西側土堤下にかかるものを54-4号と呼称することにした。発見当時の各遺構の現状は次の通りである。



第2図 遺跡地平面図

- 44年分布調査時に確認された地下式横穴
- 54年度発見
- × 断層に堅坑らしき握り込み

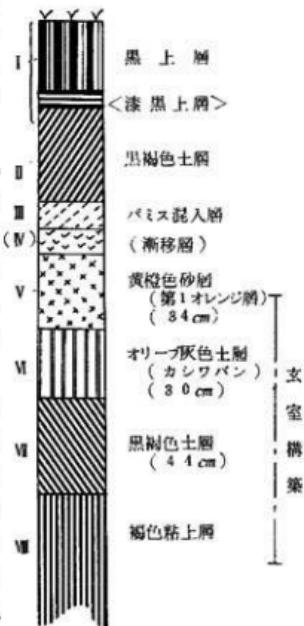
54-1号は、玄室の東南側半分を対角線状に斜断削除され、北壁の一部を残すだけの状態で発見され、残された北壁切妻部分に束柱表示の浮彫がみられた。54-2号は、玄室の南側と東壁の一部を削除された状態にあった。次に、1号と2号の北側に位置した54-3号は、玄室の南西隅をわずかに御削しただけの損傷の少ない状態で開口し、4基の中では最も遺構の原形を保っていた。54-4号の方は、遺構の上層部が削平採上されていたため、玄室と羨道境目の天井部分が陥没開口したものであった。このため羨道の閉塞石積の一部が破損してはいたが、遺構の原形はほぼ確認することができる状況におかれていた。

調査は、1号と2号を54年5月8・9の両日、岩永哲夫が実施し、3号と4号は、54年6月7～9日の3日間、面高哲郎・茂山謙の担当で行なった。調査期間中、高原町教委社会教育課をはじめ、町文化財委員山下氏の協力を得た。

II 遺跡の状況

遺構の発見された西諸県郡高原町大字後川内字日守は、高原・野尻を結ぶ県道から、出口で分岐して後川内へ通じる県道を東へおよそ8kmほど進んだ地点、道路彌刹の北側丘陵地にあたる。付近は標高210m、なだらかな丘陵地になっている。その丘地の頂部にも相当する円丘状部分が遺跡地になっていた。遺跡に立つと、丘地は西方へ樹を引き、開削地の水田が広がる。その前面には霧島山の巣峰を仰ぎ、山麓の一角に装飾地下式横穴の所在地旭台を眺望する。また、北方には野尻町三ヶ野山大(IV)や遺跡が遠望される。遺跡背後には、民間信仰の靈山靈権現の鎮座する標高348mの靈ヶ岡も控えるなど、周囲の集落からもやや隔絶したこの地は、千古の眠りを続ける古代人の奥津城に相応しい環境ではある。

御削された丘地断層の観察から、遺構は地表下2m～20cmの粘土層内に床面をおいて構築され、次の層序が確認された。地表下30～40cmの黒土層を第I層として、I層黒褐色土層(40～45cm)、この間部分的に漆黒土の薄層が介在する。II層褐色バミス混入褐色土層(12cm)、IV層灰褐色土層(漸移層12cm)となり、V層が俗に赤ボクと呼ばれる黄褐色大山砂層(いわゆる第一オレンジ層(34cm))がくる。このあと、VI層に、この地方でカシワバンと呼んでいるオリーブ灰色の堅い土層があり、VII層黒褐色粘質土層、そして褐色粘土層と続く。遺構は、



第3図 土層図

Ⅲ層黒褐色上層面を堅坑の掘り方として、墓室は、V層を天井にVI層・VII層を穿ち、粘土層を床面として構築されていた。従って、もっとも堅牢な土層内に墓室を構えていただけによく保全されていたわけである。堅坑掘り方の検出されたⅢ層面上に遺構構築時の地表面があったものとおもえる。断層面でもこの付近に土器碎片の包含されるのが観察されている。堅坑から玄室部にかけての地表面での盛土等外部施設については、遺構上層部の削平等もあり検証することはできなかった。遺構床面に高低差のあった事や、円丘状の地形からみて、自然地形を生かしこれを墳丘として遺構が構築されていたとも憶測されるところである。(茂山謙)

III 遺構と出土遺物

1. 54-1号墳(第4図)

この地下式古墳は、町教委に届出の時点で既に半壊の状態であったが、幸いだったのは日守地下式古墳の築造年代に大きな示唆を与える遺構の一部即ち玄室左側壁に刻み込まれたいわゆる東柱が残っていたことである。右側壁はほとんど破壊されていたが、付近で左側壁と同様(造りは若干劣るが)の東柱造り出しとみられる土塊を見つけ、両側壁に加工していたことが考えられた。

以下遺構の概要について述べる。

遺構の全体形はおそらく左片袖型平入り寄棟造りであろう。堅坑と玄室を結ぶ主軸の方位はE10°Nでほぼ東西である。

残念ながら、堅坑は発掘できなかつたが、町教委の話では閉塞方法は磐石による蓋門部閉塞であったようである。蓋造は粗かく、左側で2.5cm、右側で5.0cmをはかる。高さは中央で5.5cmである。

玄室は、南北に長方形が考えられる。原状の残っていた玄門付近での長径は約150cmであり、短径は約100cm程度を推定できる。玄室入口部分及び左側壁にはそれぞれ最大8cm、4cmの幅を持つ棚状施設が床から40cmの高さにおいて掘り込まれていたが、右側壁及び奥壁は不明である。天井までの高さは95cmである。

また、前述したように左側壁には地下式古墳においては初めて見る家屋構造で東柱にあたると思われる柱状浮き彫りを造り出していた。長さは54cm、幅17~20cmのもので、下部87cmは長方形状であるが上部は丁寧な彫刻である。

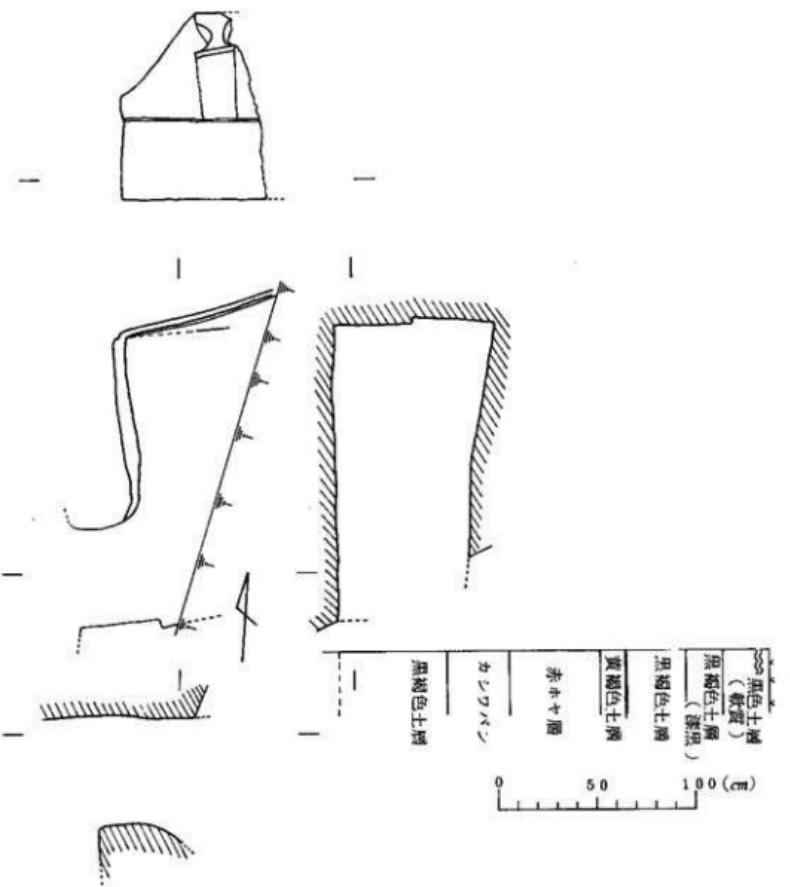
人骨及び副葬品は、床面がすでに荒されていたため発見することができなかつたが、床面清掃の段階で中央付近に鉄さびが残存していたのでおそらく何かの鉄器が副葬されていたのである。

2. 54-2号墳(第5図)

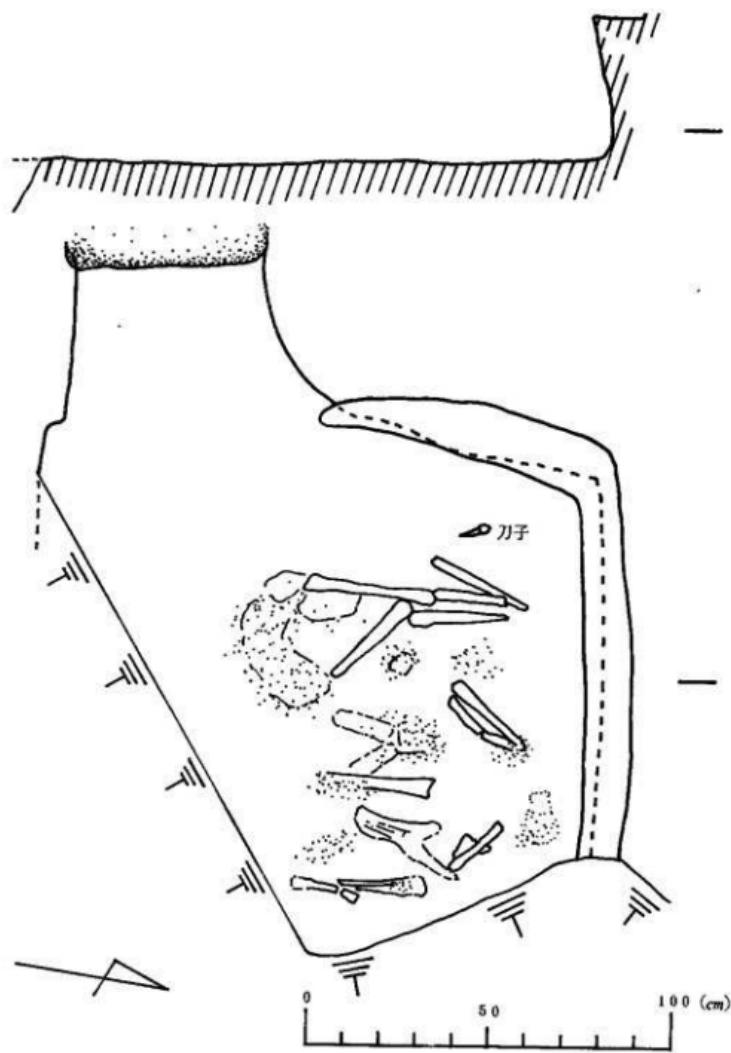
前記1号と同様半壊の状態で、3体分とみられる人骨及び副葬品はすでに取り上げられていた。

調査の結果は次の通りである。

残存している部分からの判断では、左片袖型平入り寄棟造りと思われる。堅坑と玄室を結ぶ主軸の方位はE10°Nで、1号とほとんど同じである。



第4図 54-1号地下式古墳実測図



第5圖 5·4-2號地下式古墳実測図

堅坑部は破壊されており、閉塞石を残すのみであったが自然石5個で澳門を塞いでいた。

羨道は、右側はほぼ直線的に伸び45cm、左側は弧状に外反しており、長さは同じく45cmである。幅は澳門で50cm、玄門になると約70cmに広がっている。高さは不明である。

玄室は方形状をなし、左壁には幅18~15cm程度の棚状施設を有している。玄室内には3体分とみられる人骨があったが、頭部は取り上げられ、実測図の通り下半身のみが残っていた。頭位は3体とも南である。

副葬品

刀子〔第6図(1)〕

総長9.4cm、身長6.4cm、柄長3.0cm。身は細身で闊寄りの最広部1.5cm、柄部は桜皮巻き(?)をした後鹿角形にしている。棟幅0.2cm。この刀子のみが調査中発見した遺物である。

貝輪〔第6図(4)〕

オオツタノハ製で、中央で二つに割れているが、内径をはかると、長径7.4cm、短径4.9cmで幅は最大1cmである。

その他、鞘に入った剣〔第6図(2)〕、鉄鎌〔第6図(3、5)〕がある。町教委の話では2号出土ということであった。
(岩永哲夫)

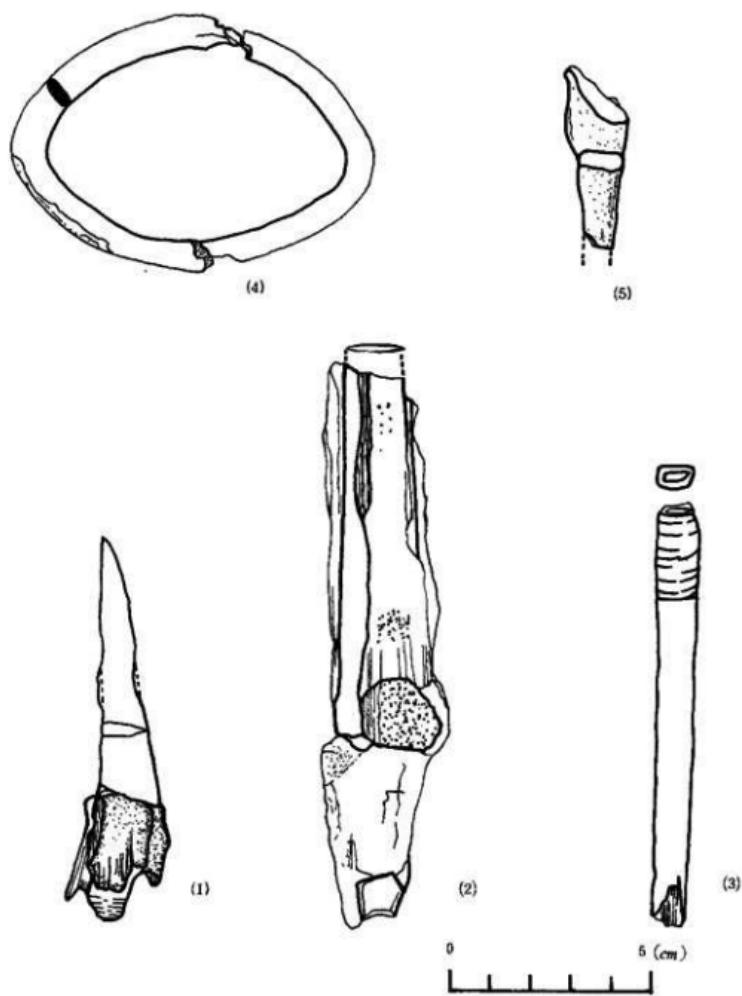
3. 54-3号墳(第7図)

堅坑・羨道・玄室を結ぶ主軸方向をN29°Wにとり、北に堅坑、南を玄室として構築されていた。堅坑と玄室を結ぶ床面の長さは3.7m、中規模の地下式横穴であった。

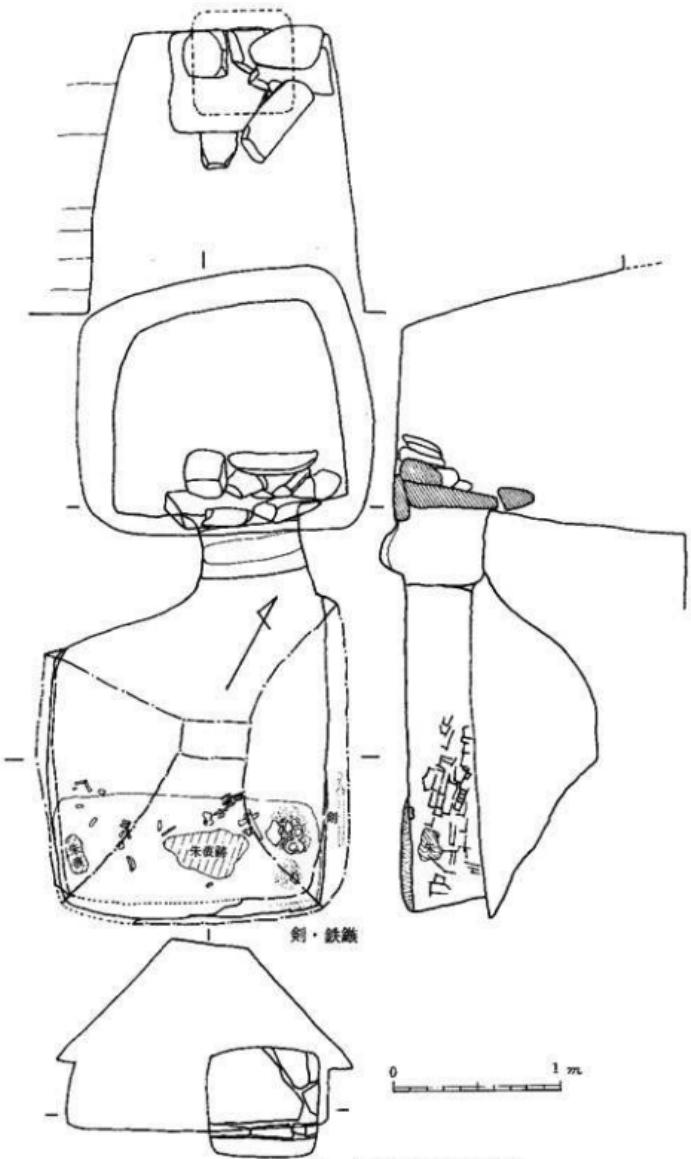
玄室の奥行1.9m、幅1.6mで、床面から天井棟までの高さ1.15mあり、天井は南北に棟の走る寄棟造になっていた。東西南の三方には、床面から4.0~4.2cmの高さの位置に、幅1.0cm前後の棚状施設があり15°~50°の傾斜の天井と交差し庇をなしている。玄室の左右壁面には、墓室掘削時の掘り跡が明瞭にしらされている。これを見ると右斜上から左下へ向う掘り跡と、左上方より右斜下への掘り跡とがあり、掘削用具の使用状況を推察することができる。これらの掘削跡がすべて方形状を呈することは、掘削用具の刃先が角形のものであった事を示すものである。掘り幅は、右側では狭いもので6.3cm、広いもので8.7cmを計り、左側では4.7cmから7.7cmの間にあり、5cm前後の刃幅のものと、8cm代の刃幅をもつ広斧2種類の用具が使用されたのではないかとおもわれる。大斧3号墳や、都城市下水流の地下式横穴の例から、狭い方は手斧が、広幅の方は角形の鍬先を着装した鍬(鎌)が使用されたのではないかと推測する。しかしながら副葬品の中にはいずれの遺品も見出すことはできなかった。

羨道は、玄室の片端に、寄棟造の天井に対しては、平入となる片袖型平入になっていた。澳門は、幅6.5cm、高6.5cmの方形を呈し、厚さ1.0cmほどの板石を立てかけた石蓋式で閉塞されていた。堅坑は、掘り方1.50×1.75cmの長方形で、坑底までの深さ1.60cm、角錐状に掘り狭められた坑底は1.20×1.30cmと方形に近く、ほぼ垂直に掘り下げられている。基底面中央に澳門を穿孔していた。

奥壁に沿って1体分の人骨が散乱していた。東北東を頭位として埋葬されたものである。頭部の位置した側面や、床面、体位中央部分、足元と朱痕がみられ、頭蓋骨も朱に染っていた。しかしながら開口後に内部が擾乱された形跡があり、頭蓋骨が踏み砕かれていたのは残念であった。人骨のあった床面、奥壁から6.0cmの間は床土が柔かく、整査の結果、約1.0cmほど床面が凹められ、この凹みにシラスを盛土し、屍床を設けていたことが確認された。



第6圖 54—2號副葬品尖測圖



第7図 5.4-3号地下式横穴式石室

出土遺物 3号墳からは剣2振（うち1振は柄部のみ）と、鉄鎌2本が出土している。調査前にとりあげられ詳細は不明であるが、柵状部分に残る鎌の痕跡から、すべて柵状施設に埋葬されていたものと考えられる。

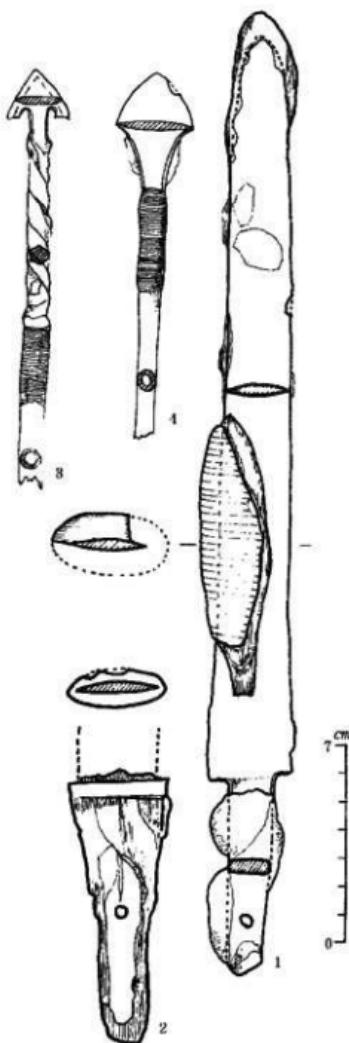
剣①（第8図1）は、全長34.5cm、剣身の長さ26.3cm、身幅2.5~2.9cmと鋒に向って身の狭まる細身短剣である。関は角関、茎の長さ7cm、茎尻は栗尻をなす。身は茎のほぼ5倍となっている。鋒部分と身の中ほどに鞘木の残片が接着する。中程の鞘木には幅2mmほどの紐あとが残り鞘巻の状況が観察できる。

剣②（第8図2） 柄だけで身を欠ぐ。柵上に残された鉄鎌の痕跡からは剣身の遺存していたことが容易に推定されるだけに、開口後に紛失したものともわれる。残存する柄部の長さ9.5cm、柄木の中にみえる茎には、茎尻から4.5cmの位置に目釘孔が一孔みえる。柄元の幅8.7cm、柄元周縁には幅6mmの口金痕がのこる。柄元断面から身幅3cmの剣身であったものと推定される。

鉄鎌①（第8図3） 平根三角形柵抜鎌である。身は両刃で、縁に沿ってかすかに鎌がみえる。茎には径3mmの竹製矢柄が残る。身と茎との間、6.7cmの柵状部分にはひねりがあり、地下式横穴の鉄鎌としては、これまで類例の少ないものである。

鉄鎌②（第8図4） 平根菱形式に属するが、鋒から後角部にかけてゆるやかな丸味がみえる。稜角部から茎にかけては、両削関となり急に細身になっている。茎にはわりと深く竹製矢柄が装着されている。

菱形式の鉄鎌は、西諸県地方の地下式横穴には最も多く副葬されている型式であり、鋒が銳利で尖り稜角までの刃部の長い形のもの、身幅が著しく広く、いわゆる広根式と呼ばれる形のものなど、それぞれ墓地集団によって形態差がみられる。



第8図 54-3号墳出土鉄剣実測図

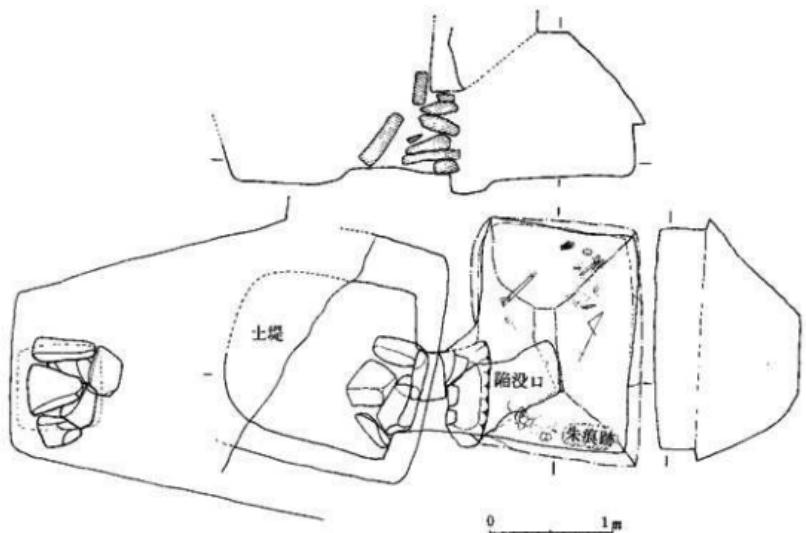
4. 54-4号墳(第9図)

3号墳の西方16mの位置に、堅坑を西に、玄室を東にして構築されていた。

堅坑は、大半が西側畠地との境界土堤下にかかり、完掘することはできなかったが、東を基底とする半円形の掘り方が予想された。基底面は幅1.8mではほぼ垂直に掘り下げられ、側壁は坑底へ向けて大きく傾斜する。坑底の計測値は、幅1.8m、長さ1.5mの半円形となる。土堤断面に残された黒褐色土層面の掘り込みから坑底までの深さは約2mほどであった。

羨門は、堅坑基底面の中央よりやや南寄りに、坑底から若干高い位置を底辺として幅6.5cm、高さ6.5cmと方形に近く穿孔されていた。羨道の長さ約50cm、羨門から30cmほど入りこんだところに幅80cm、深さ10cmの掘り込みがあり、玄室との区切になっている。恐らく玄室内部の排水溝の役割を果していたものと推定される。羨門の閉塞は、西諸県地方に多い石積型で、砂岩や安山岩の礫や割石を平積して閉塞したものであった。石積の前面には、さらに斜に数個の扁平な砾岩を立てかけていた。この閉塞に使用されていた砾石や割石の総数は、大小16個を数えた。

玄室は、羨道から左側へ掘り広げられた、南北を長軸とする長方形片袖型の平面構成をとっていた。床面は、奥行1.2m、南北の幅1.7mを測る。天井は、南北に棟の走る寄棟造で、天井勾配は45°～50°をなす。床面から30～40cmの高さに四方をめぐる幅10cmの棚状施設が、家屋形の庇を形成している。床面は中凹みとなり、羨道へ向ってゆるい傾斜がつけられるなど、羨道凹みへの排水が考慮されていた。



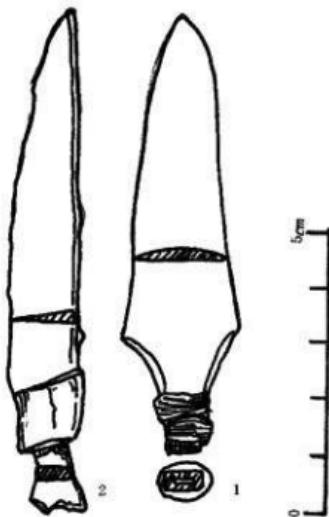
第9図 54-4号地下式横穴式石室図

遺骸は、掘削時の大井落盤で原型をとどめないが、床面に遺存した骨片や骨粉の痕跡から、2体が埋葬されていたものと推定される。頭位は南南東におかれ、頭蓋骨のあった付近には朱痕が観察された。四肢骨は、ほとんど消滅しており、大腿骨の断片や膝骨の一部が遺存しただけであった。

出土遺物 玄室の北東寄りの位置に、鋒を北東にして遺存した鉄鎌1本、落盤で遺存位置の明らかでない刀子1本が出土しているだけである。副葬品としては極めて質相なものであった。

鉄鎌(図1) 片丸造柳葉形の鉄鎌である。身の長さ55cm、身幅21cm、両削刃を有する。茎部分を欠ぐが、深い矢柄の装着痕のがこる。

刀子(図2) 現長9cm、刃渡り6.8cm、身幅1.5cm反りの少ない刀子である。背厚2mm、茎幅9mm、柄元に柄木残欠が認める。

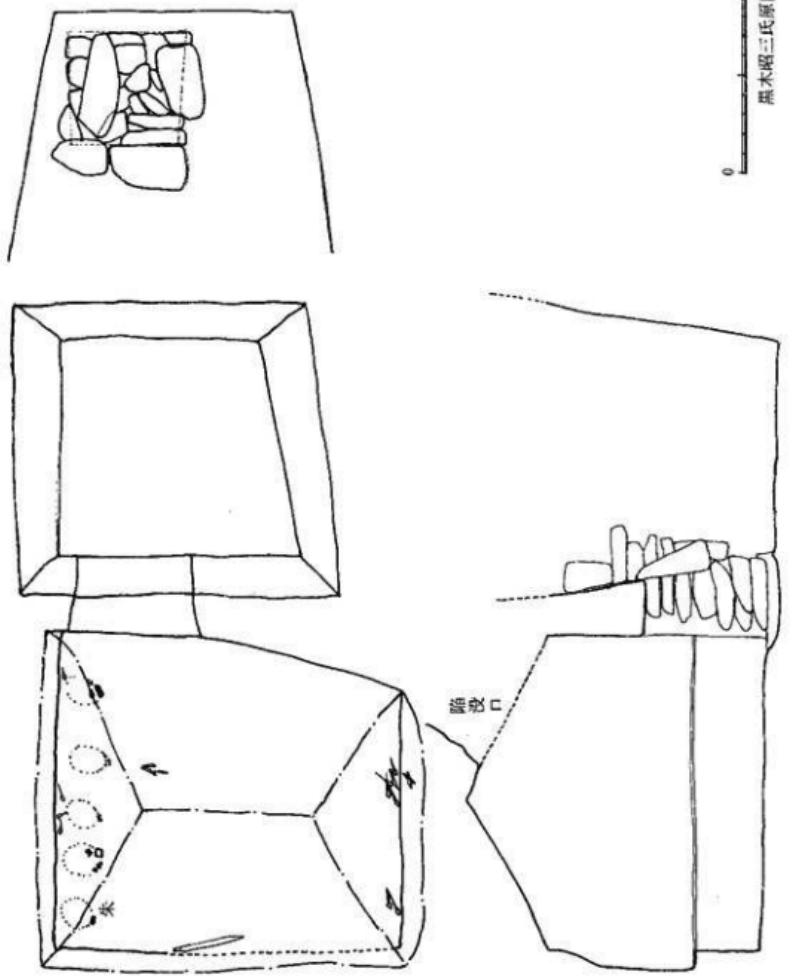


第10図 4号墳出土遺物実測図

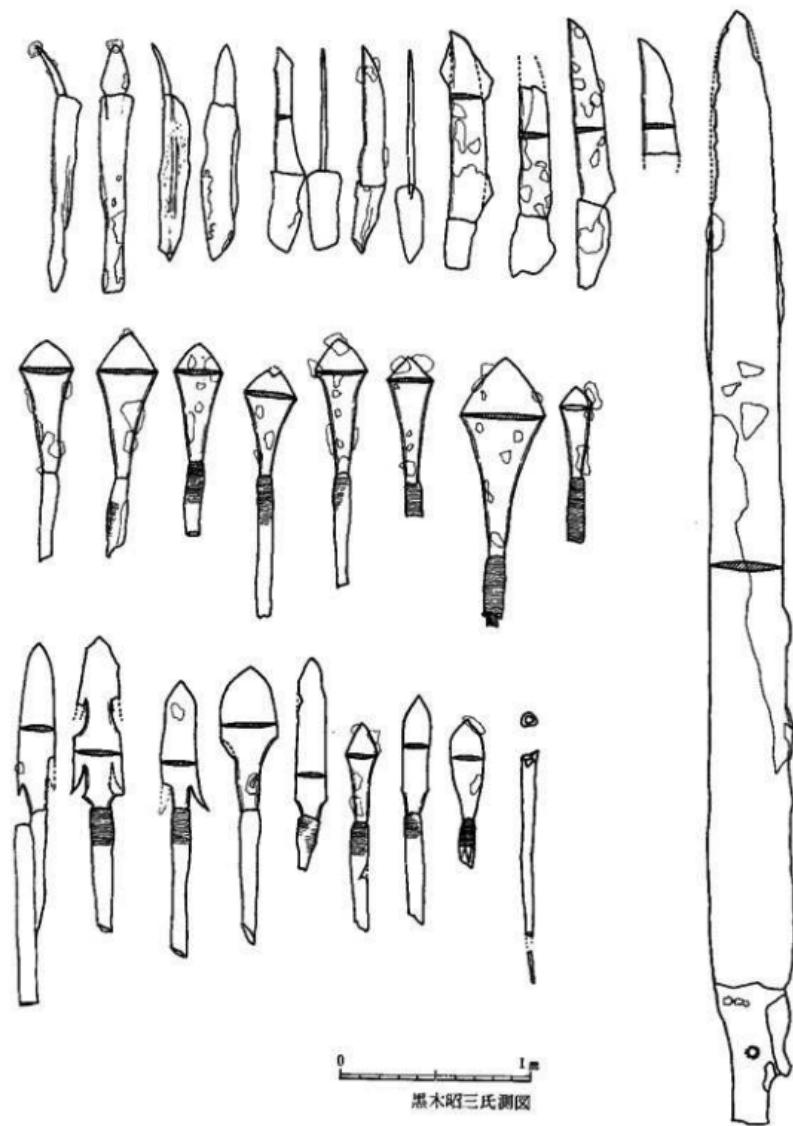
日守地下式横穴構造一覧

	54-1号	54-2号	54-3号	54-4号
堅坑の形態	?		隅丸方形 上縁 170×140 底縁 135×125	半円形? 上縁 190×?
羨道	片袖型平入	片袖型平入?	片袖型平入 64×15×50 溝あり、朱痕付	片袖型平入 62×50×65 溝あり
閉塞方法	輕石	砂岩	板石による蓋式閉塞	剥石の平積閉塞
玄室平面形	長方形状 150×100(推定)	長方形状	長方形状 195×148	長方形状 175×125
大井の形態	寄棟造 高さ95	寄棟造 高?	寄棟造 高113	寄棟造 高117
棚状施設 床面からの高さ	四方? 約40	四方? 約40	三方 幅20~10 40~42	四方 幅10~5 35~40
玄室・羨道を結ぶ 長軸方向	E 10° N	E 10° N	N 28° W	N 63° E
玄室の長軸方向	N 10° W(ほぼ南北)	N 10° W(ほぼ南北)	N 28° W	N 26° E
人骨	?	3体か?	1体 朱痕 頭蓋骨著しい	2体 朱痕
頭位	-	南	東北東	南南東
遺物	?	貝輪1, 刃1, 刀子1, 鉄鎌	剣1振, 矢, 鉄鎌 2	鉄鎌1, 刀子1
備考	3号壁面の鍔先跡著しい			

黒木昭三氏原図
1m



第11図 高崎町大字前田 假屋尾地下式 8号墳実測図



第12図 高崎町前田 仮屋尾地下式3号墳出土遺物実測図

IV 結 語

日守地下式横穴の発掘調査は今回が初めてであったが、遺構の存在は、すでに41年の分布調査で確認されており、重要遺跡に指摘されていたところである。それだけに、掘削による遺構発見まで、工事計画が事前に把握されず、全面的な調査体制のとれないまま臨床的な緊急調査に終始する結果になったのは残念であった。しかし、今回の発見で都合10基の遺構の存在が明らかになったことによって、隣接する仮屋尾遺跡を含む日守地下式横穴群集地を再確認できたことは多すべきかもしれない。従って、今後、遺跡の破壊消滅を未然に防止するためにも、この地区的開発行為には、一層嚴重な監視体制の強化が要請される。

遺構について

今回発見の4基は、いずれも堅坑と墓室を結ぶ狭道を墓室の片側に寄せ、寄棟造の天井に対して平入となる「片袖型」の平面構成をとっていた。このような片袖型平入の遺構は、高原町旭台の6号～11号、隣接の仮屋尾1号・3号、或は高崎町鶴齋塚原などに類例が求められる。いずれも四方に櫛状施設をめぐらし天井段線の明瞭な寄棟造の家屋形という共通性がある。この点、日守の遺構では、3号・4号共に棟幅が狭まり段線も明確さを欠き寄棟造からの変形とみなされる。閉塞については、旭台が比較的大きな磯石積となっているのに対し、日守や仮屋尾が割石・板石の平積或は立石蓋式とする若干の違いはあるが、美門石積閉塞法としては共通した形態として把握される。また、1号墳にみられた家屋内部の東柱表示は、旭台の6号、7号、9号の浮彫とも関連するもので、それをより明確に装飾化している事が注目される。このように、片袖型平入美門石積閉塞の遺構が、日守周辺に集中することは、堅坑上部の蓋石式閉塞型が灰塚遺跡や平松遺跡など他の地方に限られるように、高原・高崎地区を中心とする一つの地域型とみてよいであろう。

1号墳の浮彫について

玄室の切妻部分に東柱を表わしたとみられる角柱の浮彫は、旭台や、小林市尾中原などに散見された。しかし、日守54-1号の東柱の浮彫は、従来の浮彫とは、やや類を異にするものであった。棟に接する上部の抉り込みと、これを画する2本の沈線文は、明らかに柱上にのせられた斗の表示として理解されるものである。埴輪にも群馬県茶臼山古墳出土の切妻造食庫埴輪にみるよう東柱表示したものがあるが、「斗」を示したものは皆無といってよく、少なくとも寺院建築以前の日本の家屋にはみられなかった様式といわなければならない。建築史上、斗組様式は、明らかに中國建築の影響を受けたものであり、佛教建築に始まるといわれる。肘木等の表示はなくまだ組物までにはいたっていないが、本例は、何等かの形で中國建築様式を受容した建造物があり、それを模倣することによって生まれたものとおもえるのである。建築史上からも貴重な資料といえよう。更に憶測が許されるならば、旭台の彩色直線文による柱や貫、檼木の表示といい、浮彫による棟、柱、東柱の表現は、死後の生活を意図した葬送觀による家屋墓と考えられる。そこには墓室に朱塗の柱や梁、斗供を描き家屋内部を表示する朝鮮の墓

室例に通じるものがあり、九州の装飾古墳の中でも他に例のない地下式横穴の家屋内小屋組表示の装飾は、直接的ではないまでも、意外とここらに源流がたどれるのかもしれない。

築造年代

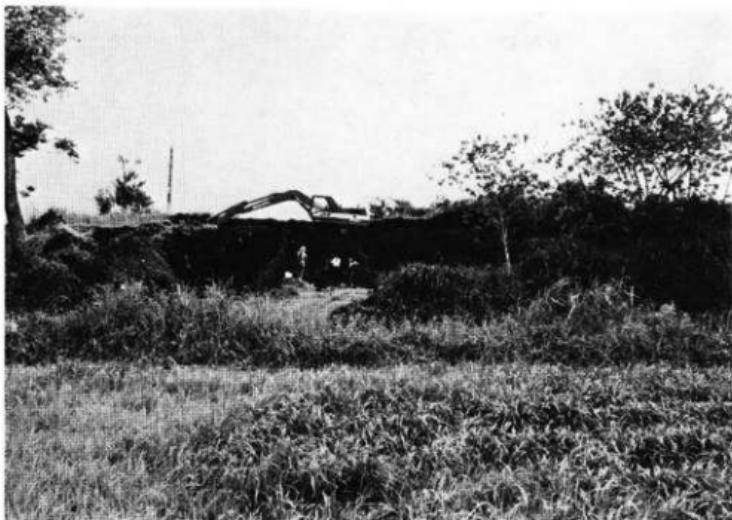
4基の築造年代については、出土遺物が貝輪・鉄鎌・刀子・劍だけで量的にも少なく、時期比定の決めてとなる遺物に欠けるだけに迷断し難い。貝輪には、国富町大坪出土のゴボウラ製をはじめ、イモガイヤや拿貝類がみられる。このうちイモガイヤ製横型貝輪は、えびの市島内（2号）、小木原（101号）野尻町大荻（3号、10号）、国富町市ノ瀬、高崎町原村等がある。いずれも共伴遺物から6世紀に比定されている。4号の細根片丸造柳葉形の鉄鎌は、地下式横穴からの出土例は少ないが、成川遺跡の五類に類例が求められる。3号の平根菱形鎌は、諸県地方の地下式横穴に最も出土例の多い形態である。隣接の仮屋尾や旭台に類例をみると、なかでも仮屋尾3号では5世紀代に位置づけられる鉄鎌を共伴するなど、遅くとも6世紀前半に比定されるものであろう。また、3号の陽扶三角形鉄鎌は茎のかつぎ部分にひねりが加えられており、地下式横穴では類例の少ないものである。時期的には、槍や引手の棒状部分にひねりを加えている馬具との関連が考慮される。尚且細身の短剣は際立った特徴はないが、比較的茎の短かい点が留意される。これまで地下式横穴をはじめ、板石積石室や、成川遺跡の出土品の中に多くの類例をみるものである。

時期比定の決め手となる遺物がないだけに困難であるが、類例遺物の年代観からすれば6世紀前半に位置づけてもよいかかもしれないが、遺構形態にみる寄棟造の変形を考慮すれば、旭台や仮屋尾より後出とみなければならない。相対的にみて日守地下式横穴群は6～7世紀の築造とみるのが妥当と考えられる。ただ、1号の東柱にみた斗表示が、仏教建築との関連ありとすれば、年代観はさらに大きく引き下げるかもしれないが、現段階ではあえて引き下げる根拠はないものとおもう。個々の編年についてなお今後の課題としたい。

（茂山 譲）

参考文献

- | | | |
|----------------------|----------|-------|
| 宮崎県文化財調査報告書 第9集 | 宮崎県教育委員会 | 1964年 |
| 宮崎県文化財調査報告書 第15集 | 宮崎県教育委員会 | 1970年 |
| 宮崎県文化財調査報告書 第19集 | 宮崎県教育委員会 | 1976年 |
| 灰塚遺跡 | 宮崎県教育委員会 | 1973年 |
| 日本原始美術大系 6・墜曲・石像物 | | 1977年 |
| 齊藤忠　日本装飾古墳の研究 | | 1978年 |
| 成川遺跡　文化庁 | | 1973年 |
| 古代史発掘 8・装飾古墳と文様 | | 1974年 |
| 九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1) | 宮崎県教育委員会 | 1972年 |



(1) 遺跡全貌



(2) 遺跡発見状況



(1) 54-1号玄室状況



(2) 54-1号束柱状況



(1) 54-1号韁帶品



(2) 54-2号閉塞石



遺跡の現状



3号地下式横穴の穿穴状況



3号墳の堅坑と閉塞状況

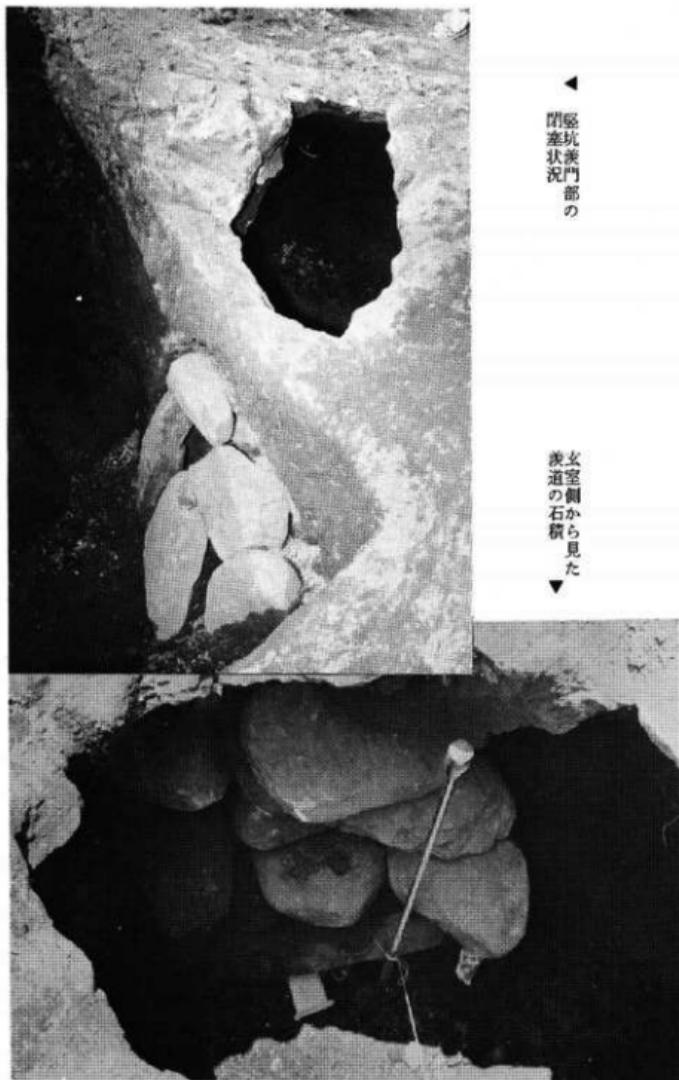


3号墳の玄室内部と淡道

4号墳の閉塞

閉塞坑羨門部の

羨道の石積
▼



圖版 7

鐵錐・刀子・劍

1
2

3
4

第三号出土品
第四号出土品





V 上示野原遺跡発掘調査

北諸県郡高崎町大字大牟田上示野原

県埋蔵文化財調査員 茂山 譲

〃 石川 恒太郎

県文化課主任主事 岩永 哲夫

本文目次

I 遺跡の位置と発見の動機	9 1
II 遺構について	9 3
III 出土遺物	9 7
IV むすび	1 0 1

挿図目次

第1図 遺跡付近地形図	9 1
第2図 上示野原遺跡平面図	9 2
第3図 2号竪穴実測図	9 5
第4図 出土土器拓影（1号竪穴）	9 8
第5図 “（2号竪穴）	9 9
第6図 石器・鉄鎌・小玉	1 0 0
第7図 龜形土器	1 0 0
第8図 小形土器	1 0 1
第9図 調査前の出土土器	1 0 2

図版目次

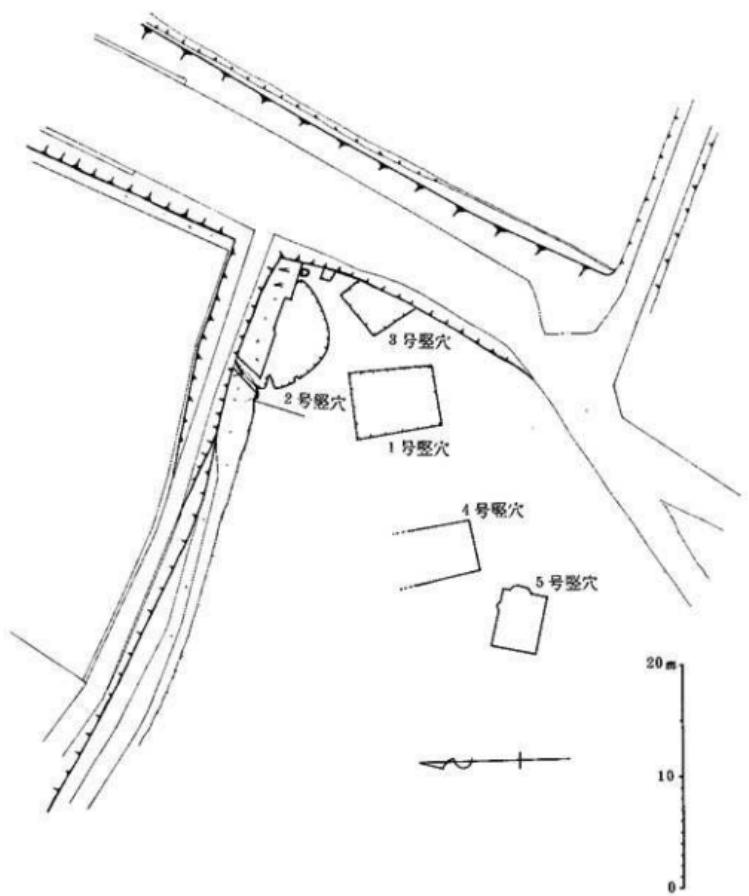
図版1 遺跡遠景	1 0 5
図版2 調査状況及び遺物出土状況	1 0 6

I 遺跡の位置と発見の動機

上示野原遺跡は、高崎町の中心部に近い国鉄吉都線高崎新田駅の西方1kmの地点にあり、大字大牟田字上示野原4213番地に位置する。この地は、高崎町を貫流する高崎川の右岸にあたり、支流の荒場川に開拓された標高150～180mのシラス台地が遺跡になっている。荒場川との比高差20mの台地上は、ゆるやかな起伏をもつ畠地が開ける。荒場川を渡り新たに設けられた切通しの農道を登り詰めた左側台地縁の近くが、今回調査した遺構の所在地となっていた。



第1図 遺跡付近地形図



第2図 上示野原遺跡平面図

上示野原遺跡発見の直接のきっかけは、高崎町が地域の経済開発を促進させる目的で推し進めた企業誘致の為の敷地造成工事によるものであった。上示野原の畠地およそ 3ha が工場敷地として削平した結果、多量の土器と、ボラ層内に陥入した長方形状の黒土の存在から遺跡の発見となったものである。結果論ではあるが、造成工事着手前の道路取付工事の際に完形土器が採取されており、かつ、切通しの断面には、ボラ層に陥ちこんだ竪穴遺構も観察できるなど、竪穴住居跡群の存在を予想させる条件がそろっていただけに、遺跡の大半を埋没したことは残念であった。町教委で遺構の存在を把握されたのはすでに造成工事も完成間近い頃で、遺跡の重要性を察知された町教委文化財係の黒木昭三氏の奔走の結果、幸うじて、敷地東北隅の一隅だけ、ボラ層面に露出した竪穴遺構が削平を免れたのであった。

49年の夏に実施された遺跡分布調査の折、黒木昭三氏の案内で現地を訪ね、ボラ層に陥入した黒土部分が竪穴遺構の陥込みであることを確認したのであった。その後、町教委から調査の要請を受けた県文化課では直ちに発掘調査し、遺構の確認を行なう予定であったが、諸般の事情で延び延びになり、ようやく50年の7月22日から26日までの5日間発掘調査したのであった。

II 遺構について

造成地の東北隅に残された竪穴遺構とみられる黒土の陥込みは大小5ヶ所を数えた。造成のために遺構の上層部は削平されており、遺構の掘り込みや原状を把握することは困難であった。僅かに残された北側農道との境界土堤の断面から掘削前の層序をある程度観察することができた。それによると、元の地表面下60~100cmの深さまで削平されており、残された遺構はいずれも竪穴のなれば剥ぎ取られている状況にあることが判明した。削平部分の層序は次の通りであった。地表下23~25cmの表土層をI層として、II層には黒褐色のスコリア層(15~30cm)、III層に黒色土層(20~25cm)、IV層 ボラ混入漸移層(20~25cm)、V層が火山性軽石層(50~60cm)となる。竪穴は、V層のボラ層に掘り込まれていたわけで、上層の削平によって、この軽石層内に陥入した黒褐色土が、明瞭に遺構の存在を示したものである。

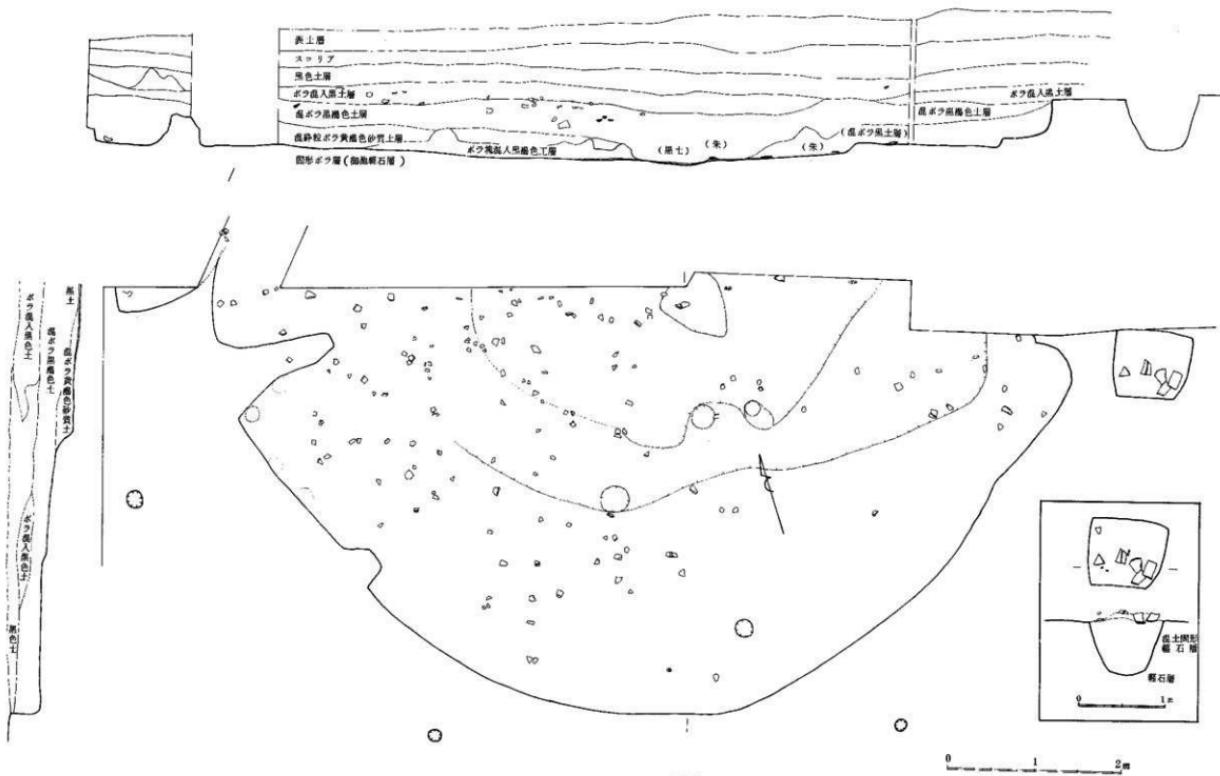
5ヶ所の竪穴は、2号が隅丸方形で、他は全て長方形竪穴であった。調査期間の制約もあったことから、比較的上層部の掘削が少ないと見られた1号、2号、3号の3ヶ所を充掘調査しただけであった。

1号竪穴 南北を長軸とした長径2.6m、短径5.5mの長方形竪穴である。軽石層内に残された壁高は30cmであった。竪穴内部の埋土を排除した竪穴床面には柱穴を検出することはできなかった。また竪穴周間にもそれらしき柱穴は確認できなかった。

3号竪穴 東側が造成地への導入路にかかり一部切断されており竪穴の全形を確認することはできないが、遺存部分から幅5mで1号竪穴に類似した長方形竪穴だったとおもわれる。竪穴の長軸方位はN 32°W。現存の側壁高は38~40cmであった。1号同様、柱穴は検出できなかった。

4号竪穴 未調査であるが、軽石層面に陥込み踏から幅4.7m、長さ6~7mの長方形が計測された。





第3図 2号竖穴実測図

5号竪穴 これも発掘することができなかつたが、軽石屑内への掘り込みは15cmほどを残すだけで上層は大半を削られていた。陥ち込み面の広さは4m×5.3mと、やや小形であるが、東側に張り出し部分らしい形跡のみられる堅穴であった。長軸方位が東西にあり、前者との違いがみられる。

2号竪穴 北側境界の土堤下にかけて遺存した竪穴である。当初円形竪穴とみられたが、北側農道側の断面にみられた掘り込み位置から円形の復元ができず、西側の一角に竪穴内部への入り込みの確認もあって、東側にも同様の入り込みをもった隅丸方形の竪穴になるものと推定された。他の長方形竪穴に比べて規模も大きく、径9~10cmを測るものであった。周壁高10cm、周壁から2m内側に約20cmほどの段があり、内部に1段低い床面が形成されていた。このため、周囲に床の間状の段を構えた竪穴であることが推測されたが、境界土堤下の発掘ができず、全貌を確認するにはいたらなかった。

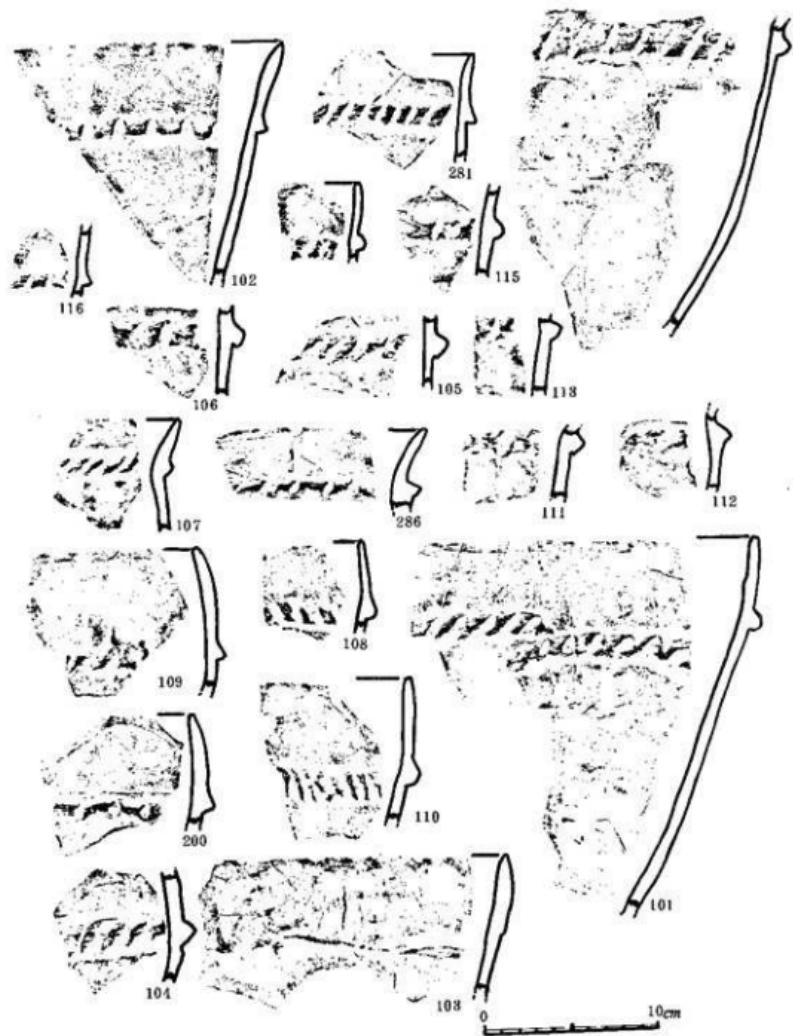
柱穴は、外周沿いの段と内側床面の境に3個、周壁西側の入り込み部分に4個、それに堅穴外周に3個が検出されただけである。これらの柱穴は、いずれも径20~80cmのもので、主柱穴とみなされるような柱穴は発掘範囲内に検出することはできなかつた。竪穴周囲の柱穴はいずれも垂直に掘られており、外周から斜に立てかけた棒木穴ではなく、少なくとも、垂直の柱穴の状況から軒先を支えた軒もたせの支柱穴ではなかつたかとおもえるものであった。

III 出土遺物

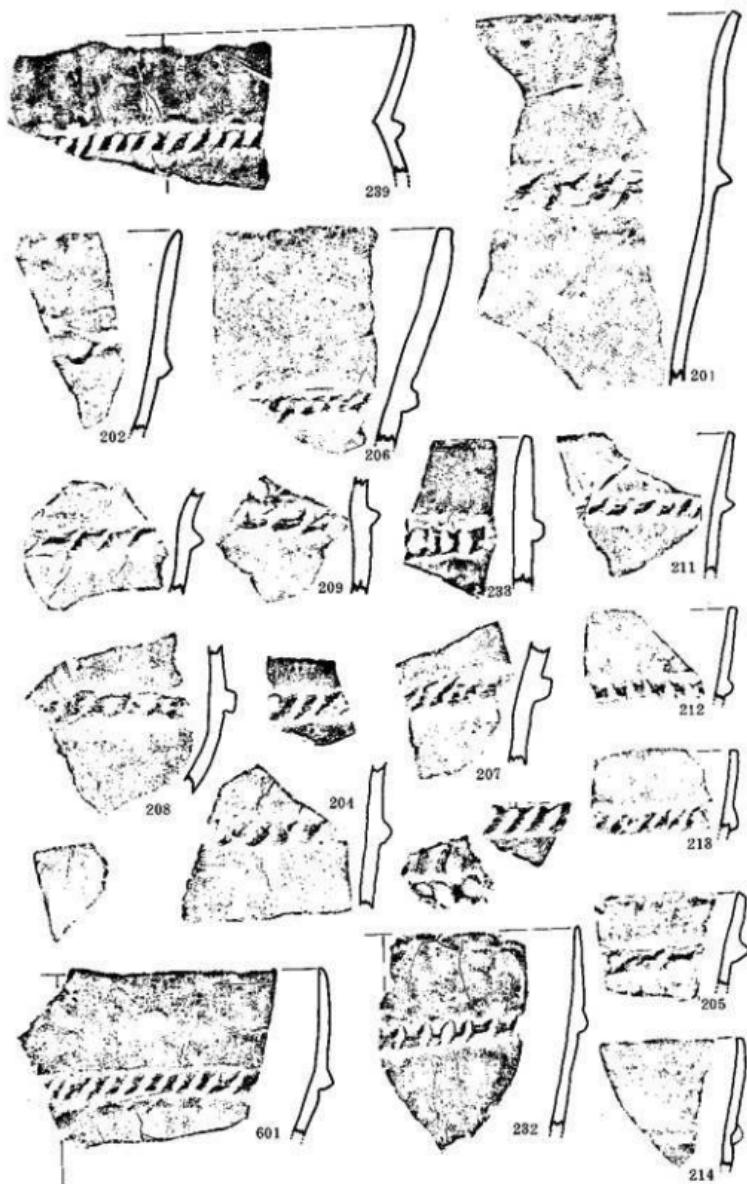
各堅穴から多量の上器が出土しているが、各堅穴の上器間には著しく時期差を示すものではなく、ほぼ同時期の堅穴遺構であることを示唆するものであった。

出土上器は、ほとんどが破碎し、中には意図的とおもえるほどに細かく破碎していることもあって、復原できたものは僅か数例にすぎなかつた。この傾向は特に2号竪穴の土器に著しく、自然放棄ではなく作為を感じさせるものであった。比較的まとまりをもって出土したのは1号竪穴で、あるていど復原可能な壺形土器もあり、唯一の完形品であった壺形の小形土器も出土しており、生活跡としての確証を示すものであった。このほか、1号竪穴には、長頸の鉄鐘と見られる長さ10cmほどの鉄片と、脚台状の底の断片とみられる須恵器片も検出されている。これらは1号竪穴を含む上野原遺跡の時期比定の上で注目される遺物であった。2号竪穴から出土した高環形土器は、その復原器形から古式土師器とも受け取れるものであった。このほかに特殊な遺物として、2号竪穴から径4.7cm、厚1.2cm、中央に径0.5cmの円孔をもつ扁平な軽石製の有孔円盤1個と扁平打製石斧1個のほか、縄文期の遺物とみられる打製の石槍状石器や石鏃片、石刃などが検出されているが、出土状況から直接竪穴に関係するものとは考えられない。

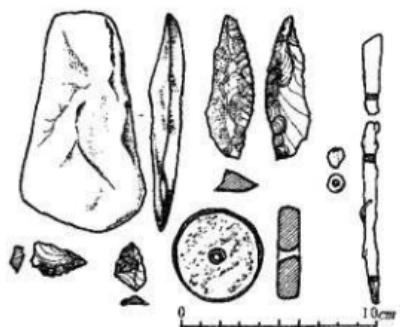
最も多量に出土した土器片は、大方壺形土器の破片とみられるもので、口縁部直下頸部に一条の絡繆状の突帯をめぐらしたものであった。これらの中には、巻きつけた繩の様に突帯の片端を下に垂らしたものもみうけられるなど、いわゆる絡繆状突帯文土器として位置づけられる土器である。



第4圖 出土土器拓影（1号堅穴）



第5図 出土土器拓影(2号竪穴)



第6図 石器・鉄器・小玉
1~5・2号窓穴出土、6~7・1号窓穴出土

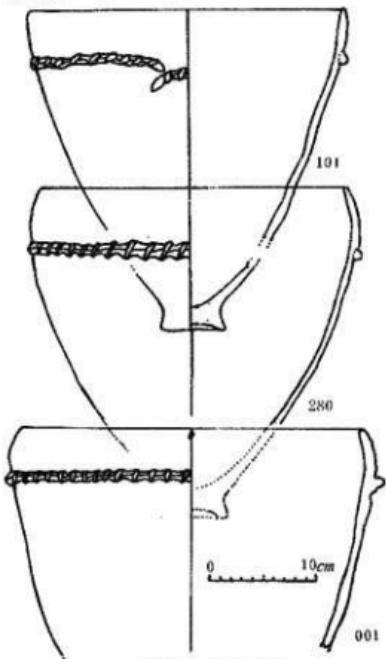
これらの縦縫突帯文土器は、口縁部の形態によって3種類に分類される。(1)は、口縁が「く」の字状に屈曲して外反する型のもの、(2) 口縁から胴部にかけてほぼ直口のもの。(3) 口縁が器の内面に向って湾曲する型のものの3種類である。これらは、更に、口縁から突帯までの長さの長短によって、各2つに細分することができる。胴部の張りは小さく、わずかに湾曲する程度で底部へ向って直行するものが多い。底部はやや脚台状の小さな掲げ底を呈する。

遺構別にみると1号窓穴では、縦縫突帯をめぐらす窓穴上器片は19点が採取されている。直口または軽く内湾するものが多く、「く」の字に外反する口縁をとるものは1点だけである。101は、口径30cmほどの器形が推定復原できるもので、貼付突帯の末端の垂れ下げがみえる。壺形土器はほとんど出土していない。わずかに、楕円の口縁から「く」の字に屈曲した頭部から下腹部の張る丸底の器形が予想される小形の窓穴上器片がみられるだけである。高環形土器としては脚柱部分が2個体分出土している。壺では柄差しとなるもので、脚底は屈折して掘開きになることが予想される。

脚柱は比較的短かく、中膨らみとなる。壺部は、口縁部の断片があるだけで完形は明らかでないが、直線または楕円に開く薄手の壺部がつくものと推定される。

126の壺形土器は、口径5cm、器高25cm、唯一の完形土器である。

2号窓穴出土の上器は、窓形土器で占められており、壺形土器は、口径12cmほどの破片1点がみられるだけである。高環形土器は磨耗した脚柱部分が1片出土している。器種に乏しい。ただ焼成度のよい丹巻上器の網片が検出されていることは注目される。窓形土器で縦縫突帯を有するものは42片ほどあるが、大半は直口型で、若干の内湾型を含む。直口型のうち厚手のものに口縁部の長いも



第7図 窓形土器

のがみられる。内湾型は、突唇までの口縁部の短かいものが多い。床面から「く」の字に屈曲外反する型式の破片が1点出土している。

3号堅穴の壺形土器は、口縁の直口乃至外反型が多く内湾型がほとんどあたらない。縦縫突唇のある土器片は口縁部のあるものが少なく、逆に突唇のない短かい口縁断片が多く出土していることは、これらが突唇貼付土器の口縁になることも考えられる。壺形土器は1、2号同様少なく、屈曲部に刻目を施した二重口縁の断片が1片検出されている。高环上器には、环部が比較的深く、底部近くに接合部分の屈曲をみせる外部に短脚で脚開きの脚台が予想される破片が検出されている。このほか薄手の丹塗土器の細片が採集されているが器形は明らかでない。

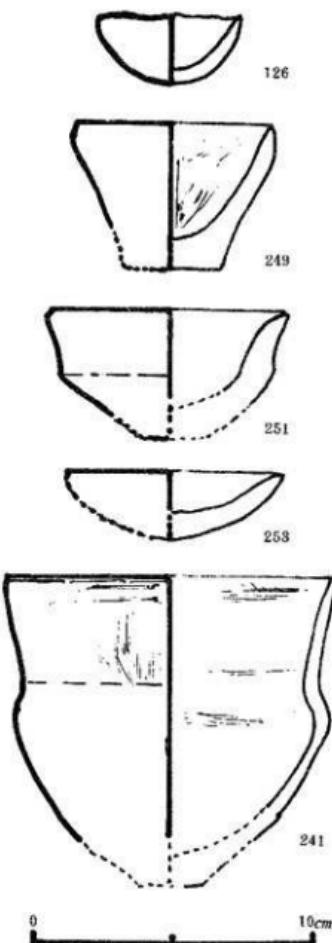
以上の様に、各堅穴間の土器には著しい型式差は認められない。また器種においても壺形土器と高环上器が主となり壺形土器の少ないことなど共通した出土状況を示している。細片化した土器片の中に小形土器が散見されたことは、円錐土器片と共に注目されることである。

IV むすび

堅穴遺構

上示野原の5棟の堅穴は、隅丸方形と推定の2号堅穴以外は、すべて長方形プランの堅穴で構成されており、画一化的傾向がみられる集落遺構であった。

長方形堅穴の長軸方位は、1号と4号が南北に3号堅穴は北西—南東、5号堅穴は東西と、それぞれ異なり、方位の統一はみられなかった。各堅穴の平面積は、1号の4.6m²を最小として、3号と4号が27.6m²、5号堅穴21.6m²であった。隅丸方

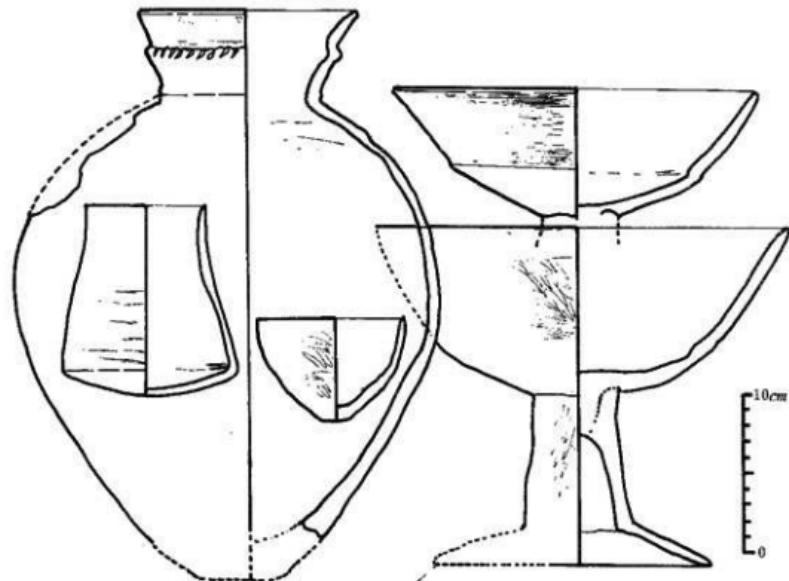


第8図 小形土器

形の2号竪穴は推定面積80m²が予想される大形住居跡である。これらの竪穴は、いずれも明確な主柱穴が検出されず家屋構造を判断することは困難であった。また炉跡についても、若干の木炭や炭化物の痕跡が認められた2号竪穴以外では、全く検出されず果して住居跡となるものか断言できない一面もあった。しかし、それぞれに煤付着の壺形土器が出土しているだけに全面的に否定されるものではなかった。

2号竪穴で上層部と床面出土の土器の間に若干の形態差が認められたが1片だけであり、出土量の差を除いては各竪穴間の土器に著しい形態差はなく明瞭な時期差は考えられず、大型住居の2号竪穴を中心構成されたほぼ同時期の集落群とおもわれる。ただ、長方形竪穴が2号竪穴の付属建物になるのか或は、長方形竪穴を単位とした集落の集会所か共同作業所として2号竪穴が位置づけられるかについてはなお検討を要する。わずかに外周に検出された垂直掘込のビットから持上げ軒の予想される2号竪穴の家屋構造からは、2号竪穴が共同体の中心的建物としての役割をもっていたのではないかとも考えられる。

2号竪穴の東側に検出された一辺80cm、深さ60cmの小坑は、上面から001の縦縫突帯土器を出土しており、一種の貯蔵用穴倉が予想されたが、その性格を明確するにはいたらなかった。また、2号竪穴床面にみられた段差については、これをベッド状遺構とみるか、あるいは竪穴拡張に伴う段差とみるか検討を要するところであったが、遺構の完歴ができなかったことによって課題を残すことになった。



第9図 調査前の出土土器（高崎町教育委員会保管）

各堅穴ともくずれ易い軽石屑内に掘り込まれているだけに、周壁の保護や土間の堅築にはそれなりの工夫があったとおもうが、それらを十分に確認することができなかつたのは残念であった。

堅穴出土の土器が、いずれも細かく破碎されており、ほとんど完形品を認めることができなかつたことは、堅穴放棄に伴う意図的な破碎行為があつたのではないかと考えられる。盃形土器や円錐土器などの小形土器や手捏土器の存在は、放棄に関連した何等かの祭祀の行なわれたことを示す痕跡ともうけとれるものであつた。

上示野原遺跡は造成による半壌状での確認調査であり、当初から集落構成を意図したものでなかつただけに多くの課題を残したものであつた。しかし、後の土器の項でもふれる様に古墳期にかかる長方形プランに画一化されつつある堅穴集落遺構について、その一端なりをかい間見ることができたことは諸県地方における集落調査上貴重な資料を得ることになった。

絡繩突帯壺形土器

本遺跡を特色づける口縁部に絡繩突帯をめぐらした壺形土器は、口縁部の形態から3分類され、さらに口縁から突帯までの長短によって6つに細分されることを先述したところである。

これらは各堅穴に出土しており、出土量に若干の差はあるものの十器間に際立った肩位差は認められなかつた。強いていえば、2号堅穴で1類土器がⅠ・Ⅲ類土器より若干下層に検出されたといどである。この差が土器自体の時期差を示すものであれば、2号堅穴は、他の長方形堅穴に若干先行して構築されたとも考えられるが、わずか1片だけに時期差を断定するには横積性に欠けるところである。ただ、相対的にⅢ類土器を主体とした1号堅穴にくらべ、2号堅穴にはⅡ類土器が多く出土している事は注目されるところである。

従来、これらの絡繩突帯土器は成川式土器として取扱われてきたが、最近、地域によってかなりの形態差や、共伴遺物に違いがあることが明らかにされ、次第に細分化と時期差が検討されてきていることは周知のことである。最近の例によれば、上示野原出土の絡繩突帯壺形土器は、辻堂原遺跡のⅡ類や平田F類、G類に類似が求められる。両遺跡では共伴する須恵器の編年觀から、辻堂原では古墳前期に^{泰1}萩原遺跡では古墳後期に位置づけ、十師式の鬼高・真間期と対比する編年試案が提示されている。上示野原遺跡においても、須恵器小片の混在をみたが、共伴資料として時期比定の決め手となし得るものではなかつた。一般に須恵器の出土個数の少ない諸県地域では、須恵器に編年基準を求めるることは困難といわなければならぬ。

一方、共伴した高壺形土器にみる屈曲する坏部と、脚柱をもち、くの字に屈折して裾開きとなる脚底の復原形態には、熊本の塚原古墳群の第1類や、福岡県布田遺跡・狐塚遺跡の高壺の中に類似が求められ、土師式の和泉期に比定されている六野原地下式横穴3号・10号出土の高壺に通じるものがある。このことは、古式土器との接触も考慮され、今後の編年觀確定上注目すべきこととおもわれる。

このような高壺土器との共伴関係を考えると、絡繩突帯壺形土器は古墳期に位置づけられるることは否めないところであろう。それが果して、古墳前期にかかるのか、中・後期に比定されるかについては、

なお比較検討が必要である。

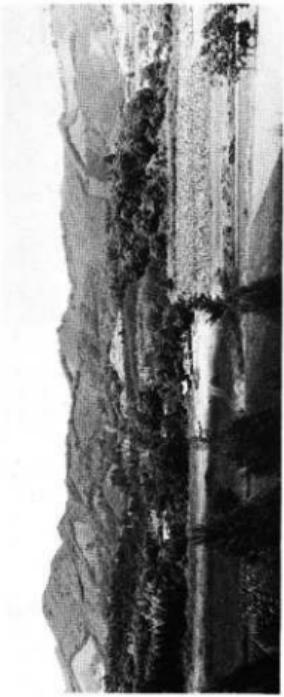
県下の縦縞突帯壺形土器の分布をみると、西諸県・北諸県の霧島山麓に分布が限られることは、この地域が県内有数の地下式横穴の群集地だけに、その時期比定ともかかわって、縦縞突帯壺形土器を伴う住居跡群と地下式横穴群との関係など今後に検討るべき課題といえよう。

(茂山 譲)

引用文献

- 和島誠一・田中義昭 「住居と集落」『日本の考古学』Ⅲ、1967、
玉口時雄 「土師器とその集落」『日本考古学の現状と課題』 1974、
『成川遺跡』 文化庁 1978、
『狐塚遺跡』 篠島市教育委員会 1970、
『辻堂原遺跡』 吹上町教育委員会 1977、
『荻原遺跡』 姶良町教育委員会 1978、
「史跡名勝天然紀念物調査報告 第13輯」 宮崎県 1944、
武末統一 「福岡県早良平野の古式土師器」『古文化論叢』第5集 九州古文化研究会 1978、

道 滯 道 墓



圖版 1

